第46回少年の主張全国大会

── わたしの主張 2024 ──

報告書

National Institution For Youth Education
国立青少年教育振興機構

第46回少年の主張全国大会報告書 わたしの主張2024
国立青少年教育振興機構

はじめに

爽やかな快晴の下、11 月 24 日（日）に第 46 回少年の主張全国大会を開催いたしました。

本大会は、中学生が日頃の生活の中で感じた家族や友人、地域の人々に対する思いや感謝、あるいは感動したり感銘を受けた経験、更には将来への決意などを自分の言葉で表現し、同世代のみならず社会に向けて発表する場として、昭和 54（1979）年の「国際児童年」を記念してスタートしました。爾来、この大会を通して、多くの中学生の共感を呼び、また大人の方々に現代の中学生に対する理解と関心を深めていただきたいとの思いも込め、毎年実施されています。

今年は全国 3,491 校の中学校から、約 35 万人の中学生が応募してくれました。

そして、全国大会では、各都道府県大会により選抜された 47 名の中から、有識者や過年度大会で受賞した青年等で構成される審査委員会により選ばれた 12 名の中学生が、舞台の上で堂々と主張を発表してくれました。

内閣総理大臣賞を受賞した宮城県代表のケイバージーバさんは、永年にわたり母国の発展に寄与してくださった中村医師の言葉「一隅を照らす」を主題とし、アフガニスタンから日本に来たばかりのころは戸惑いもあったものの、友人や先生方に支えられ、教育を受けられる喜びに気づき、将来は医師として母国の人たちのために役立ちたいとの想いを述べました。

文部科学大臣賞を受賞した千葉県代表の松原　蒼天（まつばら　そうた）さんは、「大切な家族」と題し、胸の裡に秘めてきた亡き母への想いを作文にして発表することで、それまであまり得意ではなかった「感謝の気持ちを言葉にする」ことの大切さを訴えました。

国立青少年教育振興機構理事長賞を受賞した熊本県代表の友枝　紗寧（ともえだ　すずね）さんは、「ついでにしているだけ」と題し、散歩のついでにゴミを拾う祖父の姿を見て、自分もついでに人のためになることに取組み始め、その後けがをしたときに周囲の人たちから支えられた経験を通じ、地域の中で思いやりのある行動をすることの大切さを主張しました。

このほかにも、仲間に支えられて障害を乗り越えたこと、「じゃない方」という少数派になって大切なことに気づいたこと、国際紛争から学んだことや生き方の多様性など、多様な分野のテーマについて主張する中学生の皆さんの言葉は、深く胸の裡に沁み込んでくるものでした。

大会終了後には、今年から審査委員長にご就任いただきました作家の喜多川　泰先生が、発表してくれた 12 人全員に一人ずつ、お声がけをしてくださいました。このことにより、一人ひとりの想いが一層深く、自身の胸に刻まれたのではないでしょうか。

この報告書では、全国大会で発表された 12 作品をはじめ、各都道府県の代表となられた 47 作品全てを掲載しています。いずれも中学生らしい溌剌とした感性豊かな文章で綴られています。一人でも多くの方々に彼らの主張をお届けできれば幸いです。

最後に、本大会の開催に当たり、応募してくださった全国の中学生、地方大会の開催に多大なご協力をいただきました各都道府県並びに青少年育成会議、本事業への助成をいただいた上廣倫理財団、ご後援、ご協力を賜りました宮内庁、こども家庭庁、文部科学省をはじめとする関係機関、団体等の皆様に心から感謝を申し上げます。

令和 7 年　3 月
国立青少年教育振興機構
理事長　古川　和

もくじ

審査委員長講評 …… 1
少年の主張全国大会風景 …… 2
少年の主張全国大会出場者の発表風景 …… 3
少年の主張都道府県大会風景 …… 6
少年の主張全国大会出場者の発表作品 …… 7
＜内閣総理大臣賞　宮城県代表　ケイバージーバさん＞ …… 8
＜文部科学大臣賞　千葉県代表　松原　蒼天さん＞ …… 9
＜国立青少年教育振興機構理事長賞　熊本県代表　友枝　紗寧さん＞ …… 10
＜審査委員会委員長賞　山形県代表　井上　愛奈さん＞ …… 11
＜審査委員会委員長賞　愛知県代表　村木　新さん＞ …… 12
努力賞授与式・努力賞受賞者のプログラム …… 20
少年の主張全国大会努力賞受賞作品 …… 21
審査委員の感想 …… 57
視聴者アンケート・コメント抜粋 …… 62
実施概要 …… 64
少年の主張全国大会を振り返って＜参考資料＞ …… 67

審査委員長講評

46 回目を迎えた歴史ある「少年の主張全国大会」において、今年から審査委員長を務めさせていただくこととなりました。

全国 47 都道府県の代表者の中から全国大会で発表をする 12 名を選考する選考会から、すでにどの主張にも、それぞれの体験からくる学びや、日常生活における本人にとっては重大な疑問、自分と周囲との関わりの中から生まれる葛藤や苦しみ、そしてそれら全てに対して自分なりに答えを考え、それに挑もうと挑戦する姿勢が感じられ、審査員ではなく、これら全ての主張をできるだけ多くの人に読んでもらえるよう活動する応援団でありたいと感じるようになりました。

わからないことはすぐに検索、自己表現といえば絵文字やスタンプ、または写真や短い動画を使って SNS にアップ、人間関係の構築といえば「いいね」やフォロー、ということに慣れている今の世代の中学生にとって、どうしていいかわからない日常の苦悩を、自分の頭で考え自分なりの結論に辿り着くという行為は、慣れないことに対する大きな挑戦であることは容易に想像がつきます。ましてやそれを「作文」するとなると、誰もが「苦手」「私にはできない」「どう書いていいかわからない」と、書き始める前から投げ出してしまうというのは、我々大人も自分の中学生時代を振り返ってみると深く共感できることでしょうし、それを人前で「主張せよ」なんて言われたら、「いいね」や「フォロー」するのとは違って、どう思われるかという恐怖に晒される、誰にとっても恐ろしい試みであることは間違いありません。

特に一番勇気がいるのは「主張する」ことでしょう。我々大人が、発表者である中学生たちほどストレートに、自分という全存在をぶつけるように、何かを主張することができるでしょうか。その勇気があるでしょうか。

指導者や大人たちが忘れてはいけないのは、主張をしてくれた全ての中学生も同じように、自分で考えることも、作文を書くことも、人前で主張することも大の苦手でできれば避けたかったにも関わらず、それらに挑戦してあの舞台に立ってくれたということだと思うのです。

それは賞を受賞したみなさんだけでなく、各都道府県の大会に出場されたすべてのみなさんが等しく同じだけの勇気と挑戦をしたということだと思います。

これから先の人生において、彼らにとって大切なのは「今日何を主張したか」ではなく、答えのない問いに対して自分で考え、言葉にし、それを主張するという数々の挑戦ができたという経験です。彼らの成長速度は恐るべきものがあります。それこそ数年後には、新たな価値観で世界を眺め、本日の主張とは違うことを考えていることでしょう。それでいい。そうであってほしいと心から思います。大切にすべきは、主張内容以上に、その独自の感性とやり遂げるという忍耐力、そして挑戦する勇気ですから。

そういった経験が中学時代にできることが彼らの未来にとって大きな意味を持つと共感していただける指導者、保護者が増え、来年以降もより多くの挑戦の成果がここに集まることを心より祈念しています。

喜多川　泰（作家）

少年の主張全国大会風景

令和６年 11 月 24 日（日）に国立オリンピック記念青少年総合センターにて「少年の主張全国大会」を開催しました。

こちらが「少年の主張全国大会」の会場です。

受付の様子

努力賞受賞者の作文展示の様子

会場内の様子

会場のみなさんから発表者 12 名に激励の拍手が送られました。
この後、いよいよ発表です！

沖縄県代表　島袋　莉安さん

熊本県代表　友枝　紗寧さん

山形県代表　井上　愛奈さん

宮城県代表　ケイバージーバさん

埼玉県代表　鎌形　ひかりさん

静岡県代表　鈴木　颯太さん

千葉県代表　松原　蒼天さん

富山県代表　今井　咲希奈さん

岐阜県代表　林　宏瞭さん

愛知県代表　村木　新さん

島根県代表　田本　怜花さん

山口県代表　中島　実優さん

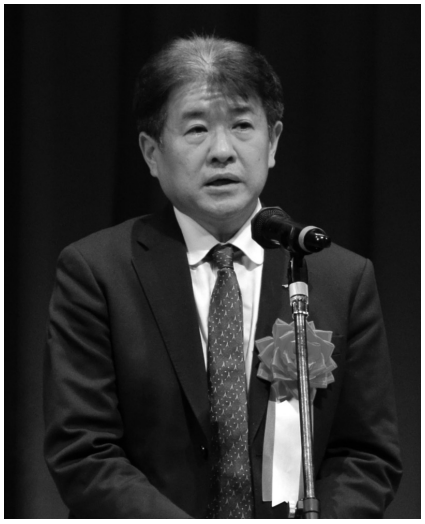
〈内閣総理大臣賞〉
宮城県代表　ケイバージーバさん

〈文部科学大臣賞〉
千葉県代表　松原　蒼天さん

〈国立青少年教育振興機構理事長賞〉
熊本県代表　友枝　紗寧さん

〈審査委員会委員長賞〉
山形県代表　井上　愛奈さん

〈審査委員会委員長賞〉
愛知県代表　村木　新さん

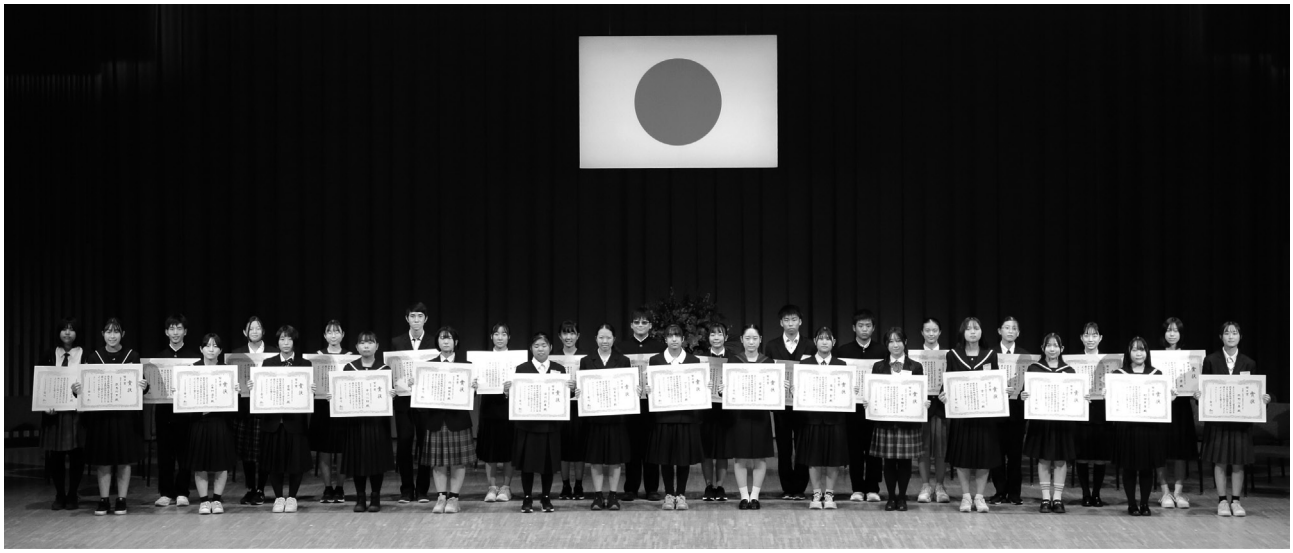


こども家庭庁 長官官房長
中村　英正様からのお祝いの言葉

文部科学省総合教育政策局長
茂里　毅様からのお祝いの言葉

喜多川　泰　審査委員長の講評

第 46 回少年の主張全国大会　発表者・審査委員・来賓のみなさん



国立青少年教育振興機構努力賞受賞者のうち来場した 30 名のみなさん

少年の主張都道府県大会風景

青森県大会

青森県代表　二本柳　凜子さん

青森県大会　記念撮影の様子

山梨県大会

山梨県代表　小寺　輪子さん

山梨県大会　記念撮影の様子

滋賀県大会

滋賀県代表　馬場迫　葵さん

滋賀県大会　記念撮影の様子

鳥取県大会

鳥取県代表　三島　愛梨さん

鳥取県大会　記念撮影の様子

長崎県大会

長崎県代表　古川　万葉さん

長崎県大会　記念撮影の様子

少年の主張全国大会出場者の発表作品

■　誤字・脱字以外は原文のまま掲載しました。
■　全国大会出場者全員に、国立青少年教育振興機構奨励賞が授与されました。

内閣総理大臣賞

【北海道・東北ブロック】

宮城県　栗原市立栗原南中学校　３年
ケイバージーバ　『「一隅を照らす」』

文部科学大臣賞

【関東・甲信越静ブロック】

千葉県　長生村立長生中学校　１年
松原　蒼天　『大切な家族』

国立青少年教育振興機構理事長賞

【九州ブロック】

熊本県　熊本市立鹿南中学校　３年
友枝　紗寧　『ついでにしているだけ』

審査委員会委員長賞

【北海道・東北ブロック】

山形県　白鷹町立白鷹中学校　３年
井上　愛奈　『障害を乗り越えて』

【中部・近畿ブロック】

愛知県　西尾市立鶴城中学校　３年
村木　新　『「じゃない方」になって気づいたこと』

国立青少年教育振興機構奨励賞

【関東・甲信越静ブロック】

埼玉県　草加市立谷塚中学校　２年
鎌形　ひかり　『その人らしさを大切に』

【関東・甲信越静ブロック】

静岡県　浜松市立神久呂中学校　３年
鈴木　颯太　『今を生きる僕たちの使命』

【中部・近畿ブロック】

富山県　高岡市立戸出中学校　２年
今井　咲希奈　『奇跡を起こす子　夢を紡ぐ』

【中部・近畿ブロック】

岐阜県　本巣市立根尾学園　９年
林　宏瞭　『心のつながり』

【中国・四国ブロック】

島根県　雲南市立木次中学校　３年
田本　怜花　『つながりの中に生きて』

【中国・四国ブロック】

山口県　下松市立久保中学校　３年
中島　実優　『空気の読めない私にできること』

【九州ブロック】

沖縄県　沖縄県立開邦中学校　３年
島袋　莉安　『またやーたい』

内閣総理大臣賞受賞

「一隅を照らす」

宮城県　栗原市立栗原南中学校　3 年
ケイバージーバ

「一隅を照らす」という言葉を知っていますか？この言葉は、パキスタンとアフガニスタンで 35 年もの間、病気の人達や貧しい人達のために医療や開拓などの支援活動を行ってきた医師、中村哲さんが好んで使っていた言葉です。

私が中村哲さんのことを知ったのは、小学 4 年生の頃。「日本人でそんな人がいるなんて……。」「とても勇気のある人だ。」と強い感銘を受けました。

「私も中村さんのようになりたい……。」

「困っている人達を救いたい。」

自分には今、何ができるのか、自分はどう生きていくのかを考えることが多くなりました。

私は、アフガニスタン人です。パキスタンの小学校に入学しましたが、父の仕事の関係で、四年生からは、日本で生活しています。

6 年前に日本に来たときは、家族みんな日本語が全く話せず、言葉の違いや文化の違いに戸惑いました。

パキスタンの学校では、よく分かっていた勉強が、日本の小学校では、全然ついていくことができず……「日本語が分からないから仕方がないか。」と思う自分と「悔しい。何とか分かるようになりたい。」と思っている自分がいました。

日本語が少し分かるようになり、日本の文化にも慣れてきた頃、始まった中学校生活。

待っていたのは、辛い日々……。テストのためにどれだけ勉強しても分からないことだらけで、負けず嫌いな私は、仲のいい友達にも負けたくなかったので、ストレスが重なり、「もう嫌だ。死んでしまいたい……。」そう思うことが何度もありました。どうしようもなくて泣いたこともあります。

そんな絶望的だった私を助けてくれたのは、友達や先生方でした。周りの人達が話を聞いてくれたり、おもしろいことを言って笑わせてくれたりして救ってくれました。両親も、いつも応援してくれました。

「私も周りの人を助けてあげられる存在になりたい。」そう思うようになりました。

アフガニスタンには、病院も水もない場所があります。そこで中村さんは、「一隅を照らす」「自分が今いる場所で、自分にできることを一生懸命やる」といった精神で、医師として、人として多くの苦しむ人達を助けてきたのです。

私の将来の夢は、医師です。現在のアフガニスタンでは、女性が学校に通えるのは小学校までで、女性が教育を受け、就職する機会が奪われています。私の親戚も女性は働いていません。私の母は「自分は勉強できなかったから、ジーバにはさせたい。」と、いつも励ましてくれます。アフガニスタンに住む友達は、「平和な国で学校に行けて、勉強できていいね。」と言って毎日泣いています。

日本に来て、辛かったこともありましたが、今は、日本で勉強ができていることが本当に幸せです。日本の国籍を取得し、大学に入って自分の夢を実現させたいと思っています。

家族と話すパシュート語、ウルドゥ語、ヒンディー語、アラビア語、英語、日本語。私が話せる言語です。それを自分の特技として生かしていきたいです。医師になって、母国のアフガニスタンで病気の人達や貧しい人達を助けてあげたいです。私が働くことが、アフガニスタンの女性達の希望につながる。そう信じています。

人間は一人では生きていけません。人から支えてもらい、人を支えて生きています。私を支えてくれた友達や先生、そして両親に恩返しをするために、「一隅を照らす」パシュート語で（یو کونج روښانه کړئ）。まずは、今の自分にできることを、やり続け、やり遂げられる人になりたいです。いつか、日本とアフガニスタンを結ぶ架け橋になるために。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

これまで私を支えてきてくれた人たちに恩返しをするために、今の自分にできることに挑戦し、やり続け、やり遂げられる人になりたいです。そして、将来医師になるという夢を叶え、「一隅を照らす」「自分が今いる場所で、自分にできることを一生懸命やる」といった中村哲さんの意志を受け継ぎ、母国のアフガニスタンで、病気の人たちや貧しい人たちを助け、日本とアフガニスタンを結ぶ架け橋になりたいと思っています。

文部科学大臣賞受賞

大切な家族

千葉県　長生村立長生中学校　１年
松原　蒼天

「大事な話がある。」
小学２年生のある日、
「お母さんがすい臓がんになった。」
と、父から聞きました。「がんなんてきっと風邪みたいにすぐ治るだろう。」そのときはそう思っていました。でも、簡単には治らないこと、治すには抗がん剤をたくさん投与しなければならないこと。それがわかったとき、幼かった僕は、不安な気持ちでいっぱいになりました。

長生村に引っ越したあと、病院が少し遠くなりましたが、それでも、一ヵ月に二、三回は病院に通っていました。

やがて、母はあまり歩けなくなりました。僕は母の体調がだんだんと、悪くなっていることに気づいていました。「どうしよう……。お母さん、お母さん……。」母が、自宅で治療をするようになってから、僕には口に出せなかったことがありました。「お母さん、もう少しで死んじゃうのかな……。」

５年生になった２月３日。３時間目。授業を受けていると、いきなり父に呼ばれました。「お母さんの前では、泣くなよ。」父からそう言われ、僕は、車の中で泣きました。

家に帰ると、母の様子が朝とは違っていました。僕は、母に元気を出してもらおうと一生懸命声をかけました。母はもう何も喋れませんでした。僕は、母の近くで、看護師さんに母との思い出話をしました。思いつくかぎり。たくさん。父と兄が帰ってきたとき、母は、亡くなってしまいました。家族を一人亡くし、僕は、めちゃくちゃ泣きました。11 時 15 分でした。

母が亡くなった後、11 時 15 分をさした時計が偶然目に入る度に、「お母さん。何もできなくてごめんなさい。」と涙があふれそうになりました。また、月命日の３日を迎えると、感謝の気持ちを直接母に伝えたくなって、悲しくなりました。がんの話を聞いたとき。家族の話を聞いたとき。何度も何度も胸が締めつけられるように苦しくなりました。

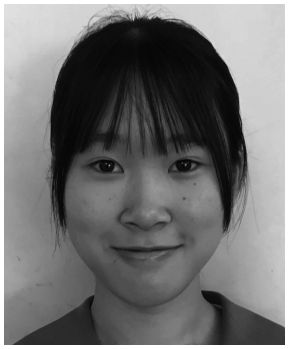
中学に入って、クラス全員で作文を書くことになりました。僕は初めて、母のことを書いてみようと思いました。僕は、文章を書くことが苦手でしたが、なぜかスラスラと言葉が出てきました。

作文発表が終わったあと、不思議と心が軽くなったことに気が付きました。これまでフタをしてきた思いを文章にし、気持ちの整理ができたのかもしれません。
「あんなに真面目な蒼天は初めてみた。僕も家族を大事にしようと本気で思う。」
友達からは、こう言われました。今まで、人からふれられることがなかった話題。当然、自分から口に出すことも避けていました。でも、言葉に表したことで、あのとき自分がどう感じていたのか、何が苦しかったのか、少しだけわかったような気がしました。そしてこの話を聞いて、「家族を大切にしたい。」と思える人が一人でも多く増えるなら、僕が感じた思いをできるだけ多くの人に伝えていきたいと思いました。言葉を使うのは、僕もあまり得意ではありません。しかし、心の中にある思いを「言葉」にすることで、何かが変わるのかもしれないと、今は思っています。

家族との会話。いつもの食卓。何気なく過ぎていく毎日は、皆さんが思っている以上に幸せなことです。今、僕の話を最後まで聞いてくださった皆さん。目の前にいる大切な家族とたくさん話をしてください。そして、恥ずかしがらずに感謝の気持ちをつたえてください。伝えられるときに。自分の「言葉」で。当たり前の時間が、いつか大切な思い出となるように。

この主張をどんな人に届けたいですか？

僕と同じような体験をした人に届けたいです。心の中で悲しい思いをしていても、自分の気持ちを人に話すことをためらってしまう人は多いと思います。でも、誰かに話したり、文章にしてみたりすることで、自分がどんな気持ちだったのか、何が苦しかったのかがわかり、僕のように心が軽くなることもあるかもしれません。そして、この話を聞いてくださった皆さんが、家族とのかけがえのない時間を、今まで以上に大切にしてくれたら嬉しいです。



国立青少年教育振興機構理事長賞受賞

ついでにしているだけ

熊本県　熊本市立鹿南中学校　３年

友枝　紗寧

「ついでにしているだけだよ」一年半程前に他界した大好きだった祖父の口癖でした。

私の家の前に古びた駅があります。周りに店が並んでいるわけではなく、普段は人通りの少ない駅です。しかし、通勤・通学の時間になると、高校生や会社勤めの人で駅はにぎやかになります。駐車場や駐輪場も車や自転車でいっぱいです。にぎやかなのはいいのですが、人が増えるとそれにあわせてごみも増えます。祖父は毎日のように散歩のついでに駅に行き、人が捨てたごみを拾っていました。私はそんな祖父に「どうしてごみ拾いをするの」と聞くと、祖父はいつも「ついでにしているだけだよ」と笑顔で答えました。

ある朝、登校途中の道端に食べ終えたガムが捨てられていました。私は「自分が食べたものくらい自分で捨てればいいのに」と嫌悪感を持ちながら学校へ行きました。夕方になり学校から帰ると、スコップを持ち、しゃがんだ祖父が道にこびりついたガムを取っていました。その姿を見た時、私は正直、祖父がそこまでする必要はないと思い、「どうしてそこまでするの」と祖父に聞きました。祖父はいつものように「ゴミを拾っていたから、そのついでにしているだけだよ」と答えました。祖父は多くのことを語る人ではありませんでしたが、毎日のように散歩のついでにごみ拾いや地域の清掃をする人でした。まだ幼かった私ですが、そんな祖父が大好きで、かっこよく、その姿を見るたびに心が温かくなっていました。

一年ほど前のある日、母の仕事を手伝うために母の職場に出かけた時のことです。母の職場の近くには神社があり、そこにサイクリングに来た男性がお参りをしていました。男性はお参りを済ませると、近くにあった竹ぼうきを持ち、落ち葉を掃き始めました。その光景を目にした時、私は大好きだった祖父の姿が思い浮かびました。いつからか、ごみ拾いをする祖父を当たり前のように見ていた私は、懐かしさで心が温かくなりました。

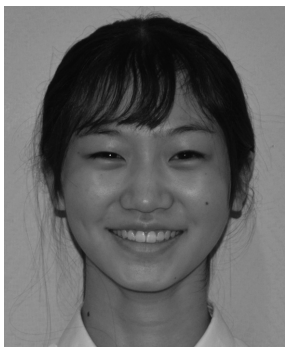
このことをきっかけに、私は「ついでに自分にできることはないか」「自分が何かをすることで人の役に立てれば」ということを考えるようになりました。トイレに行く時はついでに自分が使ったスリッパ以外も並べる、自分の机や棚を整理する時は欠席している友達の机や棚も整理するなど、祖父が言っていた「ついでに」ということを心がけて生活しています。「ついでに」ということは、正直面倒くさいと感じてしまうこともあります。しかし、そんな時はかっこいい祖父の姿を思い出すようにしています。

最後の中体連大会を間近に控えた６月、私は柔道の練習中に受け身をうまく取れず、左ひじを痛めてしまいました。病院での診断は全治３か月の大けがでした。もう試合に出られない、仲間たちと柔道をすることはないとわかった瞬間、涙が止まりませんでした。学校で落ち込む私をみんなが励ましてくれたり、荷物を持ってくれたりしました。けがをしてみて、これまでは、私は「ついでに」という気持ちで人のために自分ができることを考えてきましたが、このけがを通して、私も周りの友達から支えられ、周りの人から「ついでに」いろんなことをしてもらっていることに気づき、してもらうことの嬉しさとありがたさを感じることができました。中体連大会には出ることはできませんでしたが、人のやさしさと思いやりに触れ、その大切さに気づく機会になりました。

祖父は他界し、今では会うこともできません。しかし、私の心の中にはいつも祖父がいます。祖父は「ついでにしているだけ」といつも言っていましたが、その根底にあるものは周りの人や自分が生活している地域への思いやりと優しさでした。自分の行動で周りの人たちが気持ちよく生活でき、生活する地域がきれいになるならば、そのことがうれしいと思っていたのだと思います。私の周りには私にできることがたくさんあります。私も祖父のように自分の行動で人や地域を幸せにできる人になりたいです。「ついでにしているだけ」という気持ちで。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

神社で落ち葉を掃く男性の姿を見て、他界した祖父のことを思い出しました。このことをきっかけに、私も「ついでにする」ことを心がけて行動するようになりました。今回「少年の主張」に挑戦するにあたり、祖父から学んだことを発表しようと思いこの作品を書きました。祖父は多くを語る人ではありませんでしたが、何気ない行動や姿を通して、私に大切なことを教えてくました。誰にでも優しくて温かく、格好いい祖父の話を紹介することができ幸せでした。



審査委員会委員長賞受賞

障害を乗り越えて

山形県　白鷹町立白鷹中学校　３年
井上　愛奈

「始め」という審判の声は聞こえません。面をつけると、私の世界は静寂に包まれます。相手の立ち上がる動作が、私にとっての試合開始の合図です。

「先天性難聴障害」、私が生まれつき抱える障害です。母が言うには、耳の中にある毛が普通の人より短く、音を聞き取ることができない障害だそうです。人工内耳を使えば、話している音は聞こえるので、小さい頃は不自由を感じることもありませんでした。

私が初めてこの障害を意識したのは、小学生の頃でした。水泳大会の時、先生の鳴らすブザーの音に合わせ、周りの子たちが泳ぎ始める中、私はスタートすることができず、取り残されてしまいました。キョロキョロと周りを見て、数秒遅れてスタートした自分に気付いた時、「耳が聞こえないことは不便なんだ」という思いが頭に浮かんできました。

その日を境に、日常の様々なことが気になって仕方なくなりました。思えば、聞こえていないのに、聞こえているふりをすること。それがきっかけで友達とすれ違ったり喧嘩になったりすること。私の中で、当たり前になっていたことだけれど、「普通」はこんなことにならないんじゃないか。どうして自分だけこんな思いをしなければならないのだろうという思いは、一度湧き上がってくると、もう止めることができませんでした。

剣道に出会ったのはそんな時のことでした。中学校に入学してすぐの部活動紹介で、竹刀を自分の体のように使いこなしながら戦う先輩の姿を見て、「私もこんな風になりたい」と思ったことがきっかけです。

母やお医者様からは、
「面をつけると人工内耳を外さないといけない。無音の状態でやるのは危険じゃないか。」と心配されましたが、「それでもやってみたい」「今のこの気持ちを大切にしたい」という私の思いを尊重してくれました。

剣道を始めてしばらくは、苦労の連続でした。聞こえないことで、監督の細かい指示が分からず、その場で止まってしまうことが、わかってはいたけれど、苦しかったです。

しかし、そんな時はいつも部活の仲間たちが身振り手振りで次にやることを示してくれたり、休憩時間に監督の言ったことを教えてくれたりしました。監督やコーチも、紙やスマホにアドバイスを示してくれるなど、私のために工夫をしてくれました。耳が聞こえないからといって、変に気を遣わず、他の仲間と同じように厳しい言葉、前向きな言葉をかけてくれました。手話とも違う、剣道部の中だけで伝わるジェスチャーがとても心地よかったです。私も、わからないことは受け身にならず、唇を見たり、人工内耳を付けてから聞きにいったりして、私の方から積極的な姿勢を持つように変わっていきました。

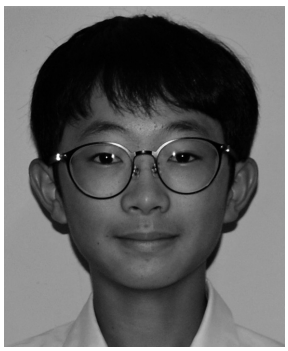
中学校最後の大会。個人戦決勝。私の竹刀が、相手の胴を捉えました。審判の声は聞こえません。それでも、狭い視界の端で見える応援してくれている仲間たちの、嬉しそうな表情や飛び上がるような動作が、私の一本を物語っていました。そう、聞こえなくても、伝わっています。あの時、勇気を出して剣道に挑戦してよかった。心からそう思いました。

「ないものはない。あるものはある。今自分が持っているものを大切に。」指導者の方が教えてくれた言葉です。今、私が持っているものは、障害があっても、それを乗り越え、挑戦する勇気です。

勇気を出して挑戦すれば、必ず自分を応援してくれる人、支えてくれる人がいます。そういう人たちの気持ちに応え、報いることが私にできることです。だから、これからも多くのことに挑戦します。私にとって、挑戦することは、感謝を示すことだから。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

自分の好きなこと、やってみたいことに積極的な姿勢で挑戦していきたいです。どんなに辛くても自分のことを応援してくれる人、支えてくれる人の気持ちに応え、感謝の気持ちを示していきたいと思います。「障がいがあるから無理」「できない」と最初から決めつけないで、「自分ならできる」という気持ちを持つことが大切だと、今回の少年の主張大会で改めて気づくことができました。今後も多くのことに挑戦して、周りの人にも勇気を与えられるような人になりたいです。



審査委員会委員長賞受賞

「じゃない方」になって気づいたこと

愛知県　西尾市立鶴城中学校　３年

村木　新

「新のお弁当、美味しそうだね」

部活動の試合や校外学習などがあると、弁当が必要になる。食事中、弁当をのぞいてきた友達にそう言われることが度々あった。その時、私は父の顔を思い浮かべ、少し誇らしい気持ちになり、感謝する。

父は弁当が必要だとわかると、数日前から

「おかずはどうしたらいいんだ」

と、頭を悩ませているが、当日になるといつも早起きして美味しい弁当を作ってくれる。皆さんは、弁当を作ってくれるお父さんと聞くと、どんなイメージを抱くだろう。

「男性なのに、料理ができてすごいな」

もしくは、

「なんでお母さんが作らないの」

と疑問に思う人もいるだろうか。その疑問が湧くのには、きっと父親には「仕事をしてお金を稼ぐ一家の大黒柱」とか、「家事は母親が中心で父親はあまり手を出さない」などのイメージがあるからだろう。私の父も、以前はそんな「世間一般の父親像」とそう違いはなく、はじめから料理をしていたわけではなかった。では、なぜ料理をするようになったのか。それは、必要に迫られたからだ。

私が小学六年生になってすぐの四月、母は病気で天国へと旅立った。残された家族で生きていくために、父は仕事と家事をこなし、私たち兄弟三人を育てている。いわゆる「シングルファザー」の一人だ。母の一件から、私たちは、世間にありふれたごく普通の家族から、普通「じゃない方」の家族へと、オセロがひっくり返るように一変したのだった。

世間一般で見れば、ひとり親世帯が少数派で、その中でも父子家庭は母子家庭より圧倒的に少ない。ひとり親になる理由は、離婚や死別などさまざまだ。それにもかかわらず母子家庭が多いのは、おそらく子育てをする上で母親の方がもともと関わりが深く、家事をしていたという理由からだろう。

日頃、私は家族を支える父の姿を見ている。そんな父に改めてシングルファザーでどんなことに困っているかを聞いてみると、

「ひとり親世帯に対する支援は、就労や所得に制限がある手当てなどに限られている。実際は経済面以外にも、家事や仕事中の子どもの世話、習い事の送迎など、助けを借りたいことはたくさんあるのに、そういった支援は少ないな」

と話してくれた。こうした背景には、同じひとり親でも、男性は女性と比べ経済的な変化が少なく、それほど困っていないと思われている点があるからかもしれない。

私も、自分が今の状況になって、初めて父子家庭について考えるようになった。もし家庭環境に何も変化が起きなかったのであれば、父子家庭について何も考えることはなく、不自由のない毎日を過ごしていたと思う。では今後、自分が当事者であるかないかにかかわらず、さまざまな社会問題に対し、どのように目を向けていけばよいのだろう。当事者ではないからと言って無関心でいたなら少数派にいる人々の思いは日の目を見ることなく、消えていってしまうだろう。自分の生きていく社会をそんな社会にしないため、二つのことを心がけたい。

一つ目は、無意識のうちに世間の常識と思い込んでいる見方や、多数派の意見を一方的に押し付けることのないようにすることだ。そのような「アンコンシャスバイアス」と言われる意識が、性別や年齢、家庭や社会での役割に働いている場面があるかもしれない。できる限り先入観をもたず、実態に目を向け相手の立場に立ってものごとを考えることができる想像力を養っていきたい。

二つ目は、たとえ自分が「じゃない方」の少数派になることがあっても、自分の意見を言うべき時にしっかりと言える、勇気をもった人間になりたいということだ。

このように、社会のさまざまな事象や立場に関心をもち、適切に自分の考えを主張していくことが、社会全体をよりよい方向へと変えていく力になると、私は信じている。

私は今日も父が献立を考え、父が作った料理を食べる。今はまだこれは一般的「じゃない方」と思われるかもしれない。しかしいつか、そうした少数派の立場の人たちも、少数派「じゃない方」の人たちも誰もが、住みやすい社会が来ることを願っている。

この主張をどんな人に届けたいですか？

これまで私自身や家族をさまざまな面で支えてくれたり、気にかけてくれたりした人たちに、これからも明るく前向きに生活していきますという決意と感謝の気持ちを届けたいです。また、社会の中で私のような多数派「じゃない方」の人たちにも届けることで、そういった人たちが声を挙げたり、行動したりする勇気ある一歩の後押しができるとうれしいです。

国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

その人らしさを大切に

埼玉県　草加市立谷塚中学校　２年

鎌形　ひかり

私は女子だ。女子だけど、スカートやワンピースを１着も持っていない。制服もズボンのものを着ている。女子だけど、一人称は僕のときもある。

ここまで聞くと、私のことをトランスジェンダーなどだと思った人もいるかもしれない。しかし、私は自分を男子だと思っているわけではない。ただ、自分のいたい姿で過ごしているだけだ。私はジェンダーの考え方が広まった今、自分の個性を大切に、ありのままに生きている人がいることを知ってほしいと思っている。

私は中学に入る前からずっと「スカートを履きたくない。」と親に訴えていた。スカートを履くとなんだか落ちつかなくて、ズボンのほうが自分にしっくりくるとずっと思っていたからだ。しかしそのころはまだ、制服には女子のスカートと男子のズボンの二種類しかなかったので、「男子の制服が着たい。」とも言っていた。親は男子の制服を着ることで私が悪目立ちすることを心配した。しかし、私が男子の制服を着ることはなかった。なぜなら、新しい制服が生まれたからだ。女子のズボン。私が長年待ち望んでいたものが、ついに私の学校でも出来上がったのだ。

小６の春、私は制服を作るためにお店で試着をすることになった。するとお店の人は私に何も聞かずにスカートの制服を持ってきた。やっぱり「女子はスカートを履く」というのが当たり前なんだ。少し悲しくなったけれど、勇気を出してズボンの制服が着たいとお願いした。試着をして、やっぱり自分にはズボンがしっくりくると感じた。

いざ学校に行くとなると、少し不安もあった。ズボンの制服について何か言われるのではないかと思ったからだ。しかし、学校に行くと私の制服についてどうこう言う人は一切いなかった。「似合ってるよ。」「ひかりっぽくていいじゃん。」みんなは私のありのままの姿に何も疑問を持つことなく、ただ受け入れてくれたのだ。

そのことで心が軽くなり、少し油断した。クラスの人と話すときに、つい僕という一人称でしゃべってしまったのだ。以前、僕という一人称を使うことに親は抵抗を示していた。それ以来、親に心配をかけたくないという思いから、私は僕という一人称をあまり使わないようにしていたのだ。今度はどんな言葉が返ってくるのか、少し緊張した。「意外だ。でも今はジェンダーレスの時代だもんね。」帰ってきた言葉はちょっと私の事情とは違った。別に私は男子でありたいわけじゃない。だから、ジェンダーレスというのはなんか違う気がする。でも自分は女子っぽくありたくはなくって…。頭の中に自分が何者なのか、何者でありたいのかが渦巻いて、自分が結局何だったのかが分からなくなってきた。

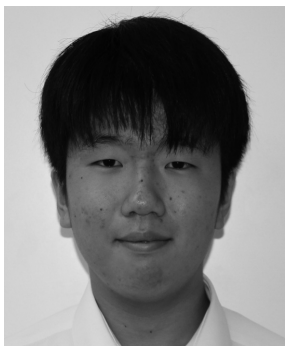
そんな疑問を抱いた私に、１冊のリーフレットが配られた。そこには温かい言葉と共に性のあり方について書かれていた。性のあり方は一人一人違い、四つの性のものさしの組み合わせで考えることができる。四つの性とは、体の性、心の性、好きになる性、そして表現する性だという。その説明の下に、グラデーションのものさしが描かれていた。そのものさしから、自分の性の位置を見つけ、丸をつけるのだ。

私も実際にそのものさしの上に自分の性がどのあたりかを考えて丸をつけていくことにした。そこで私のもやもやは解決した。私は体の性も心の性も女、好きになる性は男。ここまではすんなりと丸をつけることができた。でも、表現する性は男とも女ともつかないなと思った。結局なやみになやんで、男と女のまん中くらいに丸をつけた。スカートを履かないのも、僕という一人称を使うことも、全部ありのままの自分だと思ったからだ。自分は男でも女でもなく自分らしく生きていきたい。私はあの日、そう決意した。

最近では、心の性や好きになる性の違いで苦しんでいる人がテレビなどでよく放送されている。しかし、その人たちとは違う、表現する性が自分の性と一致しない人だっている。私は性の観点にとらわれず、自分のありのまま生きている人がいることをみんなに知っておいてほしい。そんな人が、性に決めつけられて、悩んだり、ちょっとずつ傷ついていたりすることをわかってほしい。そして、そんな人を見つけたら、「君らしくていいね。」とその人らしさを尊重してほしい。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私は、この作品を自分らしく生きる全ての人に届けたいです。私は「自分らしさ」とは何なのか悩み、「らしくない」というたった一言に傷つき、苦しい思いをたくさんしてきました。人はそれぞれ自分らしく生きています。それが自身の性と一致する人もいれば、そうでない人もいます。それでもみんな、自分らしく生きている仲間です。私はそのことを忘れてほしくありません。この主張を通して、「自分らしさ」を認め合うことの大切さ、認め合えることの素晴らしさが多くの人に伝わったら嬉しいです。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

今を生きる僕たちの使命

静岡県　浜松市立神久呂中学校　３年
鈴木　颯太

普通の生活とは何だろう。修学旅行で和尚さんから聞いた、「普通の生活が一番良い」という言葉が、ずっと頭から離れない。

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が始まってから令和６年４月末で既に２年２か月が経過し、両軍合わせて８万人を超える人々が犠牲となっている。民間人の犠牲もあり、ウクライナだけでも１万人以上に上るという。世界には、今この時も、砲弾や殺意から逃げ惑っている人たちがいる。突然、死の恐怖の中に投げ出される人たち。生きることさえ否定されている。

最近流行りの、対人攻撃ゲームでは、出撃する時に、まるで遊びに行く人に言うかのように、「いってらっしゃい」と元気に送り出される。殺してもすぐに生き返ったり、殺すことが、倒す、排除するといった言葉で表現されたりしていて、殺しているという感覚を抱きにくい。ロシアによる軍事侵攻の悲惨な現状を報道で目にした今、人の死が軽く扱われているように感じられ、ゲームだからという理由では割り切れない、モヤっとした気持ちになる。

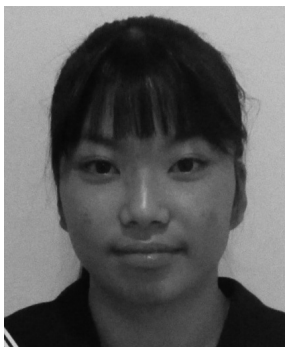
僕はロボットを使ったプログラミングを勉強している。ロボットは、命令する僕の指示が正しければ有益な相棒となり、誤った指示を出せば、間違ったまま動く暴君となる。ロボットは、人から与えられた命令のみを淡々とこなす機械であって、考えたり、心で感じたりすることはない。人が考え、良いと判断したことをプログラムで指示する。物事の良し悪しを考えたり、状況や、言葉や、言葉の間にある気持ちまでも考えることができるのは、人だけだからだ。だからこそ、僕は問いたい。なぜ、人は、命を奪う行為をするのか。なぜ、話し合いで解決できないのか。なぜ、遠い地域の出来事だからと他人事としていられるのか。人だからこそ、僕たちは、考えなくてはならないはずだ。

僕は昨年、浜松市のピクトグラム選手権に、戦争をなくしたいという思いから、「戦争禁止」というタイトルの作品を提出した。禁止を表す赤い円と斜線の中に、戦車と戦闘機を描いたものだ。もちろん、僕がピクトグラムを描くことで、戦争がなくなるとは思っていない。単なる自己満足かもしれないが、テレビなどの報道を見たら戦争禁止のピクトグラムを描かずにはいられなかった。僕の作品に対し審査員からは、「世界のどこかで戦争が行われているにも関わらず、これまで見たことがなかった戦争の禁止を呼びかけるピクトグラムではっとさせられた」とのコメントをもらった。僕が戦争禁止を描いたことによって、戦争が身近で起こっていること、今、戦禍から逃げ惑っている人がいるということ、そして、当然、戦争をしてはならないということを感じてもらえたのは、本当に良かったと思っている。

お寺の和尚さんの言う「普通の生活」とは、もしかすると衣食住や身の安全が確保されている生活を言うのかもしれない、と思った時、僕は、古文の「ありがたい」という言葉を思い出した。ありがたいは、めったにないという意味で、漢字では有るのが難しいと書く。普通に生活できることは決して当たり前ではない。本当に貴重なのだと思う。貴重だからこそ、そして、この有り難い普通の生活がおくれている今だからこそ、僕たちは勉強、部活や興味のあることに夢中になって取り組んだり、友情を育んだり、自分の将来について思いを馳せたりしながら、全力で生きていくべきではないだろうか。社会にも関心を持ち、普通の生活がおくれない人たちのことも知ろうと努力していこう。そうやって生きていくことは、きっと、有り難い普通の生活をおくることができている僕たちの使命であるはずだ。

この主張をどんな人に届けたいですか？

僕は、この主張を僕と同じ中学生に届けたい。中学生の僕たちは、勉強や部活動、受験など、短期間に取り組まなければならない。組まれている予定をこなしていくとすぐに一日が過ぎてしまい、辛い、疲れる、もう嫌だと感じてしまうことが多い。しかし、世界では、今この時も武力による侵略などにより砲弾や殺意から逃げ惑っている人たちがいる。普通に生活するどころか、生きていくことさえ困難な状況にある。今の僕たちのように衣食住が保障され、平和に暮らせることのほうが、世界から見ればまれなことなのだと思う。中学生は、確かにしなければならないことが、たくさんあって大変だ。しかし、今、僕たちは普通の生活ができている。これは、本当に貴重なのだと思う。だからこそ、僕たちは精一杯今を生きていくべきだと思う。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

奇跡を起こす子　夢を紡ぐ

富山県　高岡市立戸出中学校　２年
今井　咲希奈

「咲希奈が立った！」

私は病室のベッドで、初めてつかまり立ちをしました。母は、健康な赤ちゃんと同じように成長しているのだと感じ、うれしくてたまらなかったそうです。

私は、生まれたときから心臓に疾患がありました。3 歳までに 3 回の手術が必要で、3 回目の手術まで受けられる子は 50%。10 歳まで寝たきりで亡くなる子も多い病気です。そのことを聞いた両親は、一生分の涙を流したと言っています。

でも、私は生きています。14 歳、中学 2 年生、卓球部です。できない運動はあるけれど、今年も運動会で 100 メートルを全力で走りました。クラスのみんなと協力して大縄跳びもしました。

病院の先生たちは私を「奇跡を起こす子」と呼んでいます。それは 3 回目の手術が終わった夜中に起きました。容体が急変し、死の淵に立ったのです。そのとき、医学では説明できない不思議な現象が起きて持ち直しました。だから、「奇跡を起こす子」なのだそうです。

でも、初めての心臓カテーテル検査のときは、怖くて看護師さんに何度も聞きました。「痛いかな…？」「もしかしたら、これで死んでしまうの？」看護師さんは、「大丈夫！咲希奈ちゃんは強い子！今まで何度も大きな手術を乗り越えてきたし、奇跡を起こしたのだから。今回は全身麻酔で眠っている間に終わるよ。」と手を握ってくれました。その手の温かかったこと…、不安が薄らいでいきました。5 年ごとのカテーテル検査も、看護師さんが寄り添ってくれるから、もう怖くはありません。

中学 2 年になった今、私には夢があります。それは看護師になることです。入院や検査のたびに不安になりますが、看護師さんのおかげで笑顔になれます。私も、患者さんの心に寄り添って話を聞くことのできる人になりたいです。入院や手術を何回も経験した分だけ、私は、ほかの人より患者さんの気持ちが理解できます。たとえ完治しない病気であっても、心臓に疾患があることは、私の強みです。

私が一番嫌なのは、「心臓病だからかわいそう。」と言われることです。先日も言われました。私にとっては、心臓病もアトピーも同じ病気。アトピーの人には、かわいそうとは誰も言わないのに…と思うと悲しくなりました。それで母に相談しました。母は「その子は、病気と闘っている子供のことをよく知らないから、『病気の子はかわいそうな子』と思い込んでいるだけ。咲希奈は、そんな考えはないよね？病気の子には『頑張っているね』と言ってあげられる人になってね。」と言ってくれました。その言葉を聞いて、気持ちがすっきりしました。

入院していたとき、出会ったたくさんの人たち。生まれてから 6 年間ずっと入院している女の子。私と同じ病気で、学校に行っている時間より入院している時間の方が長いと話してくれた子。でも、みんな悲観的ではなかったし、病院では同情されることもありませんでした。

私は、差別や偏見がなく、健康な子供も病気の子供も、みんなが夢をもち、それに向かって頑張ることのできる世界になればいいと思っています。だからこそ私は看護師になりたいのです。

三歳まで酸素吸入器をつけていた私が、看護師になって患者さんとその家族の支えになります。自分にできることで、誰かの役に立ちたい。自分の可能性を信じて、一歩一歩、夢を紡いでいきたいと思います。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

私は生まれつき心臓病で、できないことや、やりたくてもやれないことがあり、大変なことも多くありました。通院や検査入院のたびに、家族や看護師さんに助けられてきました。看護師さんは、どんなときでも明るく接してくれ、そのおかげで笑顔になれました。そんな私の経験を生かし、病気と闘っている子を支え笑顔にさせられるようになりたいです。

国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

心のつながり

岐阜県　本巣市立根尾学園　９年
林　宏瞭

「あった！あった！お札ありました！」

石川県にある、今にも崩れそうな家の中から、一体のお札を発見し、みんなで歓喜した。

４月末、僕は能登半島地震のあった石川に足を踏み入れた。そして、目を疑った。１月１日の地震発生後にテレビで見た光景が、まるで時が止まったかのようにそのまま残っていた。火事で焼き尽くされた輪島朝市は、いつか見た空襲後の街の写真のようだった。地震発生から５か月経ってもこの光景。異世界のような目の前の現実に心が苦しくなった。

僕はその輪島で、２泊３日でボランティアに参加した。僕が参加したボランティアは、被災された方のどんな望みでも、そこに寄り添い思いを叶えるというものだった。例えば、「家の中から、おじいさんの形見のお札を捜し出してほしい」と言われれば、数人がかりで崩れかけの家の中から必死に一体のお札を捜した。わずか一体のお札だったが、それを見つけ出した時、被災者の方の顔は涙でぬれていた。そのお札はその被災者にとって、おじいさんとの思い出がつまった唯一無二の宝物だったのだ。

ある被災者の方が言われた。

「復興に向けて必要なものは、お金よりも人。心のつながりだ。」と。まさにそれを実感した瞬間だった。

僕にとっては今回が初めての被災地ボランティア。不安でいっぱいだったが、みんな年齢関係なく、真剣に僕の話を聞いてくれ、真剣に僕に話をしてくれた。何より 14 歳の僕という人間を受け入れてくれたことが嬉しかった。参加者には小学生の子供もいた。中にはなかなか学校に行けていない子もいるらしい。しかし、目の前で被災者のために力を尽くす姿を見ていると、そんなのはどうでもいいことだと思った。職業や年齢、その人の背景など関係ない。どんな人間であっても手を取り合って生きていくことが大切なのだと実感した。

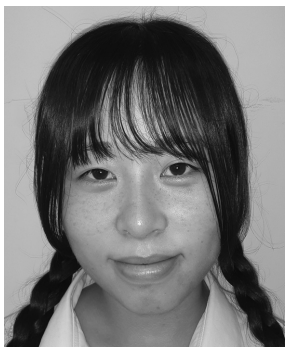
東日本大震災の仮設住宅では、孤独死した人が百人を超えるそうだ。生活の困窮もあったと思うが、一言「元気ですか」「最近どうですか」という他者との会話、心のつながりがあれば、救えた命があったかもしれない。僕はそんなことを思い岐阜へ帰ってきた。

数日後、石川の現状や石川で見た美しい自然を張り付けたポスターを持って、柳ケ瀬のイベントで自分の思いをアウトプットした。みんな年の離れた僕の話に真剣に耳を傾け、励まし、応援してくれた。嬉しかった。思い切って飛び込んでみてよかったと思った。「心をつなぐ」ために、ファーストペンギンとなって一歩を踏み出すことが大切だと感じた。また、その数日後、企業でのイベントに防災士として参加した。子供の僕にも役割を与え、防災を通じ市民とつながる機会を設けてくださった企業の思いや取り組み、よりよいものを求めて本気でアドバイスをくださった方に心から感謝したい。「人は生きているのではなく、生かされている。」災害が起きたときはもちろん、日常でも様々な人に支えられて、様々な人とつながって自分は生かされている、そう実感した。

だから僕は動き出す。モノづくりからのコト起こし、地域や仲間を巻き込んだ防災リテラシー。どんなコトを起こすときも、決して一人ではない。本巣市もホープ防災リーダーズを立ち上げ、僕たち若い世代の背中を押し、自治の力を高めようと奮闘してくれている。僕は濃尾大震災で被害を受けたこの根尾の地から、たくさんの人の知恵と力を借り、助け合い、みんなで防災の心を紡いでいく。小さな声も聞き逃さず、紡ぎつないでいく。そのためのキーワード・パワーワードは、「心のつながり」。そして心をつなぐのは、僕だ。

この主張をどんな人に届けたいですか？

防災を通して出会ったすべての人へ。みんなとの繋がり、学びの先に今の僕がいるからだ。みんなからの応援が僕に”動く”勇気を与え、そして次の繋がりを生み、一歩を踏み出す勇気をくれた。14 歳の僕を受け入れて関わってくれたすべての人に感謝の心を届けたい。そして、生きるすべての人へ、命を守るために、生きるために、心の繋がりを大切にして、一歩を踏み出すファーストペンギンになる勇気を届けたい。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

つながりの中に生きて

島根県　雲南市立木次中学校　3 年

田本　怜花

自分の「命」と「戦争」、つながりを意識したことはありますか。私の命と戦争をつなげたのは、一歳の時に亡くなった曾祖父が残したこの手記でした。

曾祖父は、第二次世界大戦中、24 歳で満州に 5 年間、軍人として派遣されました。「便りが来た。子どもが生まれるとの知らせ。いよいよ親になるのだ。必ず生きて帰るんだと心に誓った。」「戦友の戦死の知らせを毎日のように耳にする。さみしい。」

終戦後は、シベリアで 2 年間抑留されました。「寒さ、食糧不足等で生活は厳しい。重労働のため死者が続き、地元の仲間も死んだ。このままでは全員死ぬ。」「120 名いた隊員が、1 年半で 45 名になった。」「昭和 22 年 4 月 20 日。うれしい話が出た。帰国の話だ。」そして、日本の土を踏んだとき、生きた喜びに男泣きをしたと書かれていました。曾祖父は、涙も凍るほど寒い環境の中でも、日本から送られてくる手紙を原動力にし、耐え抜いたそうです。

曾祖父の肉筆の手記によって、私の家族の身にも戦争があったのだと知ったとき、戦争というものが一気にリアルなものとして私に迫ってきたのです。戦争で起きた事実から、目をそらしてはならないと身に染みて感じました。

そして、幼い頃に聞いた父の言葉がよみがえってきました。「怜花が生きているのはひいおじいちゃんが生きて帰ってきてくれたからなんだよ。」幼い頃にはわからなかったこの言葉が持つ大きな意味に気づかされました。自分が生きていることが当たり前ではないこと、自分に繋がれた命の大切さを痛感しました。私に繋がった命を、当時の人の思いを繋いでいきたい。心からそう思いました。

戦後 79 年を迎えたこの夏、初めて曾祖母に「戦争中の話を聞かせてほしい。」と頼み、家族で、一つの机を囲みました。曾祖母は涙ながらに話し始めました。7 年もの間、産まれたばかりの娘と夫の帰国を待ち続けました。夫が生きているかすら分からないとき、シベリアから写真や手紙が送られてきたそうです。「生きていてくれて本当に安心した。」と初めて笑みを浮かべました。帰国した時、曾祖父はひどくやせ細っていましたが、元気な声と笑顔は以前のままで「やっと帰ってきてくれた。」と喜びがこみあげてきたと話してくれました。最後に曾祖母は涙を含んだ細い声ながらもはっきりと言いました。「戦争は二度とあってはいけない。」と。

曾祖母が初めて見せた深い思いと曾祖父の手記とが重なり、私の心の中で新たな気づきが生まれました。目の前にある戦争のない毎日も、自分の命も「大切な人に生きてほしい」「戦争は二度とあってはいけない」という当時を生きた一人一人の思いと行動の連鎖によって生まれたものなのだと。

しかし、今、それらを繋いでいく意識が薄れてきてはいないでしょうか。

私は、戦争の理不尽な出来事、当時を生きた一人一人とその家族のつらさや悲しみの物語を風化させてしまうことが、再び戦争を起こしてしまうことに繋がってしまうのではないかと感じています。私の命の中に確かな思いのつながりがあるように、今を生きるあなたの命の中にも「大切な人に生きてほしい」という思いのつながりがあるはずです。だからこそ、すべての人が気づき、心に刻んでほしいのです。「私たちはたくさんの命や思いによって生かされている」と。

この秋、曾祖母は 105 歳を迎えます。私たちは、当時を生きた人の生の声を聞ける最後の世代になるでしょう。だから私は、これからも戦争について語られた様々なものから思いを受け取り、伝え続けたい。思いを次の世代につなぎ、戦争のない毎日をつなげていけるのは、今を生きる「私たち」だけなのですから。

この主張をどんな人に届けたいですか？

特に戦争体験者の生の声を聴ける最後の世代である若者に届けたいです。私は小さなころから戦争に関心がありましたが、体験者である曾祖母には戦争の話を聞いてはいけないと思っていました。この主張を書くにあたって初めて曾祖父の手記を読み、曾祖母の話を聞き、命や思いを繋いでいかなければならないという使命感を抱くようになりました。曾祖母は、話した後、「心が楽になった」と言ってくれました。私はこれからも戦争について語られる思いを届けていきたいです。

国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

空気の読めない私にできること

山口県　下松市立久保中学校　3年
中島　実優

「空気を読め。」
と言われた経験はあるだろうか。また、他人に言ったことはあるだろうか。その場の空気を読むことは、生まれたときから身近な大人に自然に教わってきたことだと思う。

一方で、世の中には先天的な障がいによって、本人がどんなに努力をしても空気の読めない人がいる。私もそのうちの一人だ。ADHD と自閉症を併せもって生まれた私は、先天的な障がいのために協調性に乏しく、人の気持ちを理解することや周りに合わせて行動することが苦手だ。他人が為すことに興味・関心が抱けず、逆に、自分にとって不都合や不満があればすぐに癇癪を起こしていた。また、私は、こんなことを言ったら相手が傷付くなんて理解も想像もできないので、思ったことをすぐに口にした。そのため、周囲からは『空気の読めない、変な子』と認識されていたようだ。

そんな私は、中学校に入学してから困難を強いられるようになった。中学校生活はクラスの枠を越えた活動が増えたからだ。そのため、今まで以上に協調性が要求された。しかも、一つ一つの行動に責任が伴う。

ある日、私はこう言われた。「空気を読め」と。それまで障がいを盾に言い訳してきた私の心に、深く刺さった。私の大嫌いな言葉だ。それと同時に、今まで私がとっていた行動が、自分勝手で他人に迷惑をかけていたことを知り、自分自身に苛立ちを覚えた。

それからというもの、私は空気の読み方を私なりに考えた。いろいろな場面を想定し、その対処法を考え、実践した。しかし、なかなか上手くいかない。そして、私は悟った。人の何倍も状況判断をする努力をして、ようやく私は他の人と同じスタートラインに立てるのだと。その後、私は自分にしかできないことを探そうとした。

2年生に進級し、私の価値観は大きく変わった。いつも陰日なたなく、みんなのために一生懸命働いている友達の存在に気づいた。彼らの、誰に対しても思いやりの心をもって接する姿に感動した。もしかしたら私にも何かできるかも……と思い、彼らの真似をした。私は手伝うことから始めた。手伝い終わって他の人から感謝されたとき、私でも人の役に立てた、頑張って良かったと思えた。とても嬉しく、幸せだった。その後も、みんながなかなか挑戦しないことに積極的に挑戦した。友達から、「実優のその前向きな姿勢に勇気づけられたよ」という声を聞いたときは嬉しかった。

いろいろなことに挑戦した私だが、一番印象に残っているのは、文化祭の合唱コンクールだ。始めは上手く指示できるか不安だった。でも、その心配は杞憂。数名の「頑張ろう」という声で、クラス全体に頑張ろうという前向きな空気が生まれた。コンクールの結果は金賞。本当に嬉しく、やって良かったと思った。空気を読むことができないと言われている私が、クラスメイトの支えもあり、空気を作ることができた。

とかく少数派や個の意見・考えは、多数決によって埋没してしまう。授業中、誰かが意見を言うまで発言しにくい、もしくは誰も発言しない。こういう消極的な空気に包まれる場面を何度も見た。そこで発言した人に、空気が読めない人として冷ややかな視線を浴びせる場面も見た。でも、本当に正しいのは何だろう。私は、これからも正しいと思ったことを、正しいと思ったように行動していきたい。もちろん、うまくいかないこともあるだろう。でも何もしないよりはいいと思う。

私は空気が読めない。でも、空気を作ることはできる。その空気が良くなるか、悪くなるかは本人次第。だからこそ、私は良い空気を作っていきたい。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

私は、障がいや生まれ育った環境を言い訳にせず、今できる最大限の行動をとることこそが大切なんだと実感しました。確かに、障がいの影響で人並みにできないことも多いです。しかし、だからこそ発見できる視点もあり、できることもあると気付きました。友達に憧れ、その友達に勇気付けられたことによって、私は変われました。私も彼らのように、同じ境遇で苦しむ人にとっての憧れであり、勇気を与える存在でありたいです。

国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

またやーたい

沖縄県　沖縄県立開邦中学校　3年
島袋　莉安

「In Hawaiian see you again is called A Hui Hou. How do you say that in Okinawan?」
「ハワイ語でまた会いましょうは、A Hui Hou と言います。うちなーぐちでは何というのですか？」
私は口ごもった。自分の顔が恥ずかしさで赤くなっているのを感じる。何ていうんだろう。私は沖縄生まれの沖縄育ち、なのにウチナーグチが答えられなかった。

これは、去年の夏休み、市の青少年国際交流事業でハワイに行った時の出来事だ。ハワイに行く前にウチナーグチの事前研修があったにも関わらず、私はあまりウチナーグチが喋れなかった。本気で覚えようとしていなかったからかもしれない。ハワイに行くのにウチナーグチを使う機会ってあるのかな？自己紹介と挨拶ができれば十分じゃないのかな、と心では思っていたのだ。しかし、そんなことはなかった。沖縄のことについて現地の人に尋ねられることもあった。ハワイの人たちは、私を日本から来た日本人としてよりも、「沖縄」から来たウチナーンチュとしてみて、興味を持ってくれた。しかし、私はそれに答えることができなかった。ウチナーンチュなのに沖縄のことが分からない、そんな自分がもどかしかった。

ユネスコによると、ウチナーグチは消滅危機言語に指定されている。2023 年度のしまくとぅば県民意識調査によると、挨拶以上にウチナーグチを使う人の割合は 36.8%と前年と比べて減少している。しかし、普段の生活の中でウチナーグチが必要だと回答した人は 90.3%と、調査開始以来最高値となった。つまり、ほとんどの人が私と同じようにウチナーグチが大切だと考えているにも関わらず、実際に話せる人は 4 割にも満たないというのが現状ということだ。私はウチナーグチを話せないが、それを聞くと親しみがわき、安心感、仲間意識を覚える。私以外にも多くのウチナーンチュがそう感じるだろう。

私の祖父の世代は、方言札などにより標準語の使用が奨励され、ウチナーグチの使用が禁止されていた。これにより、祖父の世代はウチナーグチが悪いものであるというイメージを植え付けられた。現在も、標準語をきれいに話す人の方が良いイメージがある。私は、このイメージがウチナーグチを話せる人が少ない原因なのではないかと思う。

ハワイも、過去にハワイ語の使用が禁止されていたことにより、1983 年にはハワイ語を流ちょうに話せる人が 50 人に満たないという状況だったが、教育プログラムなどの努力の結果、現在は 26000 人以上に話者が増えたそうだ。

ハワイから帰って、ウチナーグチが話せるようになりたいと思っていた私に、友人がある動画を見せてくれた。この動画は、ウチナーグチを使ったコミカルなストーリーのため、私はこのシリーズを何度も見た。これを真似して話すようになったためか、以前よりウチナーグチを聞いたり、話したりすることが少しずつ出来るようになった。このように、今の時代、SNS を使った面白い動画などで、小中高生の興味を引き、ウチナーグチの悪いイメージを払拭することで、ウチナーグチが親しみやすく、身近なものに変わっていけるのではないか。

言葉は自分の生まれ育った地域の伝統や文化、歴史などと深く関わり合っていて、言葉なくしてはそれを理解、継承することはできない、必要不可欠なものなのだと思う。今はほとんどのウチナーンチュは、ウチナーグチを単語として標準語に混ぜてしか使っていないけれど、自分らしさを表したり、自分とは何者かといったアイデンティティを確立したりする中で、ウチナーグチを自分の一部として持っておくことは大切だと思う。

私は、ウチナーンチュであるというアイデンティティを持っているからこそ、ウチナーグチが話せるようになりたい。これから、ウチナーグチにもっと興味をもって学んだり、使ったりしていくことで、地域のことを深く知り、自分は何者なのか深く考えていきたい。

いつかハワイに行く機会があれば、前に答えられなかったあの質問に答えたい。
「In Okinawan,see you again is called MATAYA-TAI.」

※ウチナーグチ……沖縄の方言。
※ウチナーンチュ……沖縄の方言で「沖縄生まれの人」を指す言葉。
※またやーたい……沖縄の方言で「また会いましょう」という意味の言葉

この作品を書いたきっかけはなんですか？

昨年、私が住んでいる市の青少年国際交流事業で、ハワイのプランテーションビレッジに行った際、日系人の方にウチナーグチ（沖縄方言）を聞かれたのに答えることができなかったことがきっかけです。自分よりもハワイに住む沖縄県系の人の方が沖縄のことを知っており、ウチナーグチも大切にしていることに衝撃を受けました。ハワイで自分の生まれ育った地域のことを学ぶ大切さに気付き、自分のアイデンティティを考えるきっかけとなった出来事を書くことにしました。

努力賞授与式

全国大会へ推薦された 47 都道府県の代表者の内、惜しくも全国大会発表者に選考されなかった 35 名（以下、努力賞受賞者）に、全国大会の中で努力賞の賞状が授与されました。また、全国大会当日は努力賞受賞者の作文をホール前に掲示し、ご来場いただいた多くの皆様に観覧いただきました。

努力賞授与式

努力賞受賞者

努力賞プログラム

努力賞受賞者が交流を深め、新たな視点や考え方を身に付けていただくことをねらいとして、全国大会前日から国立オリンピック記念青少年総合センターに宿泊し、交流プログラムを実施しました。

１日目はレクリエーションで親睦を深めた後、「私の主張を一人でも多くの人に聞いてもらうには」というテーマについて考え、グループ内で共有し、意見交換を行いました。

２日目は、グループでの意見交換を踏まえ、グループごとに全体の前で発表しました。都道府県を代表して参加してくれた中学生らしく、様々なアイデアが紹介されました。「自分たちにできる小さなことから始めて、少しづつ広げていく」という頼もしい意見が述べられました。また、アンケートでは「様々な県の人たちと交流し、新しい考え方などを知る機会が出来たので良かった」という本プログラムを通じての成長を感じる言葉もありました。

交流の様子

グループ　ディスカッションの様子

全体発表の様子

少年の主張全国大会努力賞受賞作品

【北海道・東北ブロック】

北海道　恵庭市立恵み野中学校　３年
数馬　灯里　『未来に咲く今』

青森県　むつ市立田名部中学校　２年
二本柳　凜子　『正解の無い世界へ』

岩手県　陸前高田市立高田第一中学校　３年
菅野　りれい　『あなたと共に』

秋田県　北秋田市立鷹巣中学校　２年
中川　心紡　『私の人生』

福島県　会津若松市立第一中学校　３年
林　胡桃実　『美しい会津を未来に残すために』

【関東・甲信越静ブロック】

茨城県　茨城県立盲学校中学部　３年
深川　彩春　『ボランティアが導いてくれた将来の夢』

栃木県　高根沢町立北高根沢中学校　３年
岡本　智尋　『心の土台を固めて』

群馬県　榛東村立榛東中学校　３年
アジズ　ハディア　『言葉のヤングケアラー』

東京都　東京都立立川国際中等教育学校　３年
中川　絢心　『みんなって誰ですか。』

神奈川県　横浜共立学園中学校　３年
菅井　美結　『書で伝える』

新潟県　十日町市立中里中学校　３年
高橋　紫　『私の支えとなる存在』

山梨県　北杜市立甲陵中学校　３年
小寺　輪子　『大きな橋』

長野県　飯田市立旭ヶ丘中学校　３年
宮下　心　『いってらっしゃい』

【中部・近畿ブロック】

石川県　金沢市立長町中学校　２年
北野　はな　『海を越えた架け橋』

福井県　越前市南越中学校　３年
山口　世愛　『「普通」を乗り越えて』

三重県　松阪市立殿町中学校　３年
村田　薫音　『不登校になってわかったこと』

滋賀県　草津市立老上中学校　３年
馬場迫　葵　『練習期間』

京都府　亀岡市立南桑中学校　３年
牧野　心春　『私が決める』

大阪府　泉大津市立小津中学校　３年
森﨑　春奈子　『「当たり前」を疑う』

兵庫県　淡路市立東浦中学校　３年
津坂　盤　『障害とは何ぞ』

奈良県　葛城市立新庄中学校　２年
髙橋　菜緒　『竹やぶの中から・・・』

和歌山県　高野町立高野山中学校　３年
足立　笑子　『みんなが知れば必ず変わる』

【中国・四国ブロック】

鳥取県　米子市立後藤ヶ丘中学校　３年
三島　愛梨　『ボランティアを通して』

岡山県　倉敷市立南中学校　３年
村木　実路　『美知との遭遇』

広島県　呉市立仁方中学校　３年
大段　りあ　『1 ピースから広がる未来』

徳島県　阿波市立阿波中学校　３年
山下　智歌　『温かいまなざしのある社会』

香川県　高松市立国分寺中学校　３年
鈴木　駿　『挑戦した先に見えてくる明るい未来』

愛媛県　愛媛県立松山盲学校　２年
正岡　匠　『未来の自分へ』

高知県　中土佐町立大野見中学校　１年
下元　里桜　『誰もが教育を受けられる日を目指して』

【九州ブロック】

福岡県　久留米市立明星中学校　３年
南波　雅人　『災害で繋がる平和の輪』

佐賀県　鹿島市立西部中学校　２年
藤井　麗煌　『西九州新幹線開業から思ったこと』

長崎県　佐世保市立広田中学校　３年
古川　万葉　『話すことでしか伝わらない気持ち』

大分県　宇佐市立宇佐中学校　２年
藏下　祥貴　『心の言葉』

宮崎県　鵬翔中学校　２年
山田　心遥　『笑顔で明日を迎えられるように……』

鹿児島県　鹿児島市立城西中学校　３年
濵田　一華　『「世界は変えられる」』

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

未来に咲く今

北海道　恵庭市立恵み野中学校　3 年
数馬　灯里

皆さんには、夢や目標はあるだろうか。私には今のところ、具体的に夢と呼べるほどのものはなく、そういった夢を持つ友達を見ると、焦りや不安を感じていた。でも、そんな気持ちを和らげてくれた存在がいる。それは意外にも兄であった。

私には今年成人式を迎えた兄がいる。高校卒業後、上京してすぐに働き、社会人三年目になる。兄は勉強が苦手で、さらに反抗期で、学校も行ったり行かなかったりした時期があり、両親や担任の先生から卒業を危ぶまれるほど心配されていた。そんな兄ではあったが、あるときファッションに興味を持ち、高校二年生ごろからアパレル業界で働きたいと言うようになった。しかし、高校にアパレル業界からは求人が来ていないことを知ると、高校三年生の夏休みに、北海道から独り飛行機に乗り、東京・大阪で開催されていた高卒対象者の合同企業説明会に参加するなどしていた。残念ながら、コロナ禍の影響もあったのか、アパレル業界の求人はそこにも来てはいなかった。兄は希望していた職種ではなかったものの、いくつか求人を見つけ、最終的には配送業に就職した。結局、兄の夢は叶わなかったのだ。そんな兄を見て、私は思った。「飽きっぽい性格の兄だから、希望職種じゃない仕事なんて長続きしないだろう」、と。しかし、結果は意外なものだった。持ち前のコミュニケーション能力と、効率の良い仕事ぶりが評価され、この春からは一つの店舗を任されるまでになったのだ。学生時代は劣等生のレッテルを貼られ、希望する職種にも就けなかった兄なのに、今は職場から高い評価を得て、配送業という仕事に誇りを持ちながら生き生きと働いている。今思えば、兄は誰の助けを借りるでもなく自ら行動し、すべてを自分の意思で決断していた。当初の希望が叶わなくても、置かれた状況に文句を言うわけでもなく、そこでやりがいを見出し、自分で輝くための努力をしていたのである。

そんな兄を見ていて思い出した言葉がある。SNS で見かけた「置かれた場所で咲きなさい」という言葉だ。私は今までこの言葉を、辛くても我慢してそこで咲きなさい、という意味だと思っていた。でも、違うのではないだろうか。この言葉は、兄のようにどんなところに置かれてもやりがいを見出し、自分次第でいくらでも輝くことはできる、という意味なのではないだろうか。

一年に数回兄が帰省すると、母と楽しそうに仕事での出来事について話している。私は、今まで夢や目標をなんとか見つけようと焦る気持ちでいっぱいだったが、無理に夢を見つけなくても、その時その時に置かれた状況を自分の中で出来る限り楽しむことができれば、それでいいのではないかと考えるようになった。私はそう思うことで、「未来」だけではなく「今」を大切に、どう楽しむかをいつも考えている。

私たちはこれからたくさんの壁にぶつかり悩むことがあるだろう。必ずしも自分の希望通りになるかどうかは分からない。でも、いつだって私の人生の舵を切るのは私だ。兄のように、どこにいってもその場所の良さを見つけ、精いっぱい楽しめるような豊かな人生を、この先歩んでいくために、どんなことでも挑戦し、積極的に取り組めるような主体性を持って行動したい。

幼少期のころは、
「どうせ俺なんて……」が口癖だった兄。でも今は違う。
「大人は楽しいぞ、どこにいても、何をやっても。」
こう言い放った兄の笑顔は自信に満ちていた。

この主張をどんな人に届けたいですか？

今までの私のように将来に漠然とした不安を抱いている人に届けたい。自分が何をしたいのかわからなくてモヤモヤしている人は沢山いると思う。でもそんな先が見えないときこそ、今立っている足元をしっかり見て、全力で今の自分を楽しんでほしい。この作品を通してひとりでも多くの人の心が楽になりますように。また、自らの力で人生を切り拓いた兄を尊敬し、妹としてこれからも応援し続けたいと思う。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

正解の無い世界へ

青森県　むつ市立田名部中学校　２年

二本柳　凜子

「どうして正解は一つしかないのだろう」私はずっと不思議に思っていました。

小学生の頃、毎日同じようなデザインの服を学校に着て来る子がいました。クラスメイトは、みんな「他に着るものがないのでは」とその子をからかっていたので、その子のように嫌われたくなくて、いちいち月の中でなるべく似たような服を着る日がないように意識しました。

いつも授業で、みんなが今まで出した意見とは異なる意見を堂々と発表する子に対して友達が

「あいつは自分たちとは考え方が違うから関わりたくない」

と言っていたので、授業ではなるべくみんなの意見に合わせて、自分の本当の気持ちはなるべく表に出さない様にしました。みんなの言う「ふつう」と違う人が理不尽にいじめられ仲間外れにされる現実。そんな場面を幾度も目の当たりにし、「誰にも嫌われたくない」「嫌な思いをしたくない」と思うようになりずっとみんなが言う「ふつう」になるための努力をしてきました。

そんなある日のことです。友達が私に、こう伝えてきました。

「ねえねえ、りこ聞いた？ Ａちゃんと Ｂちゃんが昨日、手つないで帰ってたらしいよ。」

「まじキモイよね。付き合ってんの？」

「りこはどう思う？」

本当は私は知っていました。Ａちゃんは性別を問わずに人を好きになる人だということを。以前Ａちゃんにそのことを伝えられた時私は、それが偽らないＡちゃんの姿なんだからそれで良いのではないか、と励ましの言葉をかけました。それが本心でした。でも、

「りこはどう思う？」と友達に聞かれ、私は結局自分の保身を選んで、

「やばいよね。」

と言いました。「やばい」という抽象的な表現を使えば、どちらの立場からも嫌われないで済むと思っていました。しかし、今でもずっとその発言を後悔しています。その時ちゃんと

「別におかしくなくない？」

と思っていることを伝えられていれば、その噂を知ったＡちゃんが泣くこともなかったかもしれません。泣いているＡちゃんを見て初めて気づきました。「彼女たちはただ自分らしく生きているだけなのに、なぜ私たちは世間が生み出した単なる固定概念でしかない「ふつう」という名の枠に合わせて、自分らしさを捨てることに必死なんだろう」と。本当はきっと人を傷つけること以外、この世界に不正解なんて無いのです。「多様性を大切に」等と、上辺だけで言うだけで、少しでも「ふつう」と違う人に対して、症状名を付けたり、悪口を言ったりして画一化し、これまでにない素晴らしいアイディアを持っている人を社会から排除していたのは私たち自身なのです。

私たちの学校では、去年丸一年かけて生徒が中心となって行うパネルディスカッションを何度も行い、多様性などの時代の変化に合わせ、全校生徒の手でジェンダーレス制服の創出や校則改訂のための討論会を行いました。五回目のパネルディスカッションで、私はパネラーとして話し合いに参加しました。緊張しながらも発言の順番になり「男女問わず、靴下の色を、白のみでなく、グレーや黒など、選択できるよう改善してはどうか」と、提案することができました。少数派になることで、周りの「ふつう」の枠から外れてしまうことを恐れ、より多くの人が納得してくれるであろう多数派の意見に合わせる私は、そこにはいませんでした。

つい、先日も全校生徒が百のグループを作って話し合う座談会では、様々な意見が飛び交い、誰も思いつかないような提案をした人もいました。そこに「ふつう」という概念は全く無く、自分たちの力で正解の無い世界を創っていけることを嬉しく感じました。

これから私は、私たち自身が生み出した「ふつう」の枠からはみ出すことを恐れません。それがいつか正解の無い全ての人が、自分らしく生きられる世界につながることを願って。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

周りの顔色ばかり気にしていた私がおかしてしまった過ちを経て、みんな「ふつう」はちがうのに、どうして私たちは自分らしさを殺し、周りの「ふつう」に合わせることに必死なのだろう。全ての人が自分らしく生きられる正解の無い世界が訪れてほしい。そう感じたのが、この作品を書いたきっかけです。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

あなたと共に

岩手県　陸前高田市立高田第一中学校　３年

菅野　りれい

「眼鏡と一緒。なんにも変わらないんだ。」
そう話す父の笑顔を私は忘れることはないでしょう。

私の弟は足に装具をつけて生活しています。そのことは私にとって日常であり、とりたてて考えることではありませんでした。でも、一度だけ父に尋ねたことがありました。すると、父は「目が悪ければ眼鏡をかけて見やすくする。体のどこかに不都合があれば、必要な道具を使う。眼鏡と一緒。なんにも変わらないんだよ。」と言いました。父のその言葉が私の心にストンと落ち、今でも私の中の芯となっています。

「眼鏡と一緒。」――だから私は、車椅子の人を見かけても、装具や道具が必要な人と出会っても、それを特別なこととは考えませんでした。そうあの日までは。あの日、私が街で見かけたのは、装具をつけて歩いていた男性。そして、その姿を真似て笑っている人たちでした。父の笑顔とはほど遠い、その笑い顔を見て心が締め付けられました。しかし、その人にとっての当たり前に対して、偏った見方をしているのは、なにも大人ばかりではありません。学校生活の中でも友達を揶揄して心ない言葉を吐く人もいます。

だからこそ、私は皆さんに聞きたいのです。「障がいを持っていることはいけないことですか。」私はそうは思いません。様々な事情を抱えているのは誰もが一緒。障がいも、それぞれが持つ個性の一つだと思うのです。人は誰でも自分と違うことに敏感に反応します。私たち中学生はなおさらです。でも、だからこそ「違い」を認められる「しなやかさ」が必要なのではないでしょうか。

違いを感じること、また、その違いに「なぜ？」と問うことも自然なこと。しかし、それを言葉や態度に表すことは違うのではないかと思うのです。モヤモヤとした気持ちでいるとき、ある新聞記事が目にとまりました。海外で博物館のガイドをしている方の話で、「幼いころは肌の色や、文化の違いなどで相手や友達を選んだりしません。相手を好きになって仲良くなるし、心の壁が低い。」「そう！」私は思わず声をあげていました。幼い子も「違い」には敏感です。そして、実にストレートに「どうして？」と問います。けれども、その後は「違い」に目を向けるのではなく、その人自身を見つめます。しかし、大人になるにつれ「違い」ばかりに気をとられ、その人の本質を見ようとしなくなります。

私が住む陸前高田市は「ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくり」を掲げ、障がいのある人もない人も、若者も高齢者も、誰もが快適に過ごせる社会の実現に取り組んでいます。私は、この取り組みの実現を心から願っています。けれども、この取り組みを知り、意識している人が一体どれ程いるでしょうか。自分には関係ないことと、決めつけるのではなく、無関心という心の鎧を脱ぎ捨て、知ることから始めてみませんか。そして、それぞれの「当たり前」を尊重し、「私なら」と自分のこととして捉え、その考えをつなげる社会にしていきたいのです。

装具、車椅子、私たちは実に多くの必要なものを生み出してきました。私はその全てが「眼鏡と一緒」となる日を作っていきたいと思います。あなたと共に。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

普段の生活でも、装具などの道具を使っている人を見かけることがあります。私の家族にもいるので当たり前のことだと思っていました。しかし、一般的には、そのようなことに対する知識があまりないことが分かりました。友達にも「実際に会ったことがないし、知る機会もあまりない。」と言われ、私の主張で「知るきっかけになってもらえればいいな。」と思い、この作品を書きました。この主張を聞いて、多くの人に理解していただけたら嬉しいです。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

私の人生

秋田県　北秋田市立鷹巣中学校　２年

中川　心紡

皆さんは、今、学校生活を楽しんでいますか。私は楽しくてたまりません。勉強も部活も行事も、大変なこともありますがとても楽しいです。

でも、一年前は苦しくて、辛くてたまりませんでした。私は小学六年生の三学期から体調を崩し、体が自分の言うことを聞いてくれなくなりました。昨年の四月は新しく始まる中学校生活に期待して学校に行こうと頑張りました。一か月ほどはなんとか登校できていたのですが、次第に体力的にきつくなってきて、とうとう学校に行けなくなってしまいました。しばらくして、鷹中では体育祭が開かれました。体調は悪かったのですが、私は一目見たくて、見学に行きました。生憎の大雨でしたが、そんなことを全く気にもせず、クラスが一丸となって行進する姿は勇ましく、まぶしく見えました。と同時にその場に一緒にいられなかった自分のことを思うと、悔しい気持ちで一杯になりました。一人取り残されてしまうような寂しい気持ちになりました。

だから、私はみんなと会うことが難しい状態だったけれど、どうにかしてみんなとコミュニケーションを取りたいと思うようになりました。考えた末、「手紙」にたどり着きました。私はみんなに「体育祭お疲れ様でした」という内容の手紙を送ってみました。私の勝手な自己満足だったので、とても不安でしたがクラスのみんなは手紙を返してくれました。そのときの手紙は今でも私の宝物です。その内容は、友達同士の楽しいやりとりやテストの大変さなど、何気ないクラスの雰囲気が分かるようなものでした。「学校においでよ。」という優しい言葉も書いていました。読んでいてとても楽しかったです。この手紙は私に光を与えてくれました。

私が立ち直れるようになったもう一つのきっかけがあります。それは「ゆっくりで大丈夫だよ。」と声を掛けられたことです。そのときの私は、「早く学校に行かなきゃいけない。学校に行くのは当たり前なんだ。」と焦っていました。でも、友達、先生、家族のみんなが「ゆっくり、ゆっくりでいいんだよ。」と声を掛けてくれたのです。私はこの言葉を聞いてとても安心しました。「学校に行けないのはだめなことなんだ。」と思っていた私にも声を掛けてくれる人がいる。私はまだ大丈夫、焦らなくてもいいんだと思えてきたのです。

私は周りの人に助けられて成長することができました。学校に行けなかったという経験は確かに辛く、苦しいものでした。でも、この経験があったからこそ、今の私がいます。私は「当たり前が当たり前ではないのだ。」ということに気付くことができたのです。今では私にこのことに気付かせてくれた貴重な体験だったのだと前向きに考えられるようになりました。

今の私は、「たくさんのことに挑戦したい」という気持ちで一杯です。皆さんの多くは、学校に来ることが当たり前だと思っているでしょう。だから学校の楽しさや大切さに気付かなかったり、なんとなく毎日を過ごしていたりしている人もいるのではないでしょうか。私は、勉強をして分からなかったことが分かるようになることに喜びを感じます。休み時間の友達との会話にうれしさを感じます。当たり前すぎて気付かないかもしれないけれど、学校に来ているからこそ、体験できることがたくさんあるのです。この当たり前の日々を「当たり前だな。」と思い、終わらせるのではなく、この時間も大切な人生なのだと気付いてほしいのです。そして、今、一度しかないこの瞬間、ここでしかできないようなことに挑戦してみるともっと新しい未来が開けるのではないでしょうか。私は、今そんな人生を歩んでいます。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

私は様々なことに挑戦したいと思っていました。その時、たまたま学校の掲示板で「私の主張」と書かれたポスターを目にして、これなら私の考えを皆に伝えることができるし、新しい挑戦にもなると思いました。早速、担任の先生に伝え、「私の主張」に応募することにしました。伝えたいことはある程度決まっていたので、悩むことはあまりありませんでしたが、自分のありのままを伝えることには少しためらいがありました。でも、今の思いを伝えることは自分のためになることはもちろん、周りの人が前向きに考えられるきっかけになればいいと思い、自分の考えを発表することにしました。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

美しい会津を未来に残すためにも

福島県　会津若松市立第一中学校　3年
林　胡桃実

「福島県がワースト一位」

部活動でくたくたになって帰った私の耳に飛び込んできたショッキングな順位は、ゴミ問題について話すテレビニュースの声でした。そして、続いて「自治体の中では会津若松市がワースト四位です。」という耳を疑いたくなる順位が出されました。あまりの驚きに、カバンを背負ったままテレビに見入る私の傍では、母が納豆の容器を手にして、「これは資源ゴミなんだから、洗って資源にしてよね。」「牛乳パックだって洗って開けば資源ゴミで出せるんだよ。」と、ゴミ箱を見て怒鳴っていました。「このままだと、ゴミが有料になるんだから、気を付けてよね。」とも。

なんと会津若松市が『ゴミ緊急事態』を宣言し、来年一月をめどにゴミ処理の有料化を検討することになったというのです。

母の剣幕に、「そうなんだ。」と思いながら我が家のゴミを見直すと、納豆のパックや包装用のビニールや、ヨーグルトの容器などが見つかり、ゴミ全体の四分の一は資源ゴミでした。それから、見終わったプリント類も重ねてまとめたら、リサイクルできるし、洋服などもリサイクルショップ等に持っていけば、再生できるのだと改めて思いました。

我が家は両親と祖父母と姉と私の六人家族ですが、ある日曜日に出したゴミだけで、45リットルのゴミ袋の三分の一もあり、重さを量ってみると3.8㎏ほどありました。そして、その中763ｇが資源でした。学級のゴミから想像しても、これは我が家だけの問題ではなく、会津若松市全体で考えると、家庭から出るゴミは毎日、16トン近くを減らせるのではないでしょうか。あとは、街中に捨ててあるゴミを分別すれば、目標の16トンの減量を達成させられるのではないかと考えました。そこで、我が家の一番近くの公園に落ちているゴミを拾ってみました。重さは全体で約1.8㎏で、そこからペットボトルなどのプラスチックゴミを分別したら約1.4㎏が資源になりました。会津若松市内にある公園の数は20ヶ所だとしても28㎏にはなるはずです。

二年後から使われる予定のゴミ処理施設に合わせてゴミの量を減らす必要があるのなら、それに見合う努力を、みんなでするべきだと思います。

そのために、我が家では、ゴミと資源との分別を注意し合うことにしました。忙しくても面倒くさくても、資源に回せる物は軽く水洗いをしてから資源回収用の箱に入れるように家族みんなで声を掛け合っています。きちんと分けない家族に対して注意する私をあきれたような目で見ていた父や姉も今では積極的に分別しています。面倒なことも習慣づければ当たり前にできるようになることも、今回のことで立証された気がします。

公園のゴミについてはしばらくの間は、友人たちとボランティア活動をしようと相談しています。始めてからまだそんなに経っていませんが、毎週日曜日に掃除をしていたら、最近ではゴミが減ってきました。人はきれいなところは汚さないようにするのかもしれません。

私も今回のニュースで初めて知ったのですが、焼却炉のことを知らない人はたくさんいると思います。現状や課題について、市民みんなにしっかりと伝われば、もっと本気でゴミの削減に協力してくれる人が増えると思います。何せここは「観光地会津」の中心なのですから。

私は、鶴ヶ城のお膝元の住民として、誇りと責任を持って努力できるように、もっと周りに呼びかけていきます。学校やご近所など、身近なところから大きな削減の輪を広げていきます。

みなさん、私たちのふるさと会津を、私たちの手で、ゴミのない美しい街にして、未来に残しましょう。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

まずは，福島県や会津若松市のゴミ問題の深刻さについて報道された内容に強い驚きを感じ，「このままではいけない。自分から活動していこう」と決意したことがきっかけです。また，自分一人ではできないことでも多くの人たちが同じ目的で活動すれば解決できると思い，課題や解決策を広く周囲に伝えることで，多くの人たちが賛同して活動してくれるものと考えました。そうして，美しい環境を未来にまで保っていきたいと考えました。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

ボランティアが導いてくれた将来の夢

茨城県　茨城県立盲学校中学部　3 年

深川　彩春

私は、全盲の中学生です。そんな私の将来の夢は、福祉の仕事をする事です。以前は、福祉の仕事か、事務仕事かの二択でした。「福祉の仕事をしたい」という思いが強くなった理由は、ボランティア活動に出逢ったからです。

中二の春、母に「水戸で、中高生対象の講演会があるみたいなんだけどどうする？」と聞かれました。最初の答えは、「いや、行かなくてもいいかな。」でした。何故なら、行くことが少し面倒くさかったのと、参加者や職員の方から、「目が見えないの？可哀想ですね。」と言われる事が嫌だったからです。いつもなら母が「そっか。」と言ってこのような会話は終わるのですが、今回は違いました。返ってきた答えは、「ママは行ったほうが良いと思うよ。大学とか行きたいのなら、そういうのも聴いたほうがいいと思う。」でした。母の気持ちは分かるのにまだ心は動かされませんでした。目が見えないということを耳にタコができるほど言われるくらいなら行きたくない。まだそういう気持ちが強かったからです。しかし、「大学」という言葉で少しずつ気持ちが変化してきました。不安はあるけれど大学には進学したいから、とりあえず聴いてみよう。「聴くだけ聴いてみる。」優柔不断でしたが最終的に私は、母にそう答えました。

参加を決心したのは良いものの、当日が近づくにつれて障害について言われる事に対する不安は大きくなっていました。当日も不安は消えず、前で話す訳でもないのに緊張していた私。会場に入り着席すると、私に酷い事を言うどころか、皆さんは優しく挨拶をしてくれ、温かく迎え入れて下さいました。グループディスカッションでも、「彩春さんは、これについてどう思いますか？」と私の意見もしっかりと聞いて下さり、孤立する事なく話し合いにも参加する事ができました。皆さんと活動ができたということよりも、皆さんが私のことを受け入れてくれたという事がとても嬉しかったです。休憩時間に担当の職員の方が、育成研修があることを教えてくださったのでそちらにも参加する事にしました。

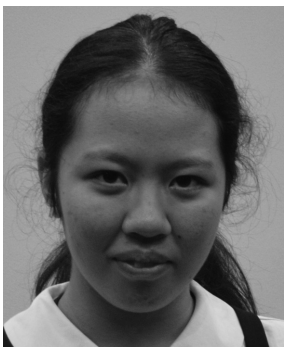
当日は、講演会よりも緊張していたと思います。しかし、緊張と一緒に存在した気持ちは、「不安」ではなく、「楽しみ」でした。きっと講演会の時と同じで、皆さんは私を受け入れてくれる。そう信じていたからです。その日も、講師の先生を初め、メンターの方々や研修生達、担当の職員の方は私に対して「障害者」としてではなく、「研修生」として接して下さいました。

この研修では、身の回りの課題を考え、グループ毎にそれを解決するためのプロジェクトを企画します。私たちのグループは、「視覚障害者に対する理解」を課題とし、視覚障害者の世界を体験するイベントを企画しました。研修の中や、SNS を活用しながら企画を進め、今年の二月、イベントを開催することができました。意見はまとまらないし、皆さんのテスト期間もありスケジュールも中々合わないので、開催はできないかもしれない。開催が楽しみな反面、不安もありました。開催が決まった時は、誉められたときよりも、目標を達成したときよりも嬉しかったです。当日は、学生や社会人、そして小さな女の子も来てくださいました。視覚障害者の日常の体験や、視覚に頼らなくてもできる遊びを企画したので、年齢を問わず楽しめるイベントを開催できました。このイベントを開催出来たことは、自分にとっても、グループにとっても、大きな一歩になったと思います。

イベントを企画したり、障害者に関わるような事をしたりしたい。この経験から、自分が本当にやりたかった事を見つける事ができました。私は、最初に述べた様に「福祉の仕事をしたい」と考えていますが、正直なところまだはっきりしていません。しかし、この経験を通して、進路に向けての矢印が少しはっきりしてきたように感じます。今後もボランティア活動を続け、たくさんの人と交流して、自分の中の世界を広げたいです。そして、最高の仲間達と活動を続けられる限り続けていきたいです。

この主張をどんな人に届けたいですか？

以前の私は、健常者に対してあまり良いイメージがありませんでした。しかし、健常者との関わりを重ねる度に良いものに変わっていき、相手の方も私の体験談などを質問してくれるなど、障害者に対するイメージを変えようとしてくれていました。この主張を聞いて障害者が自信をもつことのできるきっかけとなってもらえれば嬉しいし、健常者にとっては障害者に対するイメージアップにつなげてもらえればという思いで書きました。障害の有無などを問わずたくさんの人に届けたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

心の土台を固めて

栃木県　高根沢町立北高根沢中学校　３年
岡本　智尋

「多様性を認める学校に、していきたいです。」
昨年の生徒会立会演説会で、自分が言った、この言葉に、最近、違和感を持つようになりました。

私の学校では、数年前から学校のきまりが見直されるようになり、運動靴や靴下、下着の色も、白一色ではなくなりました。女子のスラックスの着用も認められています。

現在の生徒会役員である私たちは、見直す必要があると思うものや、守られていないきまりなどの洗い出しを進めているところです。

その話し合いの中で、ふと疑問に思ったことがありました。髪型や服装などは、多様性について考えていく必要があると思いますが私たちが社会生活を営む上で、当然守るべきルールやマナー、例えば、時間を守ることや挨拶や返事をするということまでもが、「多様性」という言葉で曖昧になってきているのではないかということです。できないことや苦手なことは無理にやらなくてもよいなど、「多様性」という言葉の解釈そのものが多様になり、あらゆる考えを容認してしまう「魔法のアイテム」として、浸透しつつあるのでないかと思うようになりました。

私は改めて「多様性」という言葉を辞書で調べてみました。そこには「いろいろな種類や傾向のものがあること。変化に富むこと。」と書いてありました。どこか曖昧で、はっきりとした定義がなく、使い方次第では、さまざまな形に変化してしまいそうな危うさを感じました。

小学校三年生のときのことです。新しく担任になった先生から、全員で守るように言われたことがあります。それは、宿題をきちんと出す、廊下を走らない、挨拶をする、けんかをしないなど、どれも小学校一年生の時に習うような基本的なルールばかりでした。でも、その頃の私たちは、そんな当たり前のことができていなかったのです。先生は私たちに、こう話してくださいました。
「自分の意見が正しかったとしても、信用されていなければ、その意見をだれも真剣に聞いてはくれないだろう。信頼される人間になるためには、普段の生活をきちんとしていこう。そして、自分の意見を胸を張って言えるようにしよう。」
この言葉は今でも心に残っています。そして多様性という言葉の軽さに違和感を覚えたのは、先生の言葉が、ずっと私の心の土台になっているからだということに気づきました。

ルールやマナーを守るということは社会生活を営む上での大きな基盤です。それは得意不得意や好き嫌いとは関係のないもので、私たちが共通して築きあげていくものだと思います。二年ほど前、カタールで行われたサッカーのワールドカップで、日本代表が使ったあとの整理整頓されたロッカールームや、ゴミ拾いをするサポーターの姿が海外メディアで賞賛されたことがありました。私たちが幼いころから学び、大切にしてきたことが外国でも実践されたこと、そして、それが高く評価されたことを誇りに思います。

多様性を認めるとは、いろいろな価値観を持つ人間同士が、自分の個性を互いに生かせるようにしていくことだと思います。でも、それは、共通の土台があるからこそ成り立つものではないでしょうか。ルールやマナーを守ること、周りへの感謝や相手を敬う気持ちをもつことがその土台を作るのだと思います。

私たちは、自分の考え方や生き方が否定されるのではないかと不安になることがあります。だからこそ、守るべきものは何なのか、変えなければいけないことは何なのか、本当に大切なことは何なのかを真剣に考え、確かめ合いながら、それぞれの心の土台を、揺るぎのない、頑丈なものにしていくことが重要なのではないでしょうか。

一人一人の、その取り組みこそが、多様性を認める社会の実現の第一歩であると私は思います。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

生徒会で髪型や服装などの学校のきまりを見直しているときに、どこまで「多様性」を意識して話し合ったらよいのか疑問に思うことがありました。そして、「多様性」という言葉の意味が曖昧であるがゆえに、あらゆるものを容認してしまう「魔法のアイテム」になりつつあるのではないかという危機感も感じるようになりました。この疑問や危機感を皆さんへ投げかけ、共に考えてほしいと思ったことが主張を書くきっかけです。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

言葉のヤングケアラー

群馬県　榛東村立榛東中学校　3年

アジズ　ハディア

病気の家族を看病している子、幼い兄弟の世話をしている子、日本語が苦手な家族に代わって通訳をしている子、皆さんの周りにこのような子供はいますか。

彼らは「ヤングケアラー」と呼ばれています。そしてその中には、「言葉のヤングケアラー」と呼ばれる子供たちがいます。これは、日本語が話せない、読み書きができない家族のために、言葉を支援する子供のことです。今日本ではそうした子供たちが増えています。そして、私も「言葉のヤングケアラー」の一人なのです。

私は日本で生まれ、日本で育ちました。皆さんと同じように日本の幼稚園、小学校に通い、そして中学校に入学しました。しかし、私の両親は外国出身で、日本語が分かりません。私の家庭では両親とはウルドゥー語という言葉で話し、兄弟とは日本語で話しています。両親は日本語ができないため、病院や買い物に通訳として一緒に行くことが多くあります。病院での通訳はとても大変です。専門的な言葉や難しい単語がたくさんあるため、調べながら通訳する必要があります。また、学校生活のことでも先生とコミュニケーションをとることができません。学校での面談では、両親の代わりに日本語ができる兄が来ます。

私は春休みに外国にルーツを持つ子供たちが、みんなで絵本を作るプロジェクトにボランティアで参加しました。このプロジェクトは、日本語を学びながら一冊の絵本を完成させるもので、日本に来たばかりの子供たちもたくさんいました。彼らは日本語が分からず日本の学校に通っています。日本人の同級生に一日でも早く追いつこうと、一生懸命日本語を勉強しています。言葉が分からないことは本当に辛いです。彼らは、言葉が通じないことがもたらす孤独や困難を感じているのです。

皆さんも考えてみてください。周りの人がこっちを見て笑いながら何かを話しています。言葉を理解できないとそれが笑顔なのか、冷やかしなのか全く分かりません。文字はすべて図形のように見え、情報は目で見てしか得ることができません。

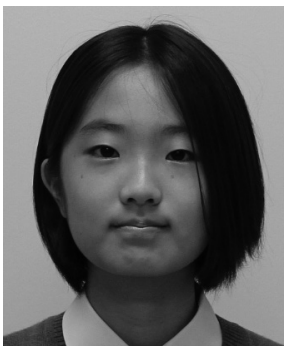
しかし、言葉が分かってくれば、今度は通訳として家族を支えなければなりません。

ボランティアに参加したとき、私は普段家族の通訳をしている他の子供たちと会いました。その中にはすごく辛い思いをしている子供もいました。その子の家族が亡くなってしまったときに、病院から家族が亡くなったことを通訳するように言われたそうです。それを周りに伝える必要があったと聞いて、すごく辛い思いをしている子供たちが他にもたくさんいるのだと感じました。皆さんはこのような子供たちが多くいるのを知っていますか。今日本には、外国にルーツを持つ子供たちが約13万3千人いると言われています。総務省の調査によると2065年には五人に一人がそうした子供になると言われており、その数は今後も増加していくと予想されています。

私は自分自身が言葉のヤングケアラーとして両親の通訳を通してできた経験をシェアすることで、同じような状況にいる子供たちに勇気を与えることができると考えています。自分は一人ではない、他にも同じ状況の人がいると、皆さんも目を向けてください。日々辛い思いをしながら、一生懸命に家族を支えているヤングケアラーの子供たちがたくさん存在しています。私たち一人一人がまず知って、そして周りに居るかもしれないこのような子供たちに寄り添う必要があります。例えば、優しい言葉をかけることで、少しでも気持ちが楽になります。「最近どうしてるの？」「何か大変なことあった？」このような言葉でも、彼らの心を少しでも軽くすることができるのです。あなたの周りにもヤングケアラーとなり、苦しんでいる子供がいるかもしれません。彼らは自分達の成長や学びを犠牲にしている可能性があります。私たちが小さな一歩を踏み出すことで、その一歩が大きな変化を生むはずです。子供が子供らしい生活を送れるように。

この主張をどんな人に届けたいですか？

初めて「言葉のヤングケアラー」という言葉を知った人もいると思うので、外国にルーツを持つ子どもたちの存在や、置かれている状況を知らない人たちに知ってほしいです。まずは、行動を起こすところまでいかなくてもいいので、知ることから始めてほしいと思います。また、外国にルーツを持つ子どものみなさんは、自分たちの存在をもっと周りに伝え、自分に自信を持って過ごしていきましょう。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

みんなって誰ですか。

東京都　東京都立立川国際中等教育学校　３年
中川　絢心

「みんなこうしたほうがいいって。」「みんなだってやってたもん。」

こう言うと、母はいつも私に「みんなって誰よ。」と言います。私はそれに対して何人かの友達の名前を挙げますが、「みんなじゃないじゃん」と言われるのがお決まりの流れになっています。自分で「みんな」という言葉を使っている時は、多数の人から浮くのが嫌なんだから別に全員じゃなくてもいいじゃんと思っていました。

小学校中学年のとき私は、自分の話し方の癖について友達に指摘されたことがあります。声が少し高いことと、滑舌が悪かったことをわざとやっているのだと思ったのだそうです。そのときに、言われたことの一つが「その話し方やめたほうがいいってみんな言ってたよ」です。わざとやっているつもりはなかったし、普段は笑顔で接してくれる友達に、話し方に違和感があると打ち明けられたことにかなりショックを受けました。また、「みんな言っていた」と言われたことで、他のクラスメイトも内心同じように感じているのではないかと不安で、誰なのか分からない「みんな」の意見におびえていました。

以前、似たようなことがあったときも、私は「みんな」という言葉に強く不快感を覚えました。「みんな」という言葉の指す範囲はずいぶん大きく感じます。インターネットの普及に伴い、その範囲はさらに大きくなっています。自分がその「みんな」と違っているのだと知ると、どうしようもなく不安になります。

でも、「みんなじゃないじゃん。」

「みんな」と言われると、大きな不快感とともに母の言葉を思い出します。実際に、話し方について指摘された時も、多くの友達は気にならないと伝えてくれました。

そこでふと疑問に思うことがあります。それは、どうして「みんな」という言葉を使いたがるのかということです。「みんな」というのは非常に便利な言葉です。たったひとことで自分に仲間がいるのだと相手に示せる。なんとなく一人じゃないと安心できる。「私はこう思う」ただ一言そう言えばいいのに、必死になって自分を「みんな」に合わせようとする。

人と違うのは確かに怖い。でも、自分と異なる人の意見が多いからといって自分が間違っているわけではないし、逆を言えば多くの人が同じ意見だからといってそれが正しいとも限りません。「みんなと違うから」と言って自分の意見を言わない。「みんなもやっていたから」と言って悪ふざけの輪に交じって暴言を吐く。自分で考えることをせずに周りについていって、それは本当にあなたのやりたいことですか。いやなことをいやと言わせてくれない「みんな」といてあなたは苦しくないですか。

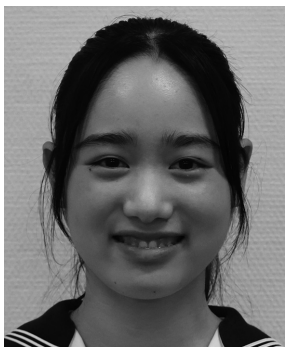
以前の私は、「みんな」の意見におびえ、周りから浮かないようにと必死でした。中学生になって、SNS やアイドルの話をする友達に囲まれて、知っていることがあたりまえという空気が苦しく感じることもありました。それでも、やっぱり私はこれが好き、と勇気を出して口にしてみようと思います。すると、完全には分かり合うことができなくても、自分の思いを素直に話せるようになって心がスッと軽くなったように感じました。

いつだって大切なのは自分がどう思うか、そして何を信じるかです。母もずっと、周りがどう、ではなく私自身の意見が聞きたかったのではないでしょうか。インターネットが普及し、多くの意見に囲まれる時代に生きているからこそ恐れずに自分という存在を大切にしてほしい。不安になったら思い出してほしい。

「みんな」って誰ですか。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

まずは自分で考え、自分自身の意見をもつことを大切に過ごしていきたいと思います。人と違うことは今でも怖いことだし、簡単になくせるようなものだとは思いません。でも、人はそれぞれ違うのだから、怖いからいやだ、といつまでも言ってはいられません。一歩踏み出してみれば、案外違うことってそんなに怖いことじゃないかもしれない。周りに流されず、それぞれが違いを認め合うことができれば、違いはむしろ強みだと思います。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

書で伝える

神奈川県　横浜共立学園中学校　3年
菅井　美結

現代のコミュニケーションツールというとスマホやパソコンがあげられる。指一本で画面やキーボードを操作することで簡単にメッセージを送ることができる。なんて便利な世の中なのだろうと日々感心する。しかしその便利さにより、現代人の生活から遠ざかってしまったものにも目を向けたい。

書道部に所属している私は文字を「書く」機会が多くある。そして文化祭では毎年、見学に来た受験生に「必勝」「頑張れ」といった作品を書いて渡す。今年の夏も同じようにひたすら書いているとふと、あることを思い出した。それは去年の文化祭のことだ。

いつものように受験生に私が書いた作品を渡していると、ある保護者の方からこんなことを言われた。「娘は学校のマークがはいったグッズよりも、こういう在校生の温かい気持ちがこもった世界に一つだけのものが勉強のやる気になるそうです。」と。この言葉を思い出しはっとさせられた。

「気持ちがこもった」「世界に一つだけ」と思われるものとはどのようなものだろう。「必勝」や「頑張れ」といった言葉本来が持つ意味からだろうか。それとも、印刷される文字より人間味のある完璧ではない文字だからだろうか。

私の答えはどちらも「ノー」だ。おそらく、文字を書くときに思い浮かべる受験生達の顔や合格してほしいと願う気持ちが、筆をつたい、文字に表れ、世界に一つだけの作品となるからだろう。

手紙も「書く」ことで温かい気持ちを表現できる作品の一つだ。相手のことを想いながら、気持ちを込めて書く。喜んでもらうために絵を描いたり、色ペンで装飾をしたりする。最後に封筒を選び封をして、ポストまで行き、手紙を入れることで、やっと世界に一つだけの、永遠に残る作品を相手に送ることができる。手間暇はかかるが、この動作一つ一つの重みが、手紙の一文字一文字によく表れているだろう。そしてまた、それを受け取った人はその文字に触れ、鑑賞することで、まるでそこに手紙を書いた相手が実際にいるような気分になるだろう。

機械やコンピューターではどうだろうか。たしかにメッセージアプリでスタンプを送ったり、絵文字を送ったりすると「書く」よりもはるかに豪華な装飾ができる。いろいろなフォントも使えるし、読みやすい。だが少し立ち止まって考えてみてほしい。それは相手の動作の重みを、気持ちを直接触わって手から感じることのできる、永遠の作品になるだろうか。唯一無二の作品になるだろうか。

近年、デジタル化が進み、いつでもどこでも人とやり取りできるようになった。そのおかげで出来るようになったことがたくさんある。例えば、どんなに遠くにいても誕生日メッセージを送ることができるし、ちょっとした喜怒哀楽も一秒で伝えることができる。機械やコンピューターは私たちの日常生活をより豊かにしてくれた。だが、同時に「書く」ことの重要性が忘れられているように思う。だからこそ、もう一度「書く」ことで生まれる作品のよさを再認識してほしい。

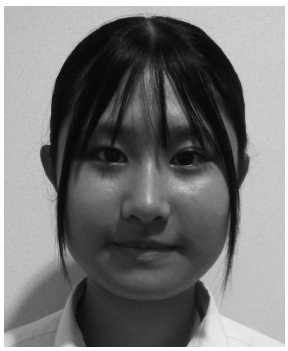
コミュニケーション手段をすべて手書きにするべきだと主張しているわけではない。ただ、現代人には機械やコンピューターを使ったデジタルの作品と、「書く」ことで生まれる、永遠に記憶に残る作品を使い分けるスキルが必要だと思う。

これから効率性や利便性がより追求され、機械やコンピューターに頼る機会が増えていくだろう。だからこそ私は主張したい。「書く」ことでしか表現できない作品の良さを。機械にはだせない、気持ちのこもったその一文字一文字の温かみを。

心に永遠に残る、世界に一つだけの美しい作品を私はこれからも書いていきたい。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

私が学校で所属している書道部は、年々部員数が減ってきている。部員それぞれの個性を表すことができる、素晴らしい作品をつくりあげることができるのに、なぜ部員数が減ってしまうのか、とても疑問に思った。だから、書道をすることで相手に伝えられることを文章にまとめ、多くの人に知ってもらえたらいいなと思い、このテーマで作文を書こうと思った。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

私の支えとなる存在

新潟県　十日町市立中里中学校　３年
高橋　紫

深夜、救急車のサイレンの音が聞こえて、私は目が覚めた。真っ暗な部屋の奥に行くとそこに小さな明かりが点いていて、男の人が立っている。「パパ？」と聞くと、その男の人は言った。「お医者さんだよ」と。私はまた眠りにつき、いつものように朝、起きた。

これは、私が四歳の時の記憶。私の父は、脳梗塞と心筋梗塞で亡くなりました。冒頭の回想シーンは、父が亡くなる時の序章と言えます。あの時、父が救急車で運ばれてからの記憶は、私にはあまりありません。それでもはっきりと覚えているのは、父のお見舞いに行った時のことです。私は父に四本の指を出して、「これ何本に見える？」と聞きました。その時父は、「二本」と答えたのです。そのことがあまりにも衝撃的で、私は何も言えませんでした。違う本数で同じように試してみても、何度も間違える父。明らかにいつもと違う父の姿だけは、今も鮮明に覚えています。

その数日後、父は病院で亡くなりました。父が亡くなった日、母は病院に行き、母の友人が私の保育園に送ってくれました。保育園の先生は、「今日の送迎はお母さんじゃないの？」と言いました。母の友人は先生に父が亡くなったことを話し、先生の目からは涙があふれ出ました。その様々を見た時、初めて私は、「死」というのは切ないことなのだと、幼心に感じたのでした。

父が亡くなってからは、母と兄と私の三人での生活が始まりました。私の母は、中国出身です。当時の母は、日本語を上達させようと懸命に努力し、たくさん苦労したと思います。父の死、国籍の壁……。そのような状況の中でも、当時四歳の私と九歳の兄を一人で支えてくれた母に、本当に感謝の思いを抱くばかりです。

母は仕事に精を出し、私達に辛い思いをさせないようにしてくれました。しかし母は、仕事をしていく中で腰を悪くしてしまったのです。私が中学二年生の時に、ヘルニアで二か月間入院することになってしまいました。母が入院した日の夜、私はたくさん泣きました。そこに母から、電話がかかってきました。母は私に「ごめんね」と、震えた声で謝ってくれました。

母の入院中、私のおじが母の看護や私の家の手伝いをしに来てくれました。兄と二人だけで二か月も生活することは大変だったので、おじの協力には本当に助かりました。母のいない生活がどれほど辛かったか、今でも、そしてこれから先も決して忘れることはないと思います。母の入院中、それまで母が私のためにしてくれた苦労や気遣い、その全てを私は実感したのです。

今後私は、母にもっと迷惑をかけてしまうかもしれません。それでも、そんな私をいつも温かく見守ってくれる母のことが大好きです。今の私がこうして普通に生活できるのも、母や兄、そして亡くなった父が、私を支えてきてくれたおかげです。

皆さんにとって、家族とはどんな存在ですか。「大切な存在」「いて当たり前」など、様々な答えが返ってくるでしょう。私はこれまでの自分の人生から、家族とはお互いを支え合う「いなくてはならない存在」だと、強くはっきり思います。そんな家族に対して、私は深く、深く感謝しています。

皆さんの中に、家族に自分の思いを伝えていない人はいませんか。家族に反発して、関わりをもたないようにしている人はいませんか。私のように、「いなくてはならない」はずの家族が、突然いなくなってしまうこともあるのです。私は、家族に伝えたいことがあれば、いや、なくても、積極的に言葉や態度に表すべきだと考えます。

私はこれから、家族を支える側にまわる準備を始めます。そして、家族に対して感謝の思いをいつもしっかり言葉や態度で伝えていきます。それが、後悔のない人生を送ることになると思うから。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

この作品を書いたきっかけは、過去の自分の辛い経験からどんなことを学ぶことができ、どんなことを思ったのか、自分の家族に対して考えていることをまとめてみたいと思ったことです。父の死から10年以上が経ち、中学生になった今、私は大切な人に思いを伝えることの重要性を感じます。だからこの主張を通し、みなさんも家族に感謝の思いを伝えられたらよいのだということを発表します。そして自分は、大切な家族を支える決意について、この発表を通して表現していきたいです。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

大きな橋

山梨県　北杜市立甲陵中学校　3 年
小寺　輪子

蜂蜜色の美しい髪。澄んだ海のような青い瞳。私の隣に立つその子は、紫陽花が美しく咲く浴衣を着て、満面の笑みを浮かべている。私はその写真が大好きで、今も見返す度、幸せな気持ちでいっぱいになる。

私は 4 年間ドイツで暮らしていた。ドイツには外国人が 3 割近くいる。今思い返してみると、想像し難い「当たり前」だ。隣の席の子も、近所の子供も、肌の色だって家の中で話す言語だって私とは違うけれども、皆ドイツ語を母国語の様に話す。そんなことに違和感も疑問も抱くことはなく、日常の一部でしかなかった。なんて素敵なことなんだろう。

仮装パーティーに友達と一緒に浴衣で参加した事があった。ブロンドの彼女と和風な浴衣の対照的な組み合わせ。クッキーに醤油をかけたようなその組み合わせは想像以上に合いすぎて、悔しさすら覚えてしまった。でも浴衣を完璧に着こなし、嬉しそうにする友達を見ると誇らしさや認めてもらった幸福感で満たされた。「日本語学校ごっこ」をよくして、私だってぶきっちょにしか書けないひらがなを教えたことがある。今もくるドイツの友達からの手紙には、きっともうたくさん書いてきた「わこ」の文字が上手に書かれている。それが嬉しくてたまらない。

ただ、いつでも誰でも日本を認めてくれるわけではなかった。ある時、随分前に渡した日本のグミが友達の車に未開封のまま置きっぱなしだった。もったいないのだろうかなんて呑気な事を考えていた私は冗談混じりに指摘した。そんな私に彼は何食わぬ顔でこう返した。

「アジアのものは気持ち悪いから食べたくない」

突然殴られたような気分だった。全く悪気のない表情でそう言い放った彼のことが、信じられなかった。彼の一言はいまも私の頭の中で何度も再生される。大好きな故郷が大好きな友達に否定される。辛くて、心が締め付けられる。

人口の約 3 割が外国人のドイツでも起きている差別。日本でもこれから大きな課題になるはずだ。

SNS で、日本に住む外国人が言っていた。電車で誰も隣に座らなかったり、歩いていると遠ざけられたりする、と。現実的なその光景は簡単に浮かび上がった。「自分は絶対に差別しない」という我ながら浅はかないつかの考えが恥ずかしくなった。

人種差別。それは民族や文化、言語、肌の色の違いに対する偏見などにより、固定の人種を差別すること。自分がその国の人に何かされた事がなくても、どこかで得た嘘か本当かもわからない情報だけで、人を差別したことはないだろうか。今日本で生活している私達に、人種差別はピンとくる言葉ではない。でも他国の食べ物や製品、文化に対する差別は日本でも感じない日はないし私も偏見を抱くことがある。

自分の故郷を否定されること。肌の色を、髪の色を、話し方を。それは文化であり魅力であるのに、自分には直し様のないことなのに否定されるとはどんなに悔しいことか。

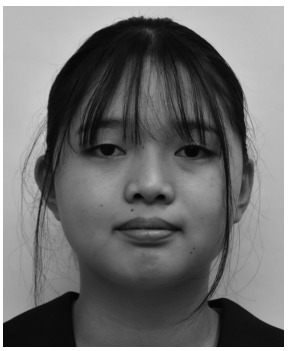
かつては脅威でしかなかった未知の人種同士。交わっては戦いを繰り返した歴史の中で、今はいとも簡単に出会い、繋がる事ができる。そんな出会いを差別なんかで終わらせてしまっていいのだろうか。繋がる権利のある私たちにはそのつながりを大切に守る義務があると思う。

どんどん減っていく日本の人口の中で増え続けている外国人人口。気がつけば日本だって外国人だらけになっているかもしれない。でもそんなことは関係ない。大切なのはどこの国の人か、どの地域から来たのか、そんなことではない。80 億人もの人口に対して、国の数はたったの 196。国なんかに縛られていては勿体無い。何人であるか以前に、その人は一人の人でその人にしかない魅力がある。見た目なんて、国籍なんて関係なく、その人自身の良さと向き合える人になりたいし、そんな世界になってほしい。

「壁が横に倒れた時それは橋となる」黒人奴隷解放運動に参加したアンジェラ・ディヴィスという人の言葉だ。今はまだ私たちの間に立ちはだかる大きな壁。それを倒せば世界でつながる橋になる。人種差別のない国なんてないのかもしれない。受け入れるのは難しいのもわかっている。でも、それができれば私たちはまた一歩、大きな一歩を踏み出せるはずだ。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

4 年間のドイツでの生活を通して、日本を受け入れてもらって嬉しかったことが山ほどある一方で、日本人であることを恥ずかしく感じたり、悲しい思いをすることもありました。でも、国が違うこと、文化が違うこと、一人一人が違うということは素晴らしいことのはずです。お互いの違いを受け入れ、人種差別のない世界になってほしい、という思いを伝えたかったことがきっかけです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

いってらっしゃい

長野県　飯田市立旭ヶ丘中学校　3 年
宮下　心

皆さんは、家族や友達とのあいさつや、会話を大切にしていますか。

私の父は、私が小学三年生の時にこの世から去ってしまいました。その日の私は、学校が終わり、友達と楽しく雑談をしながら下校していました。いつも通り家に帰ると、玄関前に家族が揃って私の帰りを待っていました。このような事は初めてでした。この時に、私は父の訃報を聞き、驚愕しました。言葉を失い、冷や汗をかき、大声で泣き叫んだことをとても覚えています。私は、頭の整理が追いつかないまま、父に会いに行くために病院へと向かいました。待合室はとても静かで、心臓の音がはっきりと聞こえました。一時間ほど経った時、医師の方に案内されました。そこで私が見たのは、私が知っている姿とは全く異なる父でした。血の気がない肌。ピクリとも動かずに固く閉じている瞼。信じられない程冷たくなっている体。肩車をしてもらう度に感じた体温も、父にはもう残っていませんでした。私の最愛の父は何処に行ってしまったのだろう。何故、父がこのような姿になってしまったのだろう。目の前に居る父に問いかけるように、私の心からどんどん思いが溢れ出てしまい、また泣き出してしまいました。「もっと一緒に遠くへお出かけしたかった」「これからもたくさん褒めて欲しかった」「もっとたくさん話をしたかった」でも、その願いが叶うことはもうないのです。

次の日からは、まるで別世界に来たかのような感覚でした。父が居る。という当たり前の光景が、当たり前ではなくなっていました。私は胸が強く強く締め付けられました。当たり前ではなくなることがどれほど苦しく、辛いものなのかを身をもって知ったからです。それとは逆に、当たり前にある物へのありがたみも強く感じました。父と毎日話すことが出来ていたありがたみ、それを失う辛さは言葉に表すことが出来ません。私は、父と最後に交わした会話を思い出してみることにしました。思い出すと、「いってらっしゃい。」「いってきます。」これが、私と父が交わした最後の会話でした。私は父が亡くなってからの六年間、ずっとこの会話での後悔があります。きっとこの後悔は私が死ぬまで残り続けるでしょう。その後悔とは、目を見て話さなかったことです。それは何故かというと、この時が生前の父と顔を合わせて会話することの出来る最後の機会だったからです。私は、たまたま寝坊をしてしまい、学校へ行く準備に追われていました。父は仕事で、いつも七時前に家を出ていきます。私は普段、しっかり相手の目を見てあいさつをするのですが、あの時だけ、父の目を見て「いってらっしゃい。」が言えませんでした。これが私と父が最後に交わした会話です。自分を殴りたくなりました。最愛の父に私はなんてことをしたんだと、悔やんでも、悔やんでも、悔やみ切れません。

皆さんに再度問います。家族や友達とのあいさつや、会話を大切にしていますか。人間が命を持っている限り、「死」という終わりや、別れが必ずやって来ます。皆さんには、人と話す時には、相手の顔を見て話して欲しいです。相手の顔を見て話すことで、相手のことをより深く知ることが出来たり、相手の表情を見ながら話すことで、会話がより一層楽しくなったりと、たくさんのメリットがあります。そして、家族や友達と話せるという当たり前が、どれほど幸せなことなのかを度々思い出して欲しい。大切な人と過ごす時は、一分一秒を大切にして欲しい。これは、もう父と会話することの出来ない私からのメッセージであり、願いです。私のこの経験を話すことで、私と同じ後悔をする人が一人でも減り、笑顔が少しでも増えてくれると、とても嬉しいです。どうか皆さん。家族や友達とのあいさつや、会話を大切にしてください。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私はこの主張を大切な人がいる全ての人たちに届けたいです。そんな人たちに、今ある幸せの価値に気が付いて欲しいです。そして、その幸せをかみしめて欲しいです。また、私と同じくらいの年齢の皆さんの中には、思春期で家族に強く当たってしまう人もいるのではないでしょうか。そんな人たちにもこの主張を届けたいです。この主張を聞いて、家族というものがどれほど尊いものなのかを再確認して欲しいからです。この主張が多くの人に届いたら嬉しいなと思います。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

海を越えた架け橋

石川県　金沢市立長町中学校　２年
北野　はな

「アンニョン」「コマウォ」「ミアンヘ」といった多くの韓国語が飛び交う家庭で私は育ちました。私の母は韓国人です。これまで、外国人差別や韓国に対する偏見に自分を重ねて見られることが怖かったため、母が外国人であることをあまり話してきませんでした。しかし、この作文をきっかけに差別に苦しむ人々について多くの人に考えて欲しいと思い、ここに私の母のことを記そうと思います。

私の母は今まで、日本で仕事を探すにあたって大変苦労してきました。母によると、どれだけ日本語がうまくてもどれだけその仕事の経験があっても、外国人というだけで望む仕事に就けないというのです。母は留学生として来日し日本の大学を卒業してから、もう二十年以上日本で暮らしているため、日本語は相当上手な方です。初対面の人は、私の母が外国人だなんて露ほども思わないでしょう。また、母は日本で様々なアルバイトをしてきたため、従業員として働いたり料理をつくったり、色々な仕事ができます。しかし、それでもアルバイトに応募したとき、電話口で苗字を言った瞬間に相手の態度が急変し、断られるといった失礼な対応をされたことがしばしばあるそうです。あるときは「求人情報誌には確かに載っているけど、もう募集はしていないんです」とあからさまな嘘を言われたり、「あなたどうせ日本語話せないでしょう笑」と勝手に決めつけられて侮辱されたりすることもあったそうです。それを聞き、私はとても悔しい気持ちになりました。中身を全く見てくれないのです。母は日々日本語を勉強しており、仕事においても休日に家で料理の練習をしたり仕事内容を復習したり、努力しています。そのような母の努力を見もせず、聞きもせず、ただ苗字を聞くだけで断られてしまうことにショックを受けました。人の中身を見ず、偏見でこんな人だと決めつけてしまう。これが差別なのか……と気づき心が締めつけられる思いでした。

当然、差別は人の心を深く傷つけてしまう、絶対にしてはいけない行為です。しかし考えてみると、先程のアルバイト先の相手も、外国人だからというだけで断ったのには理由があるのかも知れません。もしかすると、今まで雇った外国人が、その仕事に必要な日本語力や技術が足りなかったといったことがあり、その経験からもう外国人を雇うのはやめようと考えたのかも知れません。もしその人が、母の日本語力を認めてくれ、仕事もひたむきに取り組む人だと分かっていたら、このような態度ではなかったのではないでしょうか。

つまり差別とは、相手のことを知らないから、知ろうとしないから起こってしまうのでしょう。

また、差別の原因には人々を自分勝手に分類して考えてしまう、といったことがあると思います。アルバイトの電話口での相手は母を「外国人」というカテゴリーに分類して思い込みを強めてしまったのかもしれません。私たちはこれらのことを無意識にやりがちです。例えばこの人は女性だ、外国人だ、年齢がいくつだ、学歴が何々だ、職業が何々だ……と。このように相手を勝手に分類してよく知りもしないのに判断してしまうことは意識しなければなかなか改善できません。

そのため、差別のない世界を目指すには、相手のことを知ること、そして自分のことを伝えていくことが最も大切だと思います。相手を何かのカテゴリーに分類して「この人はこうだろう」と決めつけるのではなく、一人ひとりの人間として、よく見て、よく知ることが必要なのです。

私は韓国人と日本人のハーフです。ハーフである私の役割は、正しい情報を伝える両国のパイプになることだと考えています。誰もが正しい情報を知ることができるのなら、差別は少しずつ無くなっていくだろうと信じ、海を越えた架け橋になりたいです。そのために私は今韓国語を勉強しており、将来は韓国へ留学したいと思っています。みなさんも、自分ができること、そして自分がすべきことは何か考えてみてください。差別も、偏見もない、誰もが快くのびのびと過ごせる世界の実現を願って。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

いつも明るく笑顔の絶えない母。小さい頃は、母の日本での生活は幸せなのだと、日本は差別の少ない国だと、信じて疑いませんでした。そのため、母が差別に苦しんでいることを知り、大きな衝撃を受けました。それがきっかけで、どうしたら母が笑顔でいられるか、どうしたら差別はなくなるのかについて考えるようになり、自分なりに導き出した答えを多くの人に伝えたいと思いました。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

「普通」を乗り越えて

福井県　越前市南越中学校　3 年

山口　世愛

私たちが日常の中で、よく使っている「普通」という言葉。その言葉の意味や重みを考えたことはありますか。「普通はこうする。」や「普通は持っている。」などの言い回しを私たちは日頃よく使っています。国語辞典で「普通」という言葉を引いてみると、こう書かれています。「特に変わったところのないこと。当たり前であること。」私は幼い頃から、母に「『普通』っていう言葉は使ってほしくない。」とよく言われてきました。当時はその母の言葉の意味をよく理解できていませんでしたが、小学生の頃のある出来事をきっかけに私はその言葉の意味を考えさせられたのです。

当時、クラスに授業中に指名をされても、なかなか発言できない友人がいました。その子がある日の授業で先生に指名されました。でもその子はいつも通り、意見を言い出せず、ずっとうつむいて黙っています。「自分や他の子たちは、はっきり発言できるのに、なぜこの子は普通にできないのかな。」その時私は心の中でそう思っていました。すると、周りの子たちが「普通に言えばいいんだよ。」「大丈夫。普通でいいよ。」と言い出しました。私はそれを聞いて、「『普通』って言っちゃだめなんだった！」とはっとしました。でも、同時に「普通」はみんな使っている言葉なのに、なぜ母はだめと言うのだろうという疑問は残ったままでした。

中学二年生の冬のある日、私の友達が、「人間って一人一人が絶滅危惧種みたいなもんだよね。」と言いました。その友達にとっては、何気ない一言だったかもしれませんが、私の心には大きく響きました。絶滅危惧種とは、絶滅の危機にある生物種のことです。私たち「ヒト」という生物は絶滅危惧種ではないけれど、一人一人の命には限りがあります。だから人間も個々として考えると絶滅危惧種と言えるのかもしれません。自分も友達も家族も一人一人に個性があって「普通」ではない、唯一無二のかけがえのない存在なのです。この世界にいる人の数だけ個性はあって、それらは全部尊重されるべきなのです。

国語辞典に記載されていた、「普通」の意味は間違いではないでしょう。でも、私は「普通」も個性と同じく人の数だけあると考えます。自分の中で「普通」という基準をつくっておくことは生きていく上で便利かもしれないけれど、それを誰かに押し付けるのはその人の個性を潰して、苦しめていることと同じだと思います。自分が当たり前だと思っていることが、一歩外に出ると当たり前ではないという意識をもって過ごすことが大切なのではないでしょうか。

最近メディアなどでよく目にする「多様性」という言葉。個性を尊重する上で、とても大切な考え方です。国籍、性別、障がいの有無、宗教や価値観の違い。人間と人間には共通点以上に相違点があると思います。でも、その相違点をも尊重し合える、そんな社会を私たちでつくっていきたいです。例えば、LGBTQ の人たちも結婚できたり、国籍に関係なく仕事を選べたり、文化や宗教などの違いを認め合えるような社会を思い描いています。私は、大多数の人の意見と自分の意見が異なっていて、自分の意見に自信をなくすことがよくあります。それでも、私たちの考え、価値観は尊重されているのです。私は自分の考えに自信を持って一生懸命生きていきたいです。それと同時に、周りの人の考えや意見も尊重したいです。そうすることで、誰もが生きやすい世界になることを願っています。

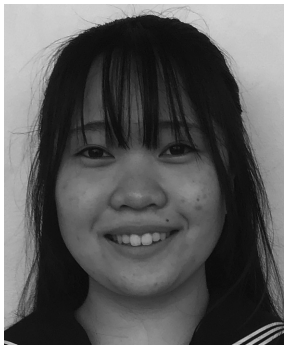
願いを実現する第一歩として、私は、「みんなが愛せる学校づくり」をテーマにし、一人一人が居心地のよい学校を目指して日々生徒会活動を行っています。生徒会の立会演説会では、みんなが愛せる学校をつくるために個性を尊重したいと話しました。学校という集団の中ではどうしても、多数派の意見が「普通」とされます。でも、その「普通」に捉われすぎて、学校生活を窮屈に思わないようにしたいという想いが私にはありました。

これらの経験を通して、いつも母に言われていた言葉の意味について自分なりの答えに辿りつきました。「普通や常識とは自分の知識や経験の範囲内の基準であって、それが全ての人に共通するわけではない。だから、自分のものさしだけで、物事を判断してほしくない。」という母の想いが込められているのだと。

「普通」を乗り越えて、一人一人を大切にする「多様性」へと繋がる未来を、今を生きる私たち自身の手で創っていきたいのです。誰もが愛せる世界になることを願って。

この主張をどんな人に届けたいですか？

この主張を、自分の意見や価値観が周りの人と異なることで、日々の生活に苦しみを感じている人たちに届けたいです。私自身も「普通」という言葉に無意識のうちに縛られることがあります。しかし、誰かとの相違点も個性です。その個性が尊重されることで、誰もが愛せる世界をきっとつくれると私は信じています。私の主張を通して、皆さんが「多様性」について考え、行動するきっかけになればと思います。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

不登校になってわかったこと

三重県　松阪市立殿町中学校　３年
村田　薫音

皆さんは「学校」と聞いて何を思い浮かべますか。「楽しい」「学生に戻りたい」「青春」このようなことを思い浮かべた人が多いのではないでしょうか。私も学校は楽しいところだと思っていました。今、私が「学校」と聞いて思い浮かべることは「怖い」です。楽しいところだと思っていたのに怖いところに変わったなんて聞いたら大半の人は混乱すると思います。学校が怖いと思うようになった理由は私がパニック障害になったからです。そして不登校気味になってしまいました。私の場合は精神疾患を患ったために学校が怖いと感じるようになりましたが、いじめなどの人間関係や心身の不調がきっかけで、学校が怖いと思うようになり、不登校になった学生が数多くいます。現代社会では不登校児童生徒が小学校では百人に一人、中学校では二十四人に一人、高校では七十一人に一人いるそうです。中学校における不登校児童の割合が多く、これは、クラスに一人は必ず不登校の生徒がいるような割合です。思い返してみると私の通っていた小学校でも一年生から六年生にかけて不登校の子が増えていました。また中学生になり、中学一年生、二年生ともにクラスには数人不登校の子がいました。また「潜在的不登校」というものもあるそうでこれは、隠れ不登校とも呼ばれているそうです。意味としては、「登校しても教室に入れない、教室でじっと我慢しているだけ」つまり、学校や友人関係への不安や葛藤を抱えながら登校している状態の事です。そして、隠れ不登校の子たちは推計で三十三万人もいて、十人に一人、不登校児童生徒の三倍以上です。

先述の通り不登校や隠れ不登校になる事にはさまざまな理由があります。主な原因は自信が持てずに人とうまく関われないことでネット社会に現実逃避したり、勉強に追いつけなかったり、身体の不調であったり更には、原因が自分でもわからないと本当にさまざまです。

ではこのようなことを抱えている子たちが一般的な学校生活を送れるようになるにはどうしたらいいでしょうか。私は一番は「周りの支え」だと思っています。私はとても環境に恵まれていると思います。辛い時は母や友達が話を聞いてくれて、困ったことがあった時先生方に相談したら親身に寄り添ってくれて、何とか学校に行けています。

また、私は学校と一番向き合っているのは「不登校の子」だと思います。これは、私がまだ毎日学校に行けていた時、何も考えずに朝起きて授業を受けることができていた時より、今の朝起きられず、授業も教室で受けられず、この先の進学や就職はどうなるんだろうと毎日のように不安に襲われ、考えているからです。不登校の子全員がこんなことを考えているとは言いませんが私と同じ気持ちの子もいるのではないでしょうか。

不登校の子にも人権があります。人権がある以上「義務教育」を受けなければいけません。そのため、全ての子供が教育を受けることのできる社会を実現させるため、私は、自分自身の経験を活かして、将来的には不登校の子達を支える活動に参加したいと考えています。

最後に伝えたいことがあります。まずは不登校ではない人へ。一つは「不登校は甘えではない」と言うこと。二つは「不登校の子を冷たい目で見て責めないで」と言うことです。自分とは違う人間を理解することは難しいことです。理解してとは言いません。ただただ見守っていてください。

次に不登校、隠れ不登校の子達へ、焦らずゆっくり問題を解決していきましょう。相談できる。信頼できる人はいますか。いるならば相談してみてほしいです。話すだけで少しは心が楽になると思います。いないならば、チャイルドラインなどを活用してみてください。私も利用したことがありますが、とても親身に話を聞いてくれました。「学校が怖いなら無理に行く必要はないよ」という言葉をかけてもらい少し心が楽になりました。学校は慣れることから始めましょう。焦らずに、一歩、一歩。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

私はパニック障害になったことをきっかけに学校に行きづらくなりました。そんなとき、作文を書くことになり、学校や将来に対する気持ち、学校に通いづらいという私の現状をこの作品を通して学校の先生方に知って欲しいと思い、作文を書き始めました。そうして書き進めるうちに、学校の先生方だけでなく、不登校の子、不登校ではない人、すべての人に私の気持ちを知ってほしいと思うようになりました。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

練習期間

滋賀県　草津市立老上中学校　３年
馬場迫　葵

ミュージシャンの甲本ヒロトさんがある相談のインタビューで〝学校に居場所がない子に言ってあげられることはありますか〟、という質問に対して答えた言葉があります。それは、「友達なんていなくて当たり前なんだから。たまたま同じ年に生まれた近所の子が同じ部屋に集められただけじゃん。」
という言葉です。私自身中学一年生になってまもない頃、新しい環境に慣れず、他のクラスメイトはもうすでに話の合う人を見つけていることに、不安と焦りを感じていました。そんな私にこの言葉は、今まであった足枷が一つ外れたように、頭の中も心も軽くしてくれました。学校は、偶然一緒に乗り合わせた電車の車両と同じなんだと、趣味が違うことも相性が合わないことも当たり前なんだ、と言っていた甲本さんの言葉は中学三年生になった今でも頭の片隅にそっと残っています。様々な人がいるんだなと分かっていても違いを理解できなかったり、合わないなと思って一緒に話したくないと思ってしまったりすることもあります。そして最近、この人は私のことが苦手なのかなと相手の口調や仕草で勝手に判断するようになりました。それは自分を守るという自己防衛でもありました。人の気持ちは他人には分からないけれど感じさせたり、感じたりしてしまうのだと思いました。自分が苦手だと思っている人と他の友達が楽しそうに笑って話しているのを見かけるとなんて自分は心が小さいのだと自己嫌悪に陥ることもありました。でも冒頭で紹介した甲本さんのことばに続きがあることを知ります。それが、
「電車に偶然一緒に乗っただけで友達じゃないけれど、平和に乗ってられなきゃダメじゃない。その訓練じゃないか学校は。友達でも仲良しでもない人たちと喧嘩しないで平穏に暮らす練習をするのが学校じゃないか。」
という言葉です。社会に出たら世代や価値観の違ういろんな人がもっともっとたくさんいて、そんな人たちと向き合っていかなければなりません。昔、小学六年で中学受験を考えていた頃、苦手だった男子生徒と同じ時間を毎日過ごすことが嫌で、女子校に行きたい、なんて安直な考えをしていた時期もありました。でも社会に出たら女性男性関係なく関わって生きていかなければなりません。学校は社会人になるための練習をする場所で、もしかすると数学や英語の勉強よりも学校で学んでいるのはそういったことなのかなとも思ったりもします。練習だって思ったら完璧にこなす必要もありません。それよりも相手のことをちょっと違うな、合わないな、と思っても向き合うことをやめてしまわないでその相手の話を聞き、知ろうとすることが甲本さんの伝えたい〝平穏に暮らす〟ことなんだと思います。これまで友達がいない、苦手な人との接し方がわからない、居場所がないことがつらかった私だけれど、居場所がないことを重く受けとらないでも大丈夫、ということを甲本さんから教わりました。少なからず〝学校に行く〟ことに意味があるのです。毎日同じ時間に登校し、同じ給食を食べ、同じ教室で勉強をしてるクラスメイトの素敵なところを見つけられるそんな心を大切にできる自分でありたいと思います。今この中学校生活は社会人になるための練習期間なのです。

この主張をどんな人に届けたいですか？
私はこの作文で、「学校生活は社会人になるための練習期間だ」ということを伝えました。新しい学年に上がるときに友だちができるか不安になったり、クラスメイトと意見がすれ違ってイライラしてしまったりすることがあります。その時に私はこの言葉をふっと思い出します。すると、前向きな気持ちになることがあります。この私の主張を学校生活に悩んでいる同世代のみんなに届けたいと思います。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

私が決める

京都府　亀岡市立南桑中学校　3 年
牧野　心春

みなさんは子宮頸がんワクチン、正式名称「HPV ワクチン」を知っていますか。子宮頸がんの原因となるウイルスの感染を予防するためのものです。小学校 6 年生から高校 1 年生の間に打つことが推奨されています。私は今、まさに中学 3 年生。打つか悩んでいます。なぜなら、このワクチンで重い副反応を負った方がいることを最近知ったからです。

ある日、私は母に勧められワクチンの副反応で苦しんでいる方の話を読みました。主な症状は、突然の失神や記憶障害など、日常生活に支障のあるものばかりでした。私はこれを読んで、健康を願い、このワクチンを打った方がなぜ苦しまなければならないのかと苦しくなりました。驚いた私は、後日ワクチンを打つ予定の友達に聞いてみました。すると、友達もこのような副反応が出た方がいることを知らなかったのです。

ワクチンを打った一部の方が重篤な副反応に悩まされている事実、この事実は、私の友人をはじめ、周囲の人々には浸透しきっていません。しかし調べたところ、このような重篤な副反応が出る確率は約 3 ～ 7%でした。ですが、もし自分が 3 ～ 7%のうちに入ったらと思うと不安でしかたがありません。実際、HPV ワクチンの接種率は、欧米などの外国では約 80%なのに対し、日本では約 14%と非常に少ないのが現実です。長期間効果が持続するワクチンを打たない理由は、私と同様リスクを恐れる気持ちからなのでしょうか。

そこで私は、子宮頸がん検診の受診率を調べてみました。すると、外国は 80%以上であるのに対し、日本は約 30%とこちらも非常に少ないです。改めて考えると子宮頸がんの検診はイメージがわきづらく、聞き馴染みもありません。しかし、子宮頸がんは早期発見ができれば子宮を温存した上での治療、さらに妊娠も可能です。早期発見率が高まることで救われる女性が多くいるのです。

では、どうすれば検診に行きやすくなるのでしょうか。一つは、金銭的な支援です。検診率の高い外国は、公的医療保険などで金銭的な負担を軽減したり、かかりつけ医が受診を勧めたりしています。このように日本でも「定期検診に行きたい」と思えるような工夫が必要だと思います。

しかし、最も大切なのは命のために、予防法をオープンにできる土壌をつくることだと思います。子宮頸がんは誰にでも起こりうる病気です。日本では、25 から 40 歳の女性のがんによる死亡理由の第 2 位は子宮頸がんによるもの、という調査結果もあります。そして、この HPV ワクチンで男性も予防できる病があります。それなのに、理解が進んでいないのは「子宮」が女性特有の部位であること、また恥じらいがあるからだと感じます。女性は知られたくない、男性は関係ない、またはよく分からない、このような状態では、理解も進みません。私は、命の方が恥じらいよりも大切だと思います。「いざ」というときでは遅いのです。私と友人のように、普段からワクチンについて話せる雰囲気作りが大切なのではないでしょうか。

みなさんには HPV ワクチンの副反応で苦しんでいる方々がいるという事実、検診に行く大切さを知っていただけたら嬉しいです。私は、自ら考え、知った上で、勇気を出してワクチンを打ってみようと思います。ただし、打ったからといって油断するのではなく、検診は定期的に受け、できるだけ早期発見に努めることを意識して生きようと思います。

私は打つ。しかし、打つ打たないは個人の自由です。ですが、ワクチンや検診という選択肢があることを忘れないでほしいのです。また、男性も関係のないことではないと知ってほしいです。

自分や、大切な人の身体に対して、命を最優先に考えられる人に私はなりたい。みなさんも HPV ワクチンや検診について知っていただけたのであれば、ぜひ身近な方と話をするところからはじめてみませんか。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私と同年代の女性はもちろん、選択を迫られている方や悩んでいる方など、この世の全ての方に届けたいです。私自身、この作文を書いている中で、他の選択肢を見つける大切さ、自分で決める大切さを改めて実感しました。だからこそ、今を生きる全ての方にも、これからの未来を担う方達にも伝えたいと思ったのです。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

「当たり前」を疑う

大阪府　泉大津市立小津中学校　3 年
森﨑　春奈子

「基本的人権の尊重」という言葉は、小学校の社会科の時間に学びました。「人が生まれながらにして持つ権利として、どんな人にも『自由』が保証されている。」

しかし、この自由が実際には制限されていないでしょうか。特に、私たちの学校生活において。「髪の色を変える自由」、「爪に色を塗る自由」、「学校で好きな色の服を着る自由」は、多くの生徒には許されていません。学生は学生らしく「当たり前」の学校生活を送る。それが「当たり前」、なのでしょうか。

小津中学校に入学し「ルールメイキング」に出会いました。ルールメイキングとは生徒自ら、自分たちで校則を変えようと、対話を重ね、一人でも多くの人が納得できるルールを生み出す活動です。私はそんな先輩たちに憧れてルールメイキングのメンバーとなりました。元々は、女子はセーラー服、男子は学ランと決められていた標準服。その標準服の見直しが行われていました。

LGBT の人や多様性に配慮し、男女関係なくスラックスやスカートを選べるように。また、オリジナルのブレザーは、生徒みんなでデザインしました。店長さんらとたくさん話をして、ユニクロの既製品も標準服に取り入れることにしました。誰もが納得できるような標準服をめざして。

制服見直しの過程で私が一番心に残ったのは「色についての対話」です。ユニクロ既製品のカラーを白や黒などの落ち着いた色に制限するか、どの色も自由に選べるようにするかで意見が対立しました。私はカラーを白黒に制限した方が良いと考えていました。

「学生は学生らしく白黒とかの落ちついた色で統一感を出さないと。そんなの当たり前じゃん」そう思っていたからです。

しかし、議論が進むにつれ一人ひとりの好みや多様性を大切にしよう、という意見が主流になり、最終的に「色は制限しない」ことになりました。

「こんなの間違ってる」対話が終わっても納得がいかず、心に残っていました。両親に相談しても、やはり納得することはできませんでした。みんな納得しているのに私だけ納得できていないのがすごく寂しくて、自分だけ取り残された感覚になっていました。そんな気持ちを残したまま、標準服が完成しました。

始業式当日、中には黄色・紫など派手な色の服を着ている人もいました。

「ほら、やっぱり。TPO を考えない人も出てきてしまうじゃん。」そんなことを思っていると、校長先生の話が聞こえてきました。

「学校で『当たり前ではない派手な色』の服を着ても大丈夫かなあと心配する人もいるかもしれません。でもね、実は色の世界には、この色が派手な色とか、この色はまじめで普通な色、などといった区別はありません。派手に見えるのもその人の主観なんです。『一人ひとりが好きな色』があるだけです。だから、好きな色を選んだらいいんです。この学校が君たちが選んだ色でカラフルになったらすっごく素敵ですよね。」

今までの私の『当たり前』が一気に覆った瞬間でした。本当は「当たり前」は一人ひとり違って、世の中の人の数だけ意味を持つ言葉なのかもしれません。

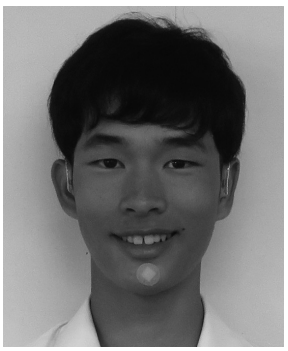
あなたにとって「当たり前」って、何ですか。私は、「当たり前」という言葉で、赤色の花に黒色のペンキを塗ろうとしていたのかもしれません。自分の価値観を絶対だと思って押し付けるのではなく、人それぞれの価値を認めることが大切だと気づいたのです。

私にとって「当たり前」という言葉は、一から考えることをやめてしまう言葉です。私にとって「当たり前」という言葉は、自分や誰かの可能性を狭めてしまう言葉です。

時には「当たり前」を疑うことも、大切なことだと私は思うのです。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

わたしは将来、学校の先生になりたいと思っています。私の主張は「当たり前を疑う」ことですが、「当たり前」という言葉をよく使っていたのは、学校の先生などの周りの大人たちだったように思います。わたしは、誰かが決めた「当たり前」ではなく、子どもたち一人一人にとっての「当たり前」を大切にできる先生になりたいと思っています。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

障害とは何ぞ

兵庫県　淡路市立東浦中学校　3年
津坂　盤

「障害」とは何ですか。

こう聞かれると、どんなことを思い浮かべますか。人によって答えは違うと思いますが、多くの人は「目が見えない」「足が不自由」などといったできないことが多い不便な印象があることだろうと思います。

ちなみに、僕は耳が聞こえないという「障害」を持っています。だから社会に出れば障がい者の一人であり、確かに他の人と比べて不利になることもあります。ただ、僕が一人の人間であることも事実です。それなのに、ただ障害があるだけで差別されてしまうという現実があります。僕も、障害を理由に差別されたことはあるし、これからも差別されることはあるだろうと思っています。当然、僕のみならず、他の「障害を持っている人」も同じことを思っているのではないでしょうか。これで本当にいいのでしょうか。

では、なぜこのように差別が起こるのでしょうか。前述のようなできない事が多いというのも一つの見方ですが、そこから「障害がある人は害悪だ、排除すべきだ」というような考えに至り、そうして差別になるのだと僕は考えます。あるいは、その「障害」を持っているから自分より弱いと勝手に思い込み、弱い者いじめとして差別をしているのかも知れません。ですが、もっと別の考え方があると思うのです。

僕にとって、「障害」の有無はどうでもよく、「障害」は「悪いもの」ではなく「一つの個性」であると思います。そう考えると、差別をするということは、その人の個性を否定するということだといえます。例を挙げましょう。例えば、あなたは野球が好きだとします。これは「野球が好き」という個性です。そこに誰かが「野球好きは異常だ」と言う。差別は、これと同じです。野球が好きな人に他人が「お前は異常だ」と言っていることが間違っていると思えるのなら、「障害」のある人に対しても同じように考えるべきです。

人には個性があります。ピアノ得意な人、サッカーが好きな人、色々な言語を話せる人、絵が上手い人…。それを言い出せばキリがない中に、耳が聞こえない、知的障害、足がないなどといった、身体の不自由もあるのです。ただそれだけなのです。それを否定することは、その人らしく生きる権利を侵害するということですから、差別は立派な人権問題であります。

さて、僕は耳が聞こえないと話しましたが、僕は二歳で耳が聞こえなくなってから、およそ十年ほど耳に装具を着けて生活してきました。そしてこれからも、一生これと付き合って生きていくことになります。僕にとって、耳が聞こえないことは身近なことであり、当たり前のような感覚で生きてきたので、この感覚が体に染み付いているのです。

そして気が付いたのです。周りの環境が整っているおかげで何不自由なく暮らしていたからかもしれませんが、自分は障害を持っていることを忘れて、自分の障害は自分の個性だという認識で生きてきたのだと。

これからも同じです。僕のような人もたくさんいます。「障害」も人間が持つ個性の一つです。尊厳です。だから、「障害」のあるなし関係なく、すべての人に幸せに暮らす権利があるのです。

だから、「障害」とは、身体に不自由があることで生活に支障が出て、それに対して支援が必要なことであり、一つの個性でもあるということです。

では、最後にもう一度聞きます。

「障害」とは何ですか。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私の主張を聞いてくださったすべての人です。多くの人にとって、「障害」という言葉は“よくないものである”という意味として使われています。この主張が「障害」を異なる視点から捉えるきっかけになればと思います。また、私と同じ「障害者」である方々が、ほんの少しでも心が軽くなったり、前向きな気持ちになってもらえると嬉しいです。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

竹やぶの中から・・・

奈良県　葛城市立新庄中学校　２年
髙橋　菜緒

竹やぶの中にあったのは、きれいな小川でも、鳥たちがすむ楽園でもありませんでした。

私がこの景色を見たのは、小学校の時の帰り道でした。自然が好きだったので、通学路にある川や水路をのぞいては、なにか生き物がいないか探していました。ある時、家の近くにある竹やぶの中をのぞいてみると・・・なんとゴミであふれていたのです。今まで通学路に落ちているゴミは見たことがあったけど、あまり気にしていませんでした。あまりのショックに、これはどうにかしなければならないと考えました。

その日から、ゴミを減らすにはどうしたらよいのか、何ができるのだろうか、ということを考えるようになりました。そこで気づいたのは、

「みんなのゴミに対する意識が低すぎる。」

ということでした。実際に、同学年の子がゴミを川に捨てているところを見ました。そのことがくやしくて、母に相談すると、

「そうやなあ。それは個人に注意するんじゃなくて、企業にうったえかけることをしないかぎりは直らないと思うなあ。」

と言われました。でも、それは大人になってからすることだなと思ったので、今できることをしようと考えました。その日から、母と私でゴミを拾う日々が始まりました。家の近くにあるゴミを、トングで拾っていくのです。そこで、いちばん多く捨てられているゴミはタバコのすいがらと、飲み物の缶でした。飲み物の缶には、まだ飲み残しが残っていることが多く、汚いなあと思いました。

この現実に国はなにか手を打たないのか！と思い、調べたこともありました。ゴミを捨てると罰金になる、という村の看板がありました。でも、実際にはゴミを捨てているところを誰かが見張っているわけでもないので、捨てているところで、

「罰金を払ってください。」

と言って罰を下すのはとても難しいことなのです。だから、ゴミを捨てない意識を高めることが大切です。

ゴミは風の力によって、川へ運ばれます。さらに川を下り、海へ出るころには、プラスチックゴミだと、マイクロプラスチックという、小さな小さな粒になります。そしてそれを、プランクトンが摂取すると、それを魚が食べ、さらに大きな魚が食べます。この現象は「海洋プラスチック問題」と呼ばれ、世界で注目されています。実際に、とあるセンターでジンベエザメが急に餌を食べなくなり、数日後に死亡してしまいました。そのあと、死因を解明するために解剖調査を行うと、胃の中から長さ 13 センチメートルのプラスチック製のくしが見つかりました。飲みこんでしまい、出血や胃を傷つける原因となっていたようです。このように、私たちが普段使うものが、生き物たちにとっては、脅威となることもあるのです。

この事例や、私が経験したことをふまえて考えたゴミ問題への対策は、

1. ゴミをなるべく減らし、一つのものを大切にすること。
2. プラスチックの利用回数を減らしていくこと。
3. マイボトルを持ち歩くこと。

です。特に 3 については前述したように、飲み残しの缶が減ることにつながります。マイボトルとは、水筒のことです。

私たちの快適な生活のいっぽうで、生き物たちが苦しんでいるかもしれない。プラスチックゴミ問題は、そっとわたしたちに警鐘を鳴らしているのかもしれません。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

私は、この作品の中でゴミを捨てない意識を高めることを訴えかけました。文中にもあるように、私は海の生き物に限らず、自然と生き物が大好きです。だから、少しでも生き物たちの助けになれるように、生き物たちがさらされている現状や、直面している問題などを訴え続けていきたいです。また、その問題に対して、何ができるのかについても考え続けたいです。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

みんなが知れば必ず変わる

和歌山県　高野町立高野山中学校　3年
足立　笑子

皆さんは香害問題を知っていますか？今、日本では一千万人の人が香害によって苦しんでいます。香害とは柔軟剤や香水、洗剤などに含まれている有害化学物質に接触することで、さまざまな健康被害や化学物質過敏症を発症する恐れがある深刻な香りの問題です。化学物質過敏症を発症すると家から出られなくなる人もいます。

私は小学五年生の春。コロナウイルスの消毒で化学物質過敏症を発症しました。学校に行こうと何回も挑戦してみましたが鼻血や喘息発作が出てしまうので学校には行けなくなってしまいました。一日中家の中で過ごし、外に出るのは喘息発作が出た時に行く救急病院だけ。それが私の生活となりました。そして、少し体が落ち着いた時に東京の病院で診てもらうと正式に化学物質過敏症と診断されたのです。学校に行けない、友達とも顔を合わせられない毎日は本当に辛かったです。

私は中学一年生の頃、化学物質が少ない大自然の中に引っ越すことに決めました。自然の中で暮らしていたら喘息もきっと治る。学校にもまた行ける。そう思っていました。しかし、引っ越しも終わり初めて新しい中学校の子達と会える日の朝。起きると息が吸いにくく歩くのさえも難しい体でした。ずっと楽しみにしていた日だったので行けなくなったことが辛くて辛くて涙が溢れ出てきました。そんなある日母から勧められ海外の子ども達へ食事を提供している作家さんのお話会に参加することになりました。正直私は乗り気ではありませんでした。しかし環境問題やファストファッションなど私の知らなかったことが沢山知れるお話で興味をもちました。お話会が終わった後、作家の方に勇気を出して、
「私、化学物質過敏症を発症して学校に行けなくなったんです。」
とこれまでのことを話しました。すると、
「そうなんだね。」
と優しくうなずいて聞いてくれました。私はそれが心地よく二ヶ月後またその方のお話会に参加してみました。すると二ヶ月前には無かった香害問題の話を取り入れてくれていたのです。この問題の事をたくさんの方に聞いてもらえている、知ってもらえている、そう思うととても嬉しい気持ちになりました。そして、これがきっかけで私もこの方のように優しく話を聞き、困っている人に寄り添い手を差し伸べられる大人になりたいと強く思うようになりました。

それから私は香害問題のことや自身のことをSNSで発信し始めました。すると想像以上に沢山の人がシェアしてくださりました。初めて香害を知ったという方にも見てもらえて本当に嬉しかったです。また、今度はより多くの方に自分の口で伝えたいという思いから周りの人に協力をしてもらいながら会場を借り、人を呼び、伝える場をつくりました。その中で気付いたことがあります。それは化学物質過敏症の私にしか伝えられないことがあるということ。耳を傾けてくれる人もたくさんいるということです。

香水が好きな人、柔軟剤の香りが好きな人は沢山いると思います。私も発症するまでは香玉や香ビーズなどが好きでした。香水を付けたい気持ちも分かります。しかし中には化学物質の香りを吸ってしまうと命に関わる病気を発症してしまう人もいるのです。化学物質過敏症は誰もがいつ、どこで発症してもおかしくない病気です。私は私と同じ思いをする人を減らしたい。香害問題で苦しんでいる人たちが過ごしやすい未来にしたい。私はこの病気を知ってもらう、理解してもらうだけで変わることもあると思います。協力してくれる人、手を差し伸べてくれる人もいるかもしれません。小さなことでも良い。まずは一歩を踏み出すことが大切なのです。

一人の百歩より百人の一歩。
どんな社会問題でも、一人では解決できません。だからこそ、これからも私は発信し続けたいと思います。そして、困っている人がいたら手を差し伸べ、その人の伝えたい事を応援したいです。私が困っていた時すぐに協力してくれた人のように。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

化学物質過敏症の人を減らしたいと思ったからです。香害問題はみんなが知れば必ず変わる、無くなる問題だと私は思っています。皆さんの気づくきっかけになれば良いなと思いこの作文を書きました。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

ボランティアを通して

鳥取県　米子市立後藤ヶ丘中学校　3年
三島　愛梨

あなたは、ボランティアと聞いて何を思い浮かべますか。世の中には、様々なボランティア活動があります。被災地ボランティアや学級にあるボランティア係など、意外と身近なところに多く存在しています。

これまで私は、ボランティアにマイナスのイメージを強く持っていました。なぜなら、アルバイトであれば働いた分給料をもらえるのに対し、ボランティアは、いくら働いても給料をもらえない、ただ大変なものだと思い込んでいたからです。

今年の7月14日、私は母と一緒に皆生トライアスロンのボランティアに参加しました。参加しようと思ったきっかけは、私の兄が大学でトライアスロン部に入部し、トライアスロンという言葉が身近になっていたからです。また、夏祭りのボランティア募集があり、友達に誘われ申し込んでいたことで、ボランティアにも関心を持ち始めていたからです。

私が住んでいる米子市にある皆生は、日本で初めてトライアスロンが行われた聖地として有名です。しかし、私は今まで一度もトライアスロンを見たことがありませんでした。また、ボランティアとして参加できることを知っていましたが、「自分とは違うすごい人」と他人事のように考えてばかりいました。

ある日、新聞でトライアスロンのボランティアを追加募集している、という記事を見かけました。参加したいと思う反面、一人で挑戦するのは不安という気持ちもありました。そこで、一緒に参加しないかと母を誘いました。すると、母はすぐに賛成してくれ、二人でボランティアの申し込みをしました。

そして、トライアスロン当日。ドキドキ、ワクワクしながら担当場所に向かうと、中学生や高校生もいて安心しました。最初は何をすれば良いのか分からず、走ってきた選手に拍手を送るだけでした。だんだん慣れてくると、選手がスムーズに給水できるように手を使いながら、

「給水所です。頑張ってください。」

「お疲れ様です。」

など、自然と大きな声が出ていました。たくさんの走っている選手から「ありがとう」の言葉をもらい、嬉しくなりました。中には、

「お疲れ様です。」

と私に返してくれる選手もいて、苦しい中でも心配りを忘れない姿に衝撃を受けました。選手は早朝からスタートし、スイム、バイクを終え、雨の中40キロあるランのうち半分を走ってきている状態です。圧倒的に辛くてしんどいのは私ではなく選手のほうなのに、ねぎらいの言葉を忘れておらず、さすが鉄人と思いました。

そのとき気が付きました。ボランティアはいくら働いてもお金はもらえない。しかし、たくさんの人から「ありがとう」の言葉や笑顔をもらえ、心が温かくなる素晴らしいものだということに。

役割を終えたときには足や腰が痛くなり疲れていました。しかし、同時に達成感もあり、充実した時間だったと思いました。

このことを通して、ボランティアは無料で相手も自分も温かい気持ちになれたり、新たなことに挑戦でき自信に繋がったりするものだと思いました。

私達は、毎日支え合いながら生きています。今回私がボランティアに参加できたのは、母がいたからです。支えられたほうだけでなく、支えたほうも良い気持ちになるためには、どのようなことが大切だと思いますか。私は、当たり前のようにしてもらっていることにもお礼を口に出して伝えることが大切だと思います。なぜなら、「ありがとう」はその場ですぐにできるお返しだからです。それから私は、会計の後や給食を入れてもらったときにお礼を言うようになりました。

最後に、私は皆生トライアスロンのボランティアに参加したことで、たくさんのことを学びました。これらは実際に体験しないと分かりません。もし、あなたがボランティアにマイナスのイメージを持っているならば、ぜひ一度挑戦してみて下さい。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

私は「ありがとう」と言われるのがとても嬉しいです。きっと、「ありがとう」と言われて嫌な気持ちになる人は少ないと思います。感謝の気持ちを持つことはもちろん大切なことです。しかし、そこで止まるのではなく、その気持ちを態度に表したり伝えたりすることでより相手も自分も温かい気持ちになると思います。これから先、まわりも自分も笑顔にできる人になりたいです。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

美知との遭遇

岡山県　倉敷市立南中学校　3 年
村木　実路

「外人は黙れ。」

僕が喋ろうとした時、そう言われたことがあります。僕はびっくりすると同時に、頭の中が真っ白になってしまって、何も言うことができませんでした。

でも、その時、実はこう思っていました。まず、「外人」という言葉は、よそ者という意味を含んでいるので、差別的な言い方だと。また、僕の父はイタリア人で、母は日本人であることから、僕はイタリア人と日本人の両方であり、イタリアと日本では僕は外国人ではありません。

ここで、僕のルーツである、父と母について話そうと思います。2 人は国際ワークキャンプで知り合いました。両親が参加したキャンプでは、様々な国の人が共同生活をしながら、ボランティアをして過ごしたそうです。そのようなことに興味があった父と母の影響で、僕は物心がつく前からいろいろな国に連れ回されていました。両親にとっては、旅には経験を買いに行っているので、知り合いの家や安宿に泊まったり、屋台でご飯を済ませたりで、小さい頃は、めんどくさい、疲れたという感情もあったように思いますが、今となっては、僕の人格を形成する重要な基盤となっています。

旅の中で、僕がガツンと感じた経験を 2 つ話そうと思います。1 つ目は、イタリアでのことです。僕がまだ幼稚園の頃ですが、イタリアの市場の限られた場所でさえ、いろいろな肌色の人々、いろいろな言語を話す人々を目にした僕は自然に、

「場所が違うと、人は違うね。」

と母に言っていたそうです。僕が肌で人種の多様性を知った、初めての経験だったと思います。

2 つ目は、新型コロナウイルス流行前の年末に行った、フィリピンでのことです。町の至る所でストリートチルドレンを見かけたことは、今でも脳裏に焼き付いて忘れることができません。僕達家族が乗った車が赤信号で止まるたびに、通りにいた小さな子どもたちが花などを売ろうと、複数の車線がある大きな交差点でも、車の横まで来て、花を窓ガラスの辺りに掲げていました。1 人や 2 人ではなくです。僕は、かたまっていました。ストリートチルドレンが至る所にいる国や都市もあれば、そうでない所もあります。この世界の残酷さの片影を知ると同時に、経済の著しい格差の多様性を知って、未だに、何か物を買うたびに、心に引っかかるものがあります。

世界は多様性で成り立っています。考え方でも、自分が「常識だ」と思っていることでさえ、ただの「偏見」な可能性があります。そして、このことをあまり知らずに自分の中の「常識」で価値を決めることで、知らず知らずのうちに、相手を深く傷つけていることもあります。

僕に

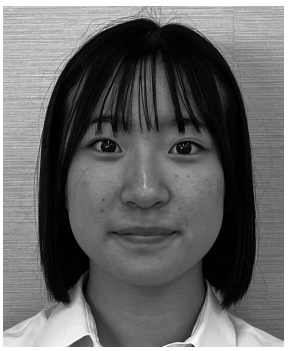
「外人は黙れ。」

と言った人が、どのような気持ちで言ったかは、その人にしか分からないことです。しかし、このようなことは、世界が多様であることを知り、安易にゼロか 100 かで分類しない心の備えがあれば起こらないことです。好むと好まざるとにかかわらず、世の中は元々多様なんだと知れば、お互いのことを尊重することができます。お互いのことを知って、尊重することができれば、心地良い社会になるのは必然だと思います。

万葉集では、道路の道のことを美しく知ると書いて美知と読んでいます。知ろうと多く道を進めば、多様と出会うことができ、それは、美しく知ることなんだと思います。自分の中の「常識」で価値を決める前に、世界は多様性で成り立っているということを知ろうとしてみてはいかがでしょうか。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

中学 2 年生のときの体育の時間に自分の意見を言おうとしたら、あの言葉を言われた。多分その人は悪気があって言ったわけではないと思うけど、あの言葉を言われて僕が良い思いをしなかったのも事実。その人の世界ではそれは特に悪いことではない。しかし、もう少し世界を広めたら、それは侮辱になる。自分の世界を広めるためにも、「知ろうとする」ということは大事であることを知ってもらいたいと思ったのがこの作品を書いたきっかけです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

1 ピースから広がる未来

広島県　呉市立仁方中学校　3 年
大段　りあ

なんでそんなひどいことをするん？

そこには病気で、ケガで苦しんどる子どもがおるんよ。これ以上ひどいこと、止めて !!

病院までが爆撃されてしまっている。毎日報道されるニュース。こんな悲惨な町に人が生活しているんだ。死んでいく人の数は増え続けて、どんどん町が壊されていく。

ウクライナの現状が、紛争というものの酷さが全世界に伝えられている。

ちょうどそのころ、帰省していた医大生の従姉に会い、なぜ医者になろうとしたのかという話を聞きました。

「私はね、紛争で困っとる子どもを救いたいんよ。そのために医者になりたいんよ。」

中学生の時、たまたま見たドキュメンタリー番組で、罪のない子どもたちが苦しんでいる姿を見たのだそうです。この子たちを救いたい！度々ニュースで流れる紛争。そのニュースを見るたび、医者になりたいという思いは強くなったのだそうです。

その話を聞いて、中学生の時の思いが、ずっと薄れず目標に向かっていく姿に、私は感銘を受けました。そして、人生をかけて、人の命を救いたいという思いに、憧れを抱きました。

私も人のために行動したい。

その思いを実現させてくれたのは、学校で配られたボランティア募集のプリントでした。たくさんの活動内容の中から、私が選んだのは「ネパールの子供たちに絵本を贈る」というものでした。

まず、青年海外協力隊の方にネパールという国について聞きました。ネパールでは、1996 年から 11 年も紛争が続いたそうです。でも、紛争が終わって 18 年経った今でも貧しい暮らしが続いている人が約 20%もいるそうです。水は水道からは出てこず、何キロも歩いて汲みにいくのだそうです。水を汲むための道具とそこに入った水を想像すると、子どもの肩にどんな重さがかかってくるのか想像できます。

私たちの生活では、水が欲しければ、蛇口をひねることで簡単に好きなだけ出てきます。子どもが水を汲みに行くなんて、何年昔のことでしょう。だから、ネパールでは絵本も高価なもので、なかなか買えないのだそうです。紛争が終われば人々は幸せになる、そういった考えがいかに浅はかなものか思い知らされました。

ウクライナの紛争が終わったとしても、復興は難しく、長い時間がかかるのだろうなあ癒えることのない身体の傷や心の傷を負ったまま、一歩踏み出すことさえ難しいんだろうなあ。紛争という言葉の裏に隠された重く、暗い現実が私の心にずっしりとのしかかってきました。

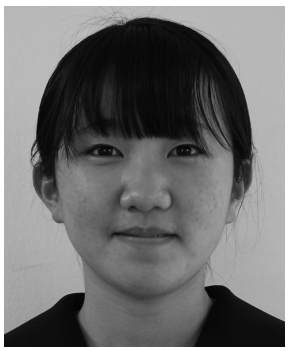
話を聞いた後、日本の絵本が配られ、ネパール語に翻訳されたシールを貼っていきました。作業はとても簡単なものでしたが、この本が子どもたちのもとに届き、笑顔で読んでくれたらいいなあ、ほんのひとときでも、安心して楽しい時間を過ごしてくれたらいいなあ、そんな想像が私の心に広がりました。

ウクライナの侵攻から 2 年、人々の心から関心が薄れていく中、現実から目を背けず、自分ができる小さなことを探していきたいです。

「世界を変えるための一歩は私たちにもできる。そしてその一歩が誰かの幸せの 1 ピースになるといいな。」と思っています。

この主張をどんな人に届けたいですか？

近年、ウクライナやガザ地区などで紛争が起こっています。日本は、非核三原則や憲法第 9 条などにより、武力的な面ではとても平和と言えるでしょう。しかし、日本も戦争を行っていました。復興するのはとても難しかったと思います。今平和な私達は、一人一人が小さな事でもいいから支援（ボランティア）が必要だと思います。だからこの主張は、私の作文を聞いたり読んだりしてくれた全ての人に届いてほしいと願っています。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

温かいまなざしのある社会

徳島県　阿波市立阿波中学校　３年
山下　智歌

私は、小さい頃から何かに失敗したり、できなかったりすることがあると、家族に「どうせ・・。」や「ほなって・・。」とネガティブな発言をしたり、不機嫌な表情や態度をとったりしていました。また、話し下手で、中学校に入学してからも友達と話をしているとき、相手にうまく伝わっているのかと不安になることがあり、そのことについて悩むことも多くありました。

もやもやとした日々を過ごすなかで、ある日、母方の祖父母を訪ねたときに、祖父が重い病気であることを知りました。祖父の口からは、会う度に「もう長くないけん。あともう少ししか生きられんわ。」という言葉が漏れてきます。死ぬことへの不安と、もっと生きたいという気持ちが入り交じったその言葉を聞くと、私は悲しくて仕方がありません。少しでも長く生きてほしいという思いが積もるばかりです。それだけでなく、ネガティブな言葉や態度をとる祖父の気持ちは、私と同じでよく分かるはずなのに、気弱になっている祖父に対してどう声かけをしたら良いのか分からず、素っ気ない態度をとる自分が情けなく、歯がゆい気持ちでいっぱいになりました。

そんなとき、ニュースで見たスローレジという取り組みが私の考えを変えるきっかけとなりました。たくさんのレジが並ぶ中で、このスローレジでは、主に高齢者の方や体の不自由な方が、自分の後ろで順番を待つ人を気にせず、自分のペースで安心して買い物の会計ができるのです。近年、自分で会計ができ、時間短縮が図れるということで、多くのスーパーやコンビニでセルフレジが導入されています。このスローレジを導入したスーパーでは、お客さんのペースに合わせてゆっくりと会計ができることが魅力で、高齢者の方や子ども連れの方に人気を集めています。

スローレジが導入された理由の一つには、高齢者の方の成功体験を大事にすることが挙げられています。周りの人がすべてを手伝わず、高齢者の方が、自分でできることが、自信や喜びになるからです。このような取り組みによって、自信を取り戻し、家にこもりがちだった高齢者の方が、進んで外出をしようと前向きな気持ちを高めることができたそうです。タイムパフォーマンスという言葉もあるように、現在の社会では、効率を優先し、時短になることが良いとされる風潮があるなか、スローレジのような、一人ひとりに寄り添った時間を大切にする取り組みがあることを知りました。

また、このスローレジのニュースの映像のなかでも、レジを担当する店員の方とレジを利用する高齢者の方とのやりとりやその表情に目が釘付けになりました。レジを担当する人の温かいまなざしのもとで、自分の力で代金を支払おうとする利用者の姿はとても生き生きとしていました。

この雰囲気には、ニュースを見ているだけでその場にいない私までも安心感を得られ、胸が熱くなる思いがしました。それとともに、私が祖父母に温かいまなざしを向けることは、うまく言葉にできなくても、気持ちや気遣いが伝わり、心が通い合った安心感のある雰囲気がつくり出せるのではないかと考えました。そして、「智歌が訪ねてきてくれると元気になるわ。」と、うれしそうな顔を見せてくれる祖父母の優しいまなざしを思い出し、これからは、明るい表情や優しい態度で祖父母に接し、温かくて元気がでてくるような雰囲気をつくることを心がけようと考えました。そんな考えが自分にもてたとき、自分の中で少し自信がわいてくることに気づきました。

私は、スローレジを担当していた人のような温かいまなざしは、現代社会における様々な問題やいじめ、非行を未然に防ぐ効果もあるのではないかと考えます。温かいまなざしや雰囲気は、互いを尊重することにつながり、一人ひとりが自分らしく自信をもって生きられる原動力になると確信します。私は、社会の一員として、私自身が誰かに温かいまなざしを向けることができる人になっていこうと思いを強くしました。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

私は、一人ひとりが持つペースを大切にしていきたい。何事も効率よく速く行うことを良しとするのでなく、自分のペースでできる環境は自分らしく生きる原動力となり、他の人と協調する気持ちも高まると考えるからだ。相手を尊重し、温かいまなざしを向けることで自然と相手の気持ちを理解しやすくなり、誤解やトラブルも減るだろう。誰もが自分らしく過ごせる社会を作るために、互いの違いを受け入れ温かい関係を築けるようにしていきたい。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

挑戦した先に見えてくる明るい未来

香川県　高松市立国分寺中学校　3 年
鈴木　駿

僕は字を書くときに手が震えたり、緊張すると自然と体が震えたりしてしまうことがあります。これは生まれつきのもので、自分ではどうすることもできません。

今回この弁論大会の話を聞いた時にも、最初は人前で発表したり、作文を手書きで書いたりするのは難しいと思い諦めていました。しかし、そんなときに、パソコンを使用して打ち込みによる作文での提出でもよいと聞いたのです。それなら自分にもできるのではないか、また自分が苦労していることを知ってもらいたいと思い挑戦を決意しました。僕は学校の定期テストでも、すべての教科において、解答用紙を A3 に拡大コピーしてもらっています。普通のサイズでは、僕にとっては解答欄が狭く小さいので、とても書きづらいのです。拡大してもらえるおかげで、テストで不便に感じることなく、自分の実力を発揮することができます。しかし、そのことが原因で悲しい思いをしたこともあります。一人だけ別の解答用紙が配布されたときに周りの友達から、

「なんで一人だけ解答用紙が違うの？もしかして、いつもテストの点数が高い理由は、それに答えが書かれているからではないの？」

と言われたのです。僕は、普段からテストに向けて一生懸命勉強をしているので、今までは、自分の納得のいく点数を取ってきました。解答用紙を拡大してもらうことで、ただ自分のできない部分を補っているだけなのに、それが原因で、日々の努力を否定されたような気がして、とても苦しくなりました。少しは何か言われるかもしれないと思っていたけれど、想像していたよりもはるかに大きい悔しさが、自分に降りかかってきました。皆さんも視力が悪くなれば、眼鏡を掛けることがあるだろうし、足を怪我したら、車いすを使うこともありますよね。それを見て、「お前だけずるい」などと言うでしょうか。僕だってそれと一緒なんです。しかし、僕の場合は、目に見える部分が少なくて分かりづらいうえに、同じような症状の人も少ないので、うまく理解してもらえません。よくわからないことに対しては、みんな自分のものさしで判断しようとします。僕はそのような偏見から、「どうせできないでしょ」と言われ、悲しくなることもありました。しかし、それでは前に進めません。自分にできることは、周りの友達に、自分のこのような症状や苦労を正しく理解してもらえるようにすることだと思いました。そこで僕は、中学三年生で新しいクラスになったとき、自己紹介で少し自分のことをしゃべってみようと思いました。どう思われるのか、どんな反応が返ってくるのか不安でしたが、みんな真剣に聞いてくれました。その結果、僕のことを少しは分かってもらうことができ、以前のようなことを言われることはなくなりました。みんなは知らないだけで、しっかり話せばわかってくれると実感できた日でした。他にも、珠算検定を受験した際に時間を延ばしてもらうなど、学校だけでなく社会の中でも配慮していただけると知りました。

今、世の中には、挑戦したくても、自分には無理だとあきらめてしまう人がたくさんいると思います。僕にはその気持ちが痛いほどよく分かります。だからこそ、まずは自分が相手に寄り添う気持ちを大切にしたいです。自分一人だと我慢してしまうことも、なかまがいると知ることで、自分らしく頑張れるのではないでしょうか。僕はその「なかま」として、一緒に行動できる人になりたいです。そして僕自身も、この先に誰もが自分のやりたいことができる明るい未来があると信じてこれからもたくさんのことに挑戦し続けます。

この主張をどんな人に届けたいですか？

自分と同じような境遇に置かれている、一見すると何もないように見えるようだけど様々な苦痛があり、やりたいことがあっても思うように挑戦することはできなかったり周りに認めてもらえなかったりして、苦しんでいる人たちには、この主張を通してすこしでも、自分でもしっかりと説明すれば理解してもらえるかもしれないと伝えたい。また、挑戦すれば必ず明るい未来が見えてくるという希望を届けたい。全員が自分の周りにそのような境遇に置かれている人がいるかもしれないということを少しでも理解してもらえるようにしたい。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

未来の自分へ

愛媛県　愛媛県立松山盲学校　２年
正岡　匠

過去は変えられないけど未来は変えられる。このメッセージを一年前の自分に伝えたい。地元の中学校では、人間関係がうまくいかなかった。親しい友達もいたけれど、夏休みを境に学校に行けなくなった。明確な理由はあるけれど、ここで言えるほど、まだ自分の中で過去のことにはなっていない。

行けなくなった僕に父は、始めは、厳しく「行きなさい。」と注意した。

そんな父に申し訳ないと思いながらも、僕はずっと寝て過ごし、学校に行っていないことを父にばれないようにひっそりと生活していた。

そんな僕を見て、母が理由を聞いてくれたので、僕は、クラスメイトとうまくいかないことを伝えた。

僕の気持ちを大切に考えてくれた母が、小学６年生から教育相談に通っていた松山盲学校への転校を勧めてくれた。「このまま地元の中学校に通い続けることは、人生が終わっちゃうな。」と思っていたから、転校することはうれしかった。教育相談に来始めたころは、松山盲学校に通うことになったら、家族と離れて、寄宿舎で生活するので大変そうだなと思っていたけれど、人生が終わるほどの大変さはないだろうと、あっさり覚悟が決まった。

そして、ぼくは令和５年10月に松山盲学校に来た。来てよかったことは、授業が一対一で行われるところだ。地元の小学校と中学校では、一クラス30人ぐらいの教室で、分からなくても先生に話し掛けられなくて、内容が分からないまま進んでしまうから困っていた。特に数学の負の数が分かりづらくて、中学校の最初のところでつまずいてしまった。「あー詰んでしまった」と思った。でも、盲学校に来て数学の先生が１年生の最初から教えてくれたので詰まなくて済んだ。

勉強は、嫌いじゃない。

苦手な数学も、お金の計算につながるし、本を読むことは自分の知らなかった世界を知るきっかけになることも、今までの経験で分かっている。勉強をすることは将来の自分の可能性を広げるということも、十分に知っている。だから、今の僕は、勉強を一生懸命したいという気持ちが強い。毎日学校に通えなかった経験があるから、勉強ができる毎日がうれしいし、分からないことをすぐに聞ける環境がありがたい。

松山盲学校に来る前に一番心配だった寄宿舎での生活は思ったほど大変ではなかった。
家族と離れて暮らすようになって、最初は困ることはあったけど今では、全然大丈夫。むしろ家族のことが心配だ。けがをしてないか、ご飯を食べているか、さみしくないか、週末会えるのを待ち遠しく思っている。

僕は、松山盲学校に来て、半年で目標を二つ達成した。

一つ目は友達を作ること。

松山盲学校で出会った石丸君と薬師寺さんは、僕をとてもやさしく迎え入れてくれた。昨年、中学部の３人で行った３月の校外学習は、きっと、僕の中学校生活での一番の思い出になるに違いない。

二つめは、コミュニケーション力を身に付けること。

基本的に恥ずかしがり屋の僕だが、少人数の学校では、目立たずにいることが難しい。先輩２人が卒業したら、とたんに、中学部の代表になってしまった。体育がある日は、職員室に行って体育連絡を聞かなければいけないし、授業で指名されない日なんてない。

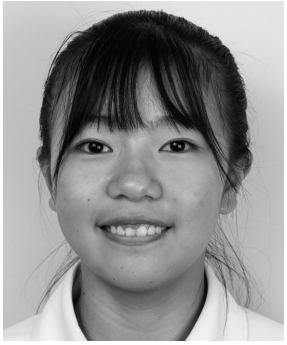
少年の主張大会に出場だなんて、前の学校にいたころの自分が聞いたらどんな顔をするだろうか。

盲学校に来て、僕はきっと変わった。明るくなったし、よく笑うようになった。前向きにもなったし、学校にも毎日通っている。

僕の将来は、きっと明るいに違いない！と言えるほどの自信はないが、最後に、過去は変えられないけど未来は変えられる。このメッセージを今の自分に送りたい。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

過去は変えられないけど、未来は変えられるということを、僕は、松山盲学校で学びました。将来、目が見えにくくなるかもしれないという不安はいつも隣にあるけれど、勉強すること、コミュニケーション力を磨くことをし続けることで、未来はいい方向に変えられると信じています。今まで出会った人やこれから出会う人たちと、楽しいことはもちろん、困難も共有し、分かち合える仲間になりたい。そんな仲間を大事にできる大人になりたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

誰もが教育を受けられる日を目指して

高知県　中土佐町立大野見中学校　１年
下元　里桜

皆さんは、7 月 12 日が何の日か知っていますか。それは「マララ・デー」です。マララ・ユスフザイさんが、女子教育の必要性と平和について、国際連合で演説をした日なのです。

私がマララさんについて知ったのは、ある本がきっかけです。それは「ぼくたちはなぜ、学校へ行くのか。」という本です。私は不思議に思い、読んでみました。

マララさんは、パキスタン北西部のスワト地区で生まれました。11 歳の時、イスラム教過激派のタリバーンがスワト地区を支配しました。タリバーンは、イスラム教の古くからの教えを厳しく守るという理由から、女子が学校に通うことを禁止していました。マララさんは、この考え方はおかしいと感じ、ブログで教育を受ける権利について訴え続けました。命の危険があるにもかかわらず、勇気ある行動をし続けたのです。タリバーンは、イスラム教の教えに反すると非難し、マララさんを銃で襲ったのです。彼女はすぐに病院に運ばれ、奇跡的に命を取り留めました。おかしいことをおかしい、間違っていると言っただけで、こんな目に合っていいのでしょうか。こんなにも怖い思いをしてもなお、活動を続けるマララさん。マララさんは、世界中の人々に強く訴えたのです。そして、人々の意識を変えたのです。

2013 年 7 月 12 日、16 歳の誕生日にマララさんは国際連合へ招待され、女子教育と平和について演説をしました。マララさんは訴えました。「一人の子供、一人の教師、一本のペン、そして一冊の本、それで世界を変えることが出来ます。」

この言葉を聞いて、皆さんはどのように考えますか。私は、教育こそが世界を変え、平和をもたらしてくれると思います。ある地域では本を読むことを禁止しています。しかし、もしペンや本を手に取ることができたり、先生が近くにいてくれたりすれば、知識を得ることができます。それが、一歩踏み出して前進するきっかけになると思います。この演説は、世界中の人々に語りかけられ、たくさんの人々に勇気と希望を与えたのです。

こうした活動から、マララさんは史上最年少で、ノーベル平和賞を受賞したのです。マララさんは「私がいただくこのノーベル平和賞ですが、ノーベル賞委員会が私にだけくれるわけではないはずです。この賞は、声なき声の持ち主であるすべての子どもたちのためにあります。」と言いました。この言葉は、勉強したいという思いを諦めないでほしいという、すべての子どもたちへのメッセージではないでしょうか。

私は、誰もが教育を受けられる世界になるように出来ることがあると思います。それは今、教育を受けられない子どもたちがいる現状を、周りの人に知ってもらうことです。本を読まなければ、私もこの事について考えることはなかったでしょう。「一人の子供、一人の教師、一本のペン、そして一冊の本、それで世界を変えることが出来ます。」この言葉に私は心を動かされ、改めて教育を受ける大切さについて考えさせられたのです。

耳に残る言葉、心に残る言葉、記憶に残る言葉は、人に大きな影響を与えます。つまり、私も、影響を与えることの出来る言葉を発することが出来れば、誰かの意識を変えられるということです。今、私が伝えているこの言葉も、誰かの耳、心、記憶に残り、影響を与えているのかもしれません。このように、次の人、また次の人へと教育を受ける大切さが伝わっていけば、いつか誰もが教育を受ける権利を認められる日が、やって来るはずです。

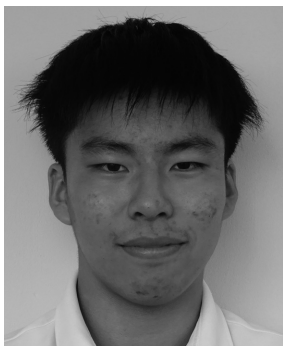
マララさんのように、世界中の人々の意識を変えることはとても難しいことですが、身近にいる人に世界の現状を知ってもらう、それは私にも出来ることです。

私には、将来医師になりたいという夢があります。自分の夢に向かって、これからもたくさんの勉強をしていきたいと思います。教育を受けられるということに感謝し、今、自分に出来ることを精一杯するということが、誰もが教育を受けられる世界になるための第一歩だと思っています。

世界中のすべての子どもたちが、先生や友達と一緒にたくさんの事について学んだり、自分の興味のあることを調べたりできる日常が、一日でも早くやってくることを願っています。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

私がこの作品を書いたきっかけは、「ぼくたちはなせ、学校へ行くのか。」という本に出会ったからです。この題名を見て、確かになぜ学校へ行くのだろうと興味を持ち、本を読んでいく中で、マララさんについて知りました。そして私達が教育を受けられるということは、当たり前ではないということに気付かされました。教育を受けることで、物事を深く考え、自分の思いを伝え広げることができると考えました。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

災害で繋がる平和の輪

福岡県　久留米市立明星中学校　3 年

南波　雅人

皆さんは、世界平和が実現すると思いますか？私は、残念だけど、難しいだろうと思っていました。しかし、今はそうは思いません。それはなぜか。見つけたのです。希望の光を！それは、災害の後に起きること、支援とボランティアに隠されていました。それは、私たち人間のあたたかさです。そう思った根拠となる事例を二つ紹介します。

一つ目は、田主丸でのボランティア活動です。私たちが住む、福岡県久留米市の東部に属する田主丸町。ここでは2023 年、7 月 9 日、10 日にかけての集中豪雨により大規模な土砂崩れが発生し、大きな被害を受けました。私はその十日後、7 月 22 日にボランティアに参加しました。今回は私と、父、熊本県から応援に来て下さった六名の方々でチームを組み、とある家の床下のがれき、土砂の撤去と土砂で汚れに汚れた床のそうじ、窓のそうじをさせていただきました。七月の炎天下、みんな泥だらけ、汗だくになりながらも、何度ふいても、こすっても、全く泥が落ちない床と格闘しました。お昼休憩のときです。熊本県からボランティアに参加した方々に父が、「今日はなぜ久留米までボランティアをしに来てくださったのですか？」と尋ねました。私は父の横でその会話を聞いていたのですが、熊本県の方の質問の答えを昨日のことのように覚えているのです。「私たちは熊本地震の時に久留米の人たちにたくさん助けてもらったけん、恩返しばせんば！と思って来たんですよ」

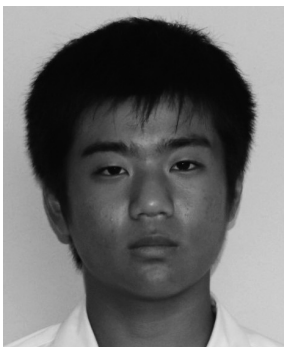
私はこの瞬間、熊本の方々に対する深い敬意と、大きな感謝の気持ちが、心の底からあふれてきました。きっとそれぞれの抱えるお仕事があるはずです。休日くらいゆっくりしたいはずです。それなのに、今、困っている人がいる。自分達が困っているとき、彼らには助けてもらったから。そんな気持ちで立ち上がる心はとても清く、美しく、大切にするべきものだと私は思ったのです。このボランティアは私自身の成長を後押ししてくれました。

二つ目は、国境を越えた支援の輪です。皆さんは日本と中国が仲が良い国どうしだと思いますか？残念ながら報道を見るかぎり仲が良い、という関係ではなさそうですよね。しかし 2008 年に中国で起きた四川大地震の際、一度は中国政府に応援を断られた日本の救援隊は断られた後も、いつでも中国へと向かえるように準備をしていました。実際に中国から応援要請が届くと即座に中国へと飛び立ち、真っ先に救援活動、支援をしたのは紛れもなく日本だったのです。その後、2011 年、東日本大震災ではガソリンやテントなど、大量の救援物資をもった支援隊が中国から日本へ駆け付けた。とインターネット上の情報で私は初めて知りました。この事実を知って私は、「そうやって助け合うことができるのなら、災害時だけでなく普段から仲良く、お互いを尊重し、助け合えばいいのに。」と残念に思ったのです。

このような二つの事例より、人は本来みな優しく、他人や他国を思いやることができると分かりました。私はその他人を思いやる心、優しさはこの世へさす、平和への一筋の光となると信じています。この優しさが、優しさの輪が、災害時だけでなく、普段から全世界で当たり前になることによって、世界平和は実現し、戦争によって失われる尊い命は 0 になるはずです。そんな、平和への道、そのスタートダッシュとして、自分達にできることをする必要があるのではないでしょうか。例えば、今年の元旦に起きた能登半島地震、その復興を願い、募金をすること。今、どんな状況なのか、ニュースなどを使って調べ、「知る」こと。それらを自分で考えて行動する必要が、未来の日本を、世界を担う私たちにはあります。ぜひ、これからは、石川県産など、被災地の商品を買って支援すること。困っている人がいたら、自分にできる範囲で助けてあげること。それらを、私たちみんなで、実行していきましょう！

この主張をどんな人に届けたいですか？

私はこの主張を災害に遭った方やボランティアをしたことがない人、ボランティアをしてみようかなと思っている人に届けたいです。私がこの主張をすることで、ボランティアに興味を持ってくれる人が少しでも増えてくれれば、ボランティアに参加する人が少しでも増えてくれれば、次に災害が起きた時、その恩が次のボランティア、助け合いを生みます。その恩が人々の助け合いの輪として一つになることによって、人類が望んできた世界平和へと着実に進んでいくと思います。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

西九州新幹線開業から思ったこと

佐賀県　鹿島市立西部中学校　２年
藤井　麗煌

2022 年 9 月 23 日佐賀県武雄温泉駅から長崎県長崎駅まで走る、西九州新幹線が開業しました。私は子供の頃から電車が好きなので、この日、武雄温泉駅へ行き、「自分の住む県に二つも新幹線が走るとは」と感動していました。しかし、家に帰って一つの疑問が生まれました。「どうしてこの新幹線は長崎駅と武雄温泉駅を結ぶものなのだろうか」と。「福岡県の博多駅まで繋げれば利便性が高くなり需要はもっと出てくるのではないだろうか」と疑問に思いました。

調べてみると、西九州新幹線は整備新幹線という種類に分類され整備新幹線は沿線の県の許可がないと作ることはできないこと、そして、国・長崎県・鉄道会社と佐賀県の意見が対立していて、佐賀県は新幹線を通すことに反対していることがわかりました。

国・長崎県・鉄道会社の意見は、新幹線で長崎駅と博多駅を直通させて、速達性を高めて、利用者や観光客を増やしたいということだそうです。それに対して、佐賀県側の反対意見としては、財政負担や在来線の本数が減ることによる利便性低下などがあるそうです。

私はここで、どうすればこの問題を解決することができるのか、考えました。考えていると、ある一つのことに気づきました「佐賀県と国・長崎県・鉄道会社それぞれが完璧に満足ができるような結果になる事はない」ということです。

この新幹線が通ることによって起こる意見の対立はこれだけではありません。佐賀県内の地域同士でも意見の対立は起こります。私は佐賀県鹿島市という、もともと特急電車が走っていて新幹線は通らない市に住んでいるのですが、新幹線が通ると「鹿島市にくる特急電車の本数が少なくなり、不便になって嫌だ」という意見をもっていました。おそらくこれは、鹿島市民のほとんどが思うことだと思います。しかし、新幹線が通る地域、特にもともと電車自体走っていなかった地域の人は「便利になって嬉しい」という意見をもったと思います。ここでも、新幹線が通ってほしいという意見と、新幹線は通ってほしくないという意見の対立があり、この解決策を考えてみると「双方が完璧に満足できる結果になることはない」という結論にたどり着きました。

このような問題は日常生活でも度々あることだと思います。ある人は「こうしてほしい」と言っても、他のある人は「それは嫌だ」と思うことがあるように、意見の対立というものは必ずあります。このとき、双方が満足する結果というものはほとんどありません。たいていの場合、どちらとも何らかの条件を飲んで結果というものは成立しています。このとき何が大切になるのか、それを私は「相手に意見を言う際自分がなにか負担することを前提とする」ということだと思います。学校生活を送る上で、相手の意見を完全に呑んで、自分の意見を全く言わないような人を見ることがあります。逆に相手のことをなにも考えずに、自分の意見だけを相手に言うような人を見ることもあります。しかし、それでは、問題について真剣に考えない人だと思われたり、相手にされなくなったりして、問題を解決することはできないだろうとそのたびに思います。

自分の意見を大切にするということは重要ですが、相手の意見を大切にするということもまた重要です。

意見が対立した時、「双方が完璧に満足する結果になる」ということはほとんどありません。しかし、自分の意見だけでなく相手の意見も尊重して話し合うことができれば、お互いに納得のいく結果、そして「より良い考え、意見」に繋がっていくのではないかと、この西九州新幹線の問題を通して私は思いました。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

この作品を書いたきっかけは、佐賀県鹿島市民の一人の中学生として、西九州新幹線開業から思ったこと、考えたことをいろいろな人に知ってほしいということが一つ、そして、市や県、国が頭をかかえるような問題は意外と自分たちの日常生活の中でも度々起こっているということを多くの人に伝えたいという二つの気持ちを持っているときにこの少年の主張の大会を知り、作品を書きました。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

話すことでしか伝わらない気持ち

長崎県　佐世保市立広田中学校　3 年
古川　万葉

みなさんは、「電話と SNS」どちらを利用するのが好きですか。私は断然、自分の感情がダイレクトに伝わる電話を利用する方が好きです。ところが、友人たちのほとんどが SNS を利用する方が好きだと言うのです。まさに、青天の霹靂でした。なぜ多くの人が SNS でコミュニケーションをとりたがるのでしょうか。その理由には、若い世代が大切にする価値観と SNS の特徴が大きく関わっているのだと思います。

近年、タイムパフォーマンス、いわゆる「タイパ」という言葉をよく耳にします。「短い時間でどれだけの効果・満足感を得られるのか」を重要視する人が多く、せわしない情報社会の中で、ゆっくりと会話を楽しむことに重きを置いている人が少ないのだと考えます。その点 SNS は、相手と時間が合わなくても会話ができ、気軽に短文や絵文字だけで返信できる点が「タイパ」がよいのでしょう。

私はこの「タイパ」よりも大事にしたいものがあります。それは、たとえ時間がかかっても「言葉に思いを乗せて、相手に伝わるよう表現する」ことです。私は幼いころから落語を習っており、感情を言葉に乗せて伝える力を身につけるために、日々努力をしてきました。落語の面白さは、語り手が発する言葉に、表情に、仕草に、100%の力で感情を込めなければ、お客さんには伝わりません。特に私が大切にしているのは表情です。言葉を発さず、表情だけで喜怒哀楽を表現し、お客さんが笑ってくれたときに「伝えたいことが伝わる」楽しさを実感します。また、演じる役の年齢に合わせて声のトーンや姿勢を変え、「一人で演じているのに、二人いるように見えた」と言われたときは、達成感を感じました。落語は、語り手の表現したいことがお客さんに伝わって初めて完成します。お客さんとともに創り上げているのだということを常に意識して、文字だけでは表せない面白さや「思いを伝える」ための表現力を磨いています。

このことは舞台上だけでなく、普段の生活でも大切にしています。しかし、実生活で直接話をすることには難しさもあります。私自身も、話がまとまらずに会話が止まったり長くなったりすることがよくあります。まさに現代の人々が嫌う「タイパが悪い」状態です。ですが、話している相手とラリーをする中で、誤解を解いたり、互いの意見を理解し合ったりして、一緒に結論を探し、たどりつくという過程を大事にしたいと私は思うのです。落語と同じように、話し手と聞き手が同じ時間、空間を共有し、ともに創り上げていくことが「会話」なのです。この過程を楽しむことが、本来の「会話」のあるべき姿ではないでしょうか。家族や友人と話しているときは、スマホを置いて、目の前にある「会話」を大切にしませんか。楽しみませんか。

私は会話の楽しさを多くの人が感じられるようになると、より明るく豊かな社会を創れるのではないかと考えます。文字でやりとりをする際にも、自分の思いを 100%言葉に乗せられているか、一度考えてみてから送信ボタンを押すと、「伝える」ことの楽しさを感じられると思います。私はこれからも、自分なりの言葉で、積極的に自分をめいっぱい表現することを大切にしていきたい！

「よ！姐さん粋だね。」

「あたしゃ帰りだよ。」

この主張をどんな人に届けたいですか？

現代の人々は、効率を重視したせわしない情報社会を生きています。私自身もその中の一人です。時間的にも、精神的にも余裕がなくなりがちな、厳しい時代を生きる一人だからこそ、私は人と向き合い、ゆっくりと「会話」を楽しむ心を大切にしたいと考えています。今、スマートフォンの画面ばかりを眺めている人、コミュニケーションをおろそかにし、短文だけでやり取りをしている人、自分の気持ちを整理し伝えることに時間を使えていない人。そんな人たちに私の思いが届き、少しでも「人と話がしたい。」と思ってもらえたら、よりよい社会になるではないかと考えます。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

心の言葉

大分県　宇佐市立宇佐中学校　２年
藏下　祥貴

「もうちょっと指を開いて」
「回す方向が逆だよ」
私は懸命に手指を動かしながら、講師の手を注視していました。

中学一年生の時、姉に勧められて市役所主催の手話講習会に一年間通い、手話を学び聴覚障害者の思いに触れました。学び始めた頃は指や腕を動かすことが難しかったり、ろうの方が表している言葉が分からなかったりと、本当に手話を理解し使えるようになるのか不安でしたが、一年間通う中で段々と慣れて、少しずつ分かるようになっていきました。その中で、自分の手話表現や言葉の言い換えに自信が無く、ドキドキしながら表して、ろうの方とコミュニケーションが取れた時は本当に嬉しかったです。

「私達聴覚障害者はかわいそうではなく不便なだけなんですよ。」講習会で伝えられた一番心に残っている言葉です。私は、手話講習会に参加するまでは、手話は「特別なもの」だと思っていました。私達健聴者は日常生活で手話を使うことはありませんし、誰もが分かるものではなく、ろうの方たちだけでコミュニケーションを取るものだと考えていたからです。しかし、手話講習会で学ぶにつれて段々と「手話」は特別なものではなく、一つの大切な「言語」だという事が理解できるようになっていきました。

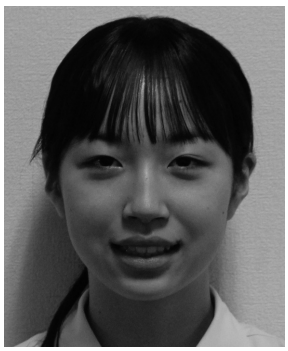
ある日の講習会で聴覚障害者の二人が休憩時間に、話しながら楽しそうに笑っている姿を見てハッとしました。なぜなら私は聴覚障害者の方達は自分の意思を伝える事だけで精一杯で、冗談などは言わないんだろうなと思っていたからです。「私達聴覚障害者はかわいそうではなく不便なだけなんですよ。」その言葉が私の中で重なりました。私は自分の中にある偏見、間違った考えに気付き、とても自分自身を恥じました。そのような気持ちは無くても、自分の間違った思いや考えによって、「自分とは違う」、「私達とは違う」という差別や偏見の心が生まれてしまうのだと思います。私は聴覚障害者の方や、手話講習会の講師の方達との出会いによって、とても大切な事に気付くことができました。聴覚障害者の方達も、私達健聴者と同じように冗談を言い合ったり、笑い合ったりするのです。講習会の時に、ろう者で講師の方が私に「この前、こんなことがあったんだよ。」と面白かった出来事を手話で話をしてくれて、私もとても面白くって大笑いしたことがありました。手話を通じて笑い合えたことがとても嬉しく、私にとって色あせることの無い思い出です。私はこれらの体験から、私達健聴者の言語と同じように、聴覚障害者の言語として手話があり、また私たちがそれを学ぶことによって壁の無い関係が築けると感じました。

大分県では、県と全ての市で手話言語条例が成立しています。これは手話での意思疎通のための環境を整備して、ろう者と健聴者がお互いを尊重して生きていくことが出来る社会の実現をめざして制定された条例なのだそうです。誰にだって違いや困りはあります。それをかわいそうではなく、お互いを認め合い、支え合ってこそ、一人ひとりが暮らしやすく、幸せで豊かな社会になるのではないでしょうか。私達は同じ人間として、不自由な思いをしている方がいたら、合理的な配慮で助け合うことが大切だと思います。特に聴覚障害者は見た目では障害の有無は分かりづらいですが、困っている方を見かけた時は、自分のできる範囲で寄り添うことが出来るようになりたいです。その為にも私は今年、全国手話検定四級を受けます。そしてこれからも手話や障害者福祉について学んでいきたいと考えています。

私の言葉は届かなくても、きっと私の心は届く、心の言葉で心のつながりを。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

私は人と関わることが大好きです。これからの出会いの中で、自分と考え方や境遇が違う人たちとも、思いやりの心で接していけば必ず分かり合えると信じています。聴覚障害者の方達と会話するためには私達も努力が必要と思います。私はこれからも手話の勉強を続けていきます。その中でいろいろな考え方や思いを学ぶことによって私自身の可能性も広がっていくと思います。心の言葉で心のつながりを築いていきたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

笑顔で明日を迎えられるように……

宮崎県　鵬翔中学校　２年
山田　心遥

「地震だ！」

教室で誰かがそう言った。間もなくして少し大きな揺れを感じた。ほんの一瞬だった。それでも、私は怖くて手が震えていた。

「南海トラフ。」この言葉が脳をよぎったからである。

2024 年 6 月 17 日 15 時 57 分、震度 3 の地震が宮崎市であった。日本で起きたこれまでの大きな地震と比べると、決して大きくはない地震だが、いつも通り授業を受けていた時に急に起きた非日常の出来事に私だけでなく、周囲の友人も驚いていたのを覚えている。

さて、皆さんは明日の自分を描けているだろうか。日が昇ると目を覚まし、ごはんをたべ、友人と楽しく過ごし、テレビを見て楽しんで、明日の準備をして眠りにつく。

そう、いつも通り、明日の準備をして……。

私たちは常に安心しきって一日を過ごしている。そのため、私もそうだが、いつ何があっても大丈夫だと言える人はきっと、少ないだろう。

日本に住む私たちの記憶に新しい、東日本大震災。2011 年 3 月 11 日に起きた地震。あの日から 13 年が過ぎている。その当時、私はまだ生まれていない。しかし、地震によって多くの犠牲者がでたことや地震による影響の大きさは知っている。知らないのは体験していないからこそ知りえない地震による本当の恐ろしさだ。

出来るならば知りたくない怖さだが、いつか来るといわれている「南海トラフ地震。」その発生する確率が数値になって徐々に近付いている。そのいつかがいつ来るか分からないだけで、もしかしたら明日、来るかもしれない。そう考えると、今のうちからその「いつか」に対して準備をしておくべきである。

しかし、私を含めて、私たちはその「いつか」を軽視している。「備えあれば憂いなし」とはよく言うが……、皆さんは何か準備をしているだろうか。

「みんな助かったのは、日頃から訓練をして地震に備えていたからと思います。」

東日本大震災が起きた当時の様子が流れるテレビ番組で、在校生全員が地震や津波に巻き込まれず無事だった小学校の一人が述べた言葉だ。記憶に残っている人もいるかもしれない。

彼らは、この日に、大きな地震が来るということを予想していたのではない。私たちと同じように「いつか」来るかもしれない大きな地震に備え、万全な状況を常に備えていた。そしてそれをその時に発揮した。ただそれだけである。

今からでも遅くはない。私は大丈夫という考えは捨てて、「いつか」がいつ来ても大丈夫なように、本日、私の話を聞いた皆さんからまず備えて欲しい。

そこで、まずは私から、本日ここで、「いつか」に備えるための宣言をする。

一つ、地震以外の災害にも備えるために「防災バッグ」を準備すること。

一つ、高台を含め、緊急時の避難場所を確認すること。

一つ、大切な人たちと別れないですむように、これからの多くの人との関わりを失わないために、「いつか」に備える意識を多くの方に持ってもらえるよう呼びかけること。

私たちは独りでは生きていけない。支え合い、助け合って生きている。困ったときこそ手を差し伸べてとよく耳にするが、困ってからではなく、困らないですむように、「今」のうちに「いつか」に備える気持ちを広めて欲しい。その思いをもつ人たちで溢れる社会になれば、大きな被害につながらないのではないだろうか。私はそう思う。

いつも通り来る明日のために。大好きな人たちと過ごす時間のために。そして、家族と離れずに済むために。今、「いつか」に備えよう。私たちは大丈夫ではない。

この主張をどんな人に届けたいですか？

南海トラフ地震。あなたの近くに「私は大丈夫」と考えている人はいないだろうか。その人が「いなく」なってしまう生活が想像できるだろうか。今回の主張は、「まだ地震は来ない」「私は大丈夫」と慢心を抱いている人に対しての警鐘であり、既に備えている人たちに対しての協力要請でもある。防災意識と備えの重要度を多くの人に届けたい。その思いの伝播を、既に備えている人にも担って欲しい。皆が明日を笑って迎えられるように。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

「世界は変えられる」

鹿児島県　鹿児島市立城西中学校　3年

濵田　一華

世の中には，存在を認められていない子供がいる。それを聞いて，すぐに信じられる人がどれぐらいいるでしょう。ブレイディみかこさんの書いた「両手にトカレフ」では衝撃的な一節があります。「邪魔者を見る目つき。あの時彼はそんな顔をしていた。私たちさえ自分の人生からいなくなればと強烈に願っていた。大人はあんな目をして子供を見てはいけない。私はここにいてはいけないのだと子供が考えるようになるから。」この本では主人公のミアが母親からネグレクトされるのですが，思わず目をつぶってしまいたくなるような残酷な描写がたくさんあります。それが十四歳の少女ミアの現実です。「両手にトカレフ」は小説ですが，同じような厳しい状況に生きる子供たちが世界中にたくさんいることを，あなたは知っているでしょうか。

ユニセフによると，出生登録されていない子供の数は世界中の子供の数の実に四分の一にも当たるのだそうです。出生登録，それはつまり新しい命がこの世に誕生したと周囲に知らせることです。守り育てるべき命がここにあると，大人の誰もが知るべきなのに，それをされない子供がいるなんてことが許されていいのでしょうか。私は，存在の認められていない子供の現実を知り，その数の多さへの驚きと共に怒りを覚えました。出生登録がなされない理由の中には「届ける場所がわからなかった」「手続きが面倒だった」という単純なものもあるそうです。ではなぜこの問題は解決できないのでしょう。

それはこのような子供の存在について知らずにいる人が多いせいだと私は思います。当たり前のように家族と食事をして，当たり前のように学校へ行っている私のような学生，その家族からはもしかしたら想像もつかないことでしょう。しかしその日常は，他の誰かにとって当たり前なんかではないのです。今，五分に一人，家庭内暴力で命を落とす子供がいると聞いたらあなたは信じますか。残念ながらこれは小説の中の出来事ではなく，事実なのです。それでもまだ自分たちの当たり前の世界の反対側で生きる子供たちのことを知らずにいていいと思いますか。

世界には解決しなければいけない問題があること，その問題に立ち向かおうとする人がいることも私たちはもっとよく知るべきです。その一つが「子供食堂」です。私は過去に自由研究で子供食堂のことを取り上げました。子供食堂は非営利団体であり，食事を摂ることが困難な状況にある子どもたちのために無料もしくは低価格で食事を提供する場所です。私が実際に子供食堂へ初めて足を運んだ時，私がインタビューをしている間中，子供たちの笑い声や話し声がにぎやかでした。そしてインタビューに答えてくださった方の言葉は今でも忘れられません。「学校では，見知らぬ人にはついていってはいけない，と教わるでしょう。でもここでは見知らぬ人とたくさん顔を合わせてほしいんです。」子供食堂をどんな思いでやっているのかがよく伝わってきました。そこに足を運ぶ子供の日常が暗く息苦しいものだったとしても，子供食堂では子供の存在を丸ごと包んでくれるのだと感じることができました。そして，私もその温かい活動をする一人になりたいと思い，後日支援物資を届けに行ったのです。するとたくさんの笑顔と「ありがとう」の声に包まれ，私は届けた支援物資よりずっと大きくて温かいものを受け取ることができたと思いました。

今，わたしたちの生きる世界の反対側で，自分の存在に自信を持てないでいる子供たちがたくさんいます。知らないままでいたら，世界は変わりません。知ることで思いが生まれ，行動できます。私がそうだったように，あなたにもできる行動はきっとあります。私たちの力で世界を変えてみませんか。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

もちろん、厳しい状況に生きる子供たちのことを知らない人に届けたい気持ちもあります。しかし、私の主張を見て「周りには自分を助けてくれる人がいる」と子供たちが希望を持ってほしいです。そして、そのような子供たちが、自分たちの未来を考えられるようになってほしいです。だから私はこの主張を様々な状況に生きる子供たちに届け、勇気を与えたいです。そして、一刻もはやく、世界中の子供たちがのびのびと暮らせる社会を私たちの手でつくっていきたいです。

審査委員の感想

SNSの時代だからこそ考え抜いて発信する力を！

日本放送協会　解説委員
今井　純子

SNSの広がりを背景に、ネット上には、短文で負の感情をぶつけるコメントや偽情報・根拠が不十分な情報があふれ、個人の生活、そして政治や社会にも大きな混乱を及ぼすようになっています。そうした時代だからこそ、中学生のみなさんが、日々の経験の中で考えていることを、練りに練り、筋道たてて訴えかけてきた今回の大会は、「言葉の持つ力」について改めて考えさせられる機会となりました。

宮城県のケイバージーバさん。日本に来て勉強についていけなくなり、つらい思いをしている中で、中村哲医師の言葉に出会い、困った人たちを助ける存在になりたい。医師になって、勉強の機会すら与えられないアフガニスタンの女性の希望につなげたい。と思うに至った心の動きが、静かな語り口から素直に伝わってきて、夢の実現をぜひ応援したいという気持ちになりました。

千葉県の松原蒼天さん。お母さまが亡くなった苦しい心の内を、思い切って「言葉」にしたことで、自分の気持ちに変化が生じた。と同時に、家族の大切さを周りに伝えることができた。「言葉で伝える」ことの大事さが心に響きました。山形県の井上愛奈さん。審判の声が聞こえない。静寂の世界で、仲間に支えられ、剣道に挑戦した経験を通じ、これからも、多くのことに挑戦していきたいという決意。心から応援します。

また、「戦争をしてはいけない」という思いを、真正面から訴えた静岡県の鈴木颯太さん、島根県の田本怜花さんの主張も、世界中で戦争や紛争が絶えない中、ストレートに心に響きました。

自分が思うことについて、客観性や事実関係を踏まえ、また、論理構成をきちんとたて、説得力を持って発信することは、簡単なことではありません。でも、SNSの時代だからこそ、大事なことだと思っています。これからみなさんは、社会の中でたくさんの課題にぶつかると思います。周りの人の心を動かし、社会を動かしていくためにも、考え抜いて発信することを忘れず、未来を切り拓いていってほしいと願っています。

未来への希望

全日本中学校長会　生徒指導部長
遠藤　哲也

全国から選ばれた中学生 12 名の熱意ある主張を、会場で直に拝聴する機会をいただいたことに心より感謝を申し上げたいと思います。

発表では「障がいへの理解を広める必要性」や「多様性の尊重」、「家族の在り方」等、個人の体験を通じて社会的な課題や日常の気づきをテーマにしたものが多く見られました。いずれも中学生らしい視点であり、感情のこもった言葉一つ一つは説得力を持っていました。中でも、ケイバ―ジーバさんの発表には力強い決意が感じられました。アフガニスタン人である彼女は小学四年生の時に来日し、言葉や勉強の壁にぶつかり、死んでしまいたい、とまで悩みます。絶望の淵から救ってくれたのは友達や先生でした。この時の思いから、自分も人を助けられる存在になりたい、と強く思うようになりました。彼女が医師になりたいという夢を叶え、母国と日本の架け橋となる日がくることを祈ります。

松原蒼天さんは、小学生の時に最愛の母を亡くしました。亡くなった時刻を見たり、月命日を迎えたりする度に、母に感謝を伝えられなかった後悔で胸が苦しくなりました。彼の心を軽くしたのは、中学入学後に母のことを綴った作文でした。思いを「言葉」にすることの大切さが会場中に伝わったことと思います。

友枝紗寧さんの祖父は「ついでにしてるだけ」が口癖で、散歩のついでにごみを拾っていました。ある日、お墓参りのついでに落ち葉掃きする男性をみかけ、大好きだった祖父を思い出し、自分も「ついでにしているだけ」という気持ちで周囲を幸せにできる人になりたいと考えるようになりました。

他にも、障害を乗り越え挑戦する勇気を語ってくれた井上愛奈さん、少数派の「じゃない方」も住みよい社会となることを主張した村木新さんからは、未来への希望を感じました。

最後に、今大会に応募した約 35 万人の中学生に敬意を表したいです。また、中学生の輝ける場を提供していただいた本大会運営に携わった全ての皆様、御支援をいただいた各中学校の先生方に感謝を申し上げます。

社会の「創り手」としての期待と希望

文部科学省　総合教育政策局　地域学習推進課長
高木　秀人

12 名の発表を拝見し、また、都道府県代表 47 名の作文を拝読させていただきました。全ての主張から、それぞれが社会に訴えたい熱い「想い」に圧倒されました。と、同時に、自らの体験・経験に基づいて発見した課題に対し、仲間と協働し、主体的に活動して課題解決を図ったことについて、論理的に展開して、表現されていました。

さて、政府では、昨年 6 月、今後 5 年間の教育施策の総合的な計画として、「第 4 期教育振興基本計画」を閣議決定しました。その中では 2 つの総括的な基本方針を掲げています。

その 1 つ目が「2040 年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成」です。将来の予測が困難な時代において、未来に向けて、「社会の担い手」ではなく、自らが「社会の創り手」となるような人材の育成を目指しています。

もう 1 つは「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」です。多様な個人それぞれが幸せや生きがいを感じる「獲得的幸福」だけでなく、地域や社会が幸せや豊かさを感じられる「協調的幸福」も重視した、日本社会に根差したに基づくウェルビーイングの向上を図っています。

まさに、都道府県代表の皆さんが発表で、作文で、表現されていた内容と重なるように思います。将来の予測が困難な時代に向かって、自らが「社会の創り手」となるべく、仲間とともに「協調的幸福」も追求されています。皆さんのような中学生が将来、「社会の創り手」として活躍いただければ、未来は明るいように感じました。楽観的過ぎるかも知れませんが。

皆さんのような中学生が将来、伸び伸びと活躍できるような社会を創っていけるよう、微力ながら、引き続き、様々な教育施策を展開しなければならないと、改めて、肝に銘じています。一緒に、未来を切り拓いていきましょう。

意見を言うこと、意見を聴くこと

こども家庭庁長官官房　参事官（総合政策担当）

中原　茂仁

今回、こども家庭庁を代表して、少年の主張全国大会の審査員を務めることになりました。皆さんの作文を読ませていただき、その上で、当日、舞台で皆さんが発表した主張をしっかりと聴かせていただきました。

全員の主張が素晴らしく、甲乙つけがたく、結果的にはほんの少しの違いから、ほんの少し違う賞の受賞が決まっていきましたが、皆さんが思ったことを堂々と舞台の上で語り、表現したことに、実質的に全く優劣はなかったと感じています。

皆さんがこの大会に出場するにあたり、どんな話をしようか、どういう風に言えばみんなに思いが伝わるだろうか、いろんなことを考えたのではないかと思います。今回、迷ったり悩んだりしながら言葉を紡いだ経験によって、きっと皆さんは、自分の思い・自分の意見を言うことの大事さや素晴らしさを感じることができたのではないでしょうか。

ここで一つお願いです。今度はぜひ、皆さんの周りの色んな人たちの意見に、意識的に耳を傾けてみてください。ぜひ、聴く側にも回ってみてほしいのです。そうすることで、きっと皆さんは意見を聴くことの大事さも感じることができると思います。同時に、その相手も、自分の意見を皆さんにしっかり聴いてもらうことができて、意見を言う素晴らしさに気づくことができるでしょう。

昨年４月に施行された「こども基本法」は、その基本理念の中で、全てのこどもについて「意見を表明する機会」が確保されることを求めています。人はひとりひとり人権があり、大人もこどもも、自分の意見を表明する権利があります。

全てのこどもにとって、日常の色々な場面で意見を言う機会が得られ、周囲の人はその意見をしっかり聴く。そういった社会をこども家庭庁は目指しています。みんながお互いに、自分の意見をしっかり言い、相手の意見をしっかり聴く。そうしたつながりの輪が私たちの社会のあちこちで広がっていくことを願っています。

皆さんのこれからの活躍に心から期待します。ありがとうございました。

「幸せを築く意志」に共感

日本 PTA 全国協議会　副会長

中村　総一郎

今回初めて審査委員をさせて頂いて、参加の中学生のみずみずしい感性に触れることができ、得難い経験となりましたこと感謝申し上げます。

今回一番感じたことは、昨今、社会の至る所で「分断」の様相が見られる中、子供たちがそれぞれの置かれた環境の中で、自分の身の回りに「幸せ」を築いていこう！とするその姿勢の尊さでした。

総理大臣表彰の宮城県・ケイバージーバさんの作品からは、「国籍の壁の不遇を乗り越えるためには、一隅を照らす心積もりで他者に貢献するんだ」という強い意志を、文部科学大臣表彰の千葉県・松原蒼天さんの作品からは「家族の喪失から前を向いて歩きだす時に支えになったのは、他者からの言葉であり、自分もこれからは今まで以上に言葉を大切にしたい」という決意を感じ、心が動かされる時間となりました。惜しくも本選出場とはなりませんでしたが、滋賀県の馬場迫葵さんの作品からは「友達がたくさんいることが幸せの証」という同調圧力から自分を解放する試行プロセスが訴えられ、学校に通う意味を「社会人になるためのポジティブな練習期間」と再定義する思考に拍手を送りたくなりました。

「生きづらい」「分断」の社会を「生きていく」「変えていく」ために、「貢献」「言葉がけ」「自分軸」「ポジティブ思考」などのキーワードが心に残りました。

今回は全国大会という形の中で、審査する側、される側という立場でしたけれど、日常生活の場面に戻っても、子供たちの声にリスペクトを持ちながら耳を傾け、大人がＰＴＡの活動を通して、善き背中を見せていきたいものだと感じました。

入賞の皆さんのみならず、本事業に参加されたすべての皆さんの未来に幸多からんことを祈念申し上げます。

マス目に込められたそれぞれの思い

国立女性教育会館　理事長

萩原　なつ子

全国各地で選ばれたブロック代表のみなさんの作文が手元に届いた際に感じるのは、ある種の緊張感と“ワクワク・ドキドキ感”です。限られた文字数で、当事者でなければ語れない体験や考えを自分の言葉で表わし、さらには社会に対する提言や提案として全体をまとめ上げることはとてもエネルギーのいることです。家族の何気ない行動や発言から得た気づきからの提案、自分の置かれた立場から考えるマイノリティが抱える問題からの提言、自身のアイデンティティやジェンダーの視点からの提言など、テーマも多様で、本当に主張したいことは何かを熟考しながら、おそらく何倍もの分量の原稿を書いたのでしょう。タイトルを何にするのかも含め、推敲に推敲を重ねたであろう作文を読みながら、そうだよね、わかるわかる、なるほど、そういうことなんだと共感したり、感心したり、感動したり。私はこうありたい、こうなりたい、こうしたいという意欲が溢れる原稿用紙の一マス一マスに込められた一人ひとりの“主張”を、一気に読み進めながら今年も思ったことは、審査員という立場でなければよいのにということです。

審査委員会で選考された 12 名のみなさんの作文には、まさに選りすぐりの珠玉の言葉と主張が原稿用紙という舞台で際だっていました。そして全国大会の壇上においては、その言葉に“声”という楽器を使った“主張”が展開されました。きっとプレゼンテーションの練習も繰り返しされたのでしょう。声のトーンやペース、大きさなど、声に感情の機微を乗せ、聞き手に主張がしっかりと伝わってきました。そして文字だけでは分からなかった新たな気づきを私たちに与えてくれました。今年も感動を本当にありがとう。近い将来、みなさんの夢や思いが形になることを心から祈っています。

大切な発表を聞かせてくれてありがとう

第 41 回少年の主張全国大会　文部科学大臣賞受賞者

廣岡　里奈

大きなホールで、ひとり壇上に立ち、自らの言葉を主張する。その主張は会場の視聴者だけでなく、画面を超えて、時間を超えて、伝わっていく。この経験は自身の糧になるだけでなく、主張を聞いた人に共感や感動をもたらし、その人の考え方や生き方を変えるかもしれない。

自分の伝えたいことがきちんと伝わるように、文章を推敲すること。また、迫力や熱意を伝えられるように、感動を与えられるように、何度も話す練習をすること。作文を応募し、各都道府県大会で発表し、ステージに立つためにはこのような努力が必要だったでしょう。だからこそ、書類審査で拝読した 47 作品を含め、選ばれてきた作品に共感できないものはなく、心にぐっとくるものが多かったのだと思います。みなさんの作品は、新鮮な視点から見える新しいこと、また忘れてしまっていた大切なことに気づかせてくれました。

同じことを経験しても、その中で違和感や気づきを持つ人と、そうでない人がいます。作品に応募できるということは、主張したいという思いがあるはずなので、みなさんには気づく感性があるということです。そして気づいて、勇気をもって自分の外に発信する力もあるのです。これは本当に素晴らしいことだと思っていますし、みなさんのような人が大人になって育む社会も素晴らしいものになると信じています。わたしは今 20 歳ですが、この先も感性を失わず、発信していける人を目指していきたいと改めて思いました。

これからの人生でこの経験が生かされないことはありません。わたしも少年の主張で発表した経験はさまざまな場面で自身の支えとなっていると感じています。少年の主張大会に応募した同志としてみなさんのこれからのご活躍を祈念しております。

どの学校にも「少年の主張」ができる場を

読売新聞東京本社　編集委員

古沢　由紀子

「自分の考えや意見を率直に言える雰囲気があるかどうか」。それが、学校の「ウェルビーイング」（幸福度、もしくは居心地）を左右すると聞いたことがある。裏を返せば、学校では意見を表明しづらいと考える子どもたちが少なくないということだ。特に中学生は、高校入試の内申書を意識したり、一人だけ突出するような言動を避けたりする傾向があるのかもしれない。

「少年の主張全国大会」は、生徒が自らの視点や体験に基づく「主張」や「意見」を文章にまとめ、さらに聴衆の前で発表する方式で、一般の作文コンクールとは大きく異なる。今回も 12 人の出場者は、それぞれの悩みや葛藤も明らかにしつつ、若者ならではの新鮮な発想や独自の観点を示してくれた。

なかでも「『じゃない方』になって気づいたこと」が審査委員長賞を受けた愛知県の村木新さん、「空気の読めない私にできること」を発表した山口県の中島実優さんは、タイトルからも「多数派」であることにこだわらない意志が読み取れた。

母を亡くした村木さんは、仕事をしながら一人で 3 人の子を育て、お弁当を作ってくれる父を誇らしく思うとともに、父子家庭は一般的「じゃない方」（少数派）とみられがちな傾向を実感している。「世間の常識と思い込んでいる見方や、多数派の意見を一方的に押しつけることのないようにしたい」という主張は冷静で、幅広い社会の問題に目を向けたものだ。

発達障害などで周囲に合わせた行動が難しいという中島さんは「人の役に立ちたい」と学校行事のまとめ役などに挑戦し、「私は空気が読めない。でも（前向きな）空気を作ることはできる」という手応えをつかんだ。

今の学校の実情を考えると、「少年の主張」として自らの意見を発表する場はとても貴重で、もっと多くの生徒に挑戦してもらえれば、と願う。どの学校にも、自分の考えや生き方を発表する機会、いわばミニ「少年の主張」があれば、教室の「空気」と「ウェルビーイング」は格段に爽やかなものになるだろう。

「主張」の繊細さと力強さ

国立青少年教育振興機構　理事

松田　恵示

全国大会に出場したみなさんの気持ちのこもった主張を読んで、中学生のみなさんの斬新なものの感じ方や、当たり前にとらわれない視点、そして未来への期待とワクワク感を今回も強く感じます。兎角、未来に対し暗いイメージが語られやすい日本の空気感は、中学生一人ひとりが持っているポテンシャルを忘れているのではないかと思えます。過去は変えられませんが、未来は私たち一人ひとりの思いが重なり合って創り出すことができるはずです。行動と考えることを繰り返して、みなさんが思うキラキラとした未来に向かうきっかけに、この大会がなればいいなと思いました。

大ヒットした映画「君の名は」(新海誠監督 / アニメ) の中で、主人公の宮水三葉の祖母、宮水一葉は次のように語ります。

「寄り集まって、形を作って、捻れて絡まって、時には戻って、また繋がってーそれが “結び”、それが “時間”」。

ここで語られた独特の「時間」のあり方や「結び」の持つ奥行きの広さを感じる主張に、今回いくつか出会ったことも大きな驚きの一つでした。一直線な熱さや純粋さだけでなく、豊かな共感力や理解力に裏打ちされて、人間が生きている時間の「ヒダ」のようなものに視点を定めた主張が頭を離れません。大会の名称は確かに「主張」なんだけれども、「主張」が自分から発信されるのではなくて、人との関係や普段のつながり、結びの中から「自分ごと」として発信されるとき、それは大きな共感を生むとともに世界を動かす強力なボディーブローになるのだと思います。

「主張」は、発表力や表現力が競われるその前に、人や自然に対する畏敬の念や、世界に対する共感や積極的な諦念があって、だからこそ普段は隠れがちなことだけに、「はっ」とさせられたり、「うーん」と唸ってしまうんだなー、と思いました。AI や高度な情報技術が発展するこれからの社会だからこそ、合理性や力強さだけではない、繊細なキャッチする力から生じる「びっくり」が「主張」の中には含まれるんだなー、そんな感じです。

いろいろな「主張」を、本当にみなさん、ありがとうございました。

視聴者アンケート・コメント抜粋（大会終了後、会場で回収したアンケートより）

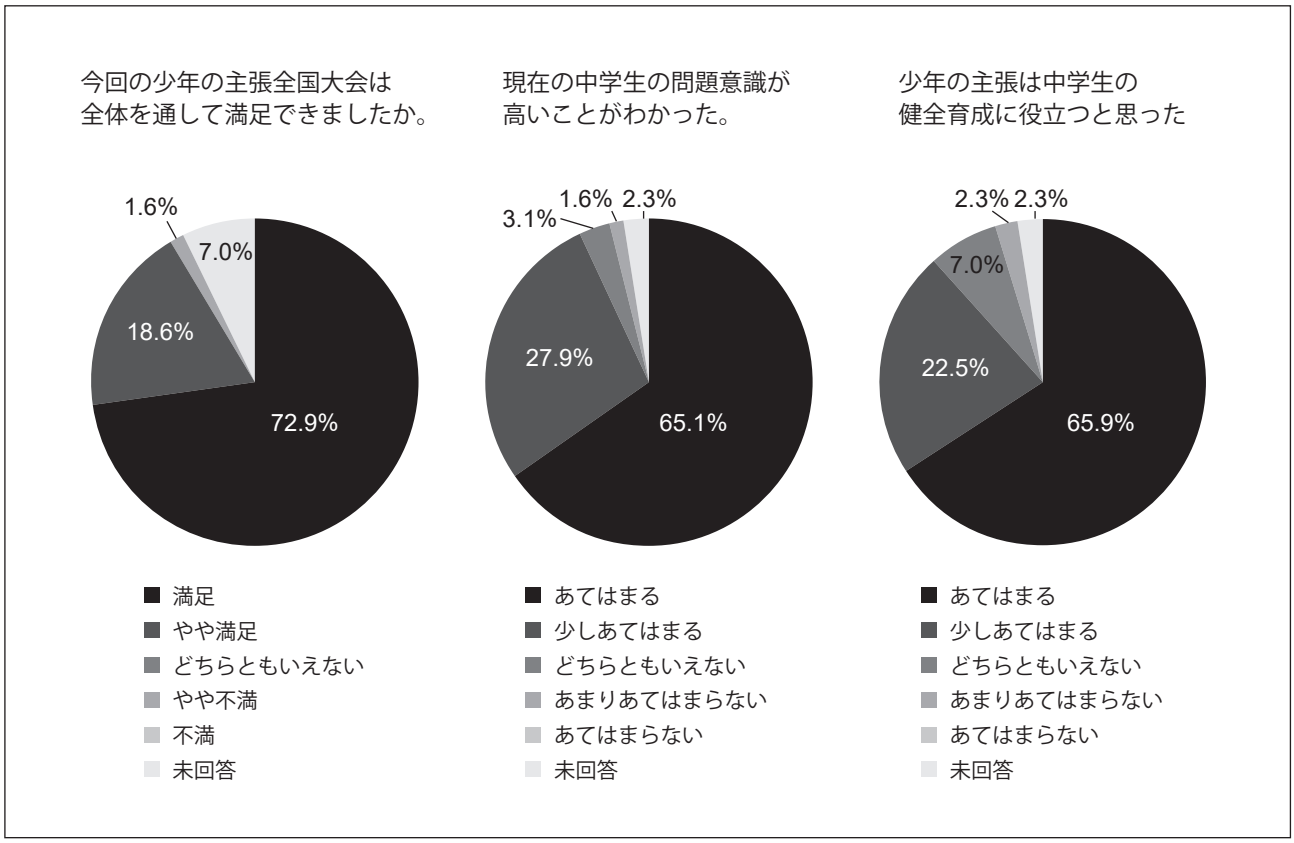
視聴者の声

- 自分と同じ境遇にある方、全く違った考えを持っている人など様々な意見を聞けて良かった。私を除く 46 の気付きがあった。
- どの主張も他者への愛を感じた。周りの人や社会・文化を思いやる人を育てる事が発表者のような人を増やすことに繋がる。
- 発表者の熱い言葉や想いを聴くことができ、とても良かった。
- ひとりひとりの主張が本当に凄く、心を動かされた。
- 子どもの成長過程を身近に感じる事ができた事に感謝する。
- 担当スタッフの対応がとても良い。
- 発表者のような子がたくさんいるなら、日本の将来は明るいと思う。このような素晴らしい発表を是非全国の中学生に聞いて欲しいと思った。
- 中学生だからこそ感じる事、大人になったからこそ忘れてしまっている事を気付かされた一日だった。
- 直接生徒の発表を聴くことで、文面からは伝えきれないものを感じ取ることができた。参集型の大会の意義が感じられる素晴らしい大会であったと思う。
- 今回発表したような人たちがこの世代のリーダーとして活躍すれば、この世は偏見の少ない世界になって行くと思う。
- 今の中学生の主張が心に突き刺さった。来年以降も続けて、色々な方に観覧して欲しい。
- 毎年聴いているが、中学生らしく堂々と発表している姿は素晴らしい。次年度も参加したい。
- 大会に来ない中学生にも YouTube で見せたいと思う。同世代の人が主張しているからこそ得られる気付きや学びがあると思う。
- 弁論の力を改めて感じた。相手に伝えるという思いを大切にし、指導にあたる方たちの指導観もそうあって欲しいと思った。
- 発表者一人一人の熱い思いが感じられ、自分自身を振り返る事ができた。弁論大会の意義の大きさを再認識した。
- 発表者はある種のマイノリティネスを持っている人が多いように思う。その生きにくさをこの機会のように主張できる強さに胸を打たれた。
- 中学生には何にでも興味を持ち、何にでもトライして欲しい。
- 市、県、そして全国大会まで、発表の場を与えてもらった生徒の成長を見ることができ、自分自身も貴重な体験ができた。生徒自身も発表者同士の交流もできたようで、大変良い学びになったと言っていた。多くの中学生がこの発表に対して何かを感じ、これからに生かしてもらえると素晴らしい。
- 地元への思いや家族への思い、周りへの感謝、世の中に対する批判など中学生の言葉で自分の思いをぶつけた主張がとても心に刺さった。ただ生きるのではなく、人の為に動ける自分でありたいと改めて思った。
- 今年は申し込んだ際と大会直前にメールをもらい安心して参加することができた。講評が素晴らしかった。
- アナウンスと手話が素晴らしかった。努力賞の受賞者へのフォローも良かった。奨励賞は以下同文で良い。
- 会場での視聴者がもっと増えると発表する生徒が、多くの人に伝えられたという気持ちになると思う。
- 1980 年代に運営に関わったが、今も続いていて驚いた。PR が足りないと思う。

●中学生の自分の言葉で訴える主張をもっと多くの人に聞いてもらいたい。
●少し椅子が痛いので、間に休憩があると集中して聴くことができると思った。
●発表後の審査時間が長すぎる。来場者が帰ってしまう。例えばダンス等、別プログラムの発表の場にすると良い。
●企業の協賛などは検討されていないのか？良い企画なのに、あまり知られていないのが残念。

視聴した中学生が今後活かしたいことや取り組みたいこと

●今後も様々な問題に目を向けて行きたい。
●様々な体験をしている人がいることが分かった。自分の考えを当たり前と捉えずに、様々な視点に立てるようになりたい。
●この経験を通して、何事も「主体的に考えて解決」するようにして行きたいと思った。
●普段自分の周りにはいない個性や経験を持った人たちがたくさんいるという事を感じた。家族に感謝する事など改めて大切な事を考えさせられた。
●しっかりと人の意見を尊重して行きたいと思った。
●家族や周りの人との関わり方、会話の大切さ、自分にできることを積極的に行う事が大切だと感じた。自分から積極的に挨拶や会話をして行きたい。
●今回の発表で、たくさんの価値観を知ることができた。この価値観を友達に伝え、未来を担って行きたいと思った。
●この経験を通して、クラスメイトなど周りの人に良い影響を与えられるよう、積極的に発言・行動をして行きたい。
●自分はこれまで不登校の子と関わったことがある。その子に不登校のきっかけを聞いた際、どう答えて良いか分からなかった。今回今井さんの発表を聴いて「頑張ったね」という言い方があることに気付いた。今後このような事があったら「頑張ったね」と声を掛けたい。



実施概要

第 46 回少年の主張全国大会　～わたしの主張 2024 ～について

全国大会開催要綱

1. 趣旨

　少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められています。

　そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切です。

　少年の主張全国大会は、子どもたちにとって、これらの契機となることを願い実施するものです。

2. 開催日時

令和 6 年 11 月 24 日（日）13 時～ 16 時

3. 開催場所

国立オリンピック記念青少年総合センター　カルチャー棟大ホール
〒 151-0052　東京都渋谷区代々木神園町 3 番 1 号

4. 対象

日本在住の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの。
※国籍は問わないが、日本語で発表できること。なお、作品は未発表、自作のものに限ります。

5. 主催

国立青少年教育振興機構

6. 特別協力

公益財団法人上廣倫理財団

7. 協力

都道府県、青少年育成都道府県民会議、全国青少年育成県民会議連合会、全日本中学校長会、日本私立中学高等学校連合会、公益社団法人日本 PTA 全国協議会

8. 後援

文部科学省、こども家庭庁、東京都教育委員会、日本放送協会、一般社団法人日本民間放送連盟、一般社団法人日本新聞協会、社会福祉法人全国社会福祉協議会

9. 主張発表者（出場者）・発表内容

（1）主張発表者

各都道府県より推薦された地方大会（都道府県大会）優秀者 1 名、計 47 名の中からブロック代表として選ばれた 12 名が主張発表を行います。

（2）ブロック代表定数

全国を 5 ブロックに分け、ブロック毎に出場者数を定め、それぞれの数のブロック代表を選出します。

○北海道・東北ブロック・・・・・2 名
○関東・甲信越静ブロック・・・・3 名
○中部・近畿ブロック・・・・・・3 名
○中国・四国ブロック・・・・・・2 名
○九州ブロック・・・・・・・・・2 名

（3）発表内容

ア．社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。
イ．家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。
ウ．テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。

上記のような内容で、心からの思い、考えたことや感銘を受けたことなどを、少年らしい自由でユニークに、飾り気のない言葉でまとめたもの。
また、商業的な固有名詞の使用は極力避けるようにしてください。
（悪い例：○○県にある○○旅館　良い例：○○県にある旅館　など。）

（4）発表時間

5 分程度（400 字詰原稿用紙 4 枚程度）

10. 表彰

（1）全国大会出場者全員（12 名）に国立青少年教育振興機構理事長より奨励賞、全国大会出場者に選考されなかった都道府県代表者全員（35 名）に同理事長より努力賞を贈ります。

（2）全国大会の審査委員会で審査の上、内閣総理大臣賞・文部科学大臣賞・国立青少年教育振興機構理事長賞を選考し、賞状を授与します。また、審査委員会の審査過程によっては、審査委員会委員長賞が選考される場合があります。

（3）全国大会出場者全員（12 名）に、記念品が贈呈されます。また、内閣総理大臣賞・文部科学大臣賞・国立青少年教育振興機構理事長賞・審査委員会委員長賞を受賞された方には、副賞が贈呈されます。

11. その他

（1）応募は、各青少年育成都道府県民会議等を通して行います。

（2）全国大会に応募した作品の出版権は、国立青少年教育振興機構に帰属します。

（3）全国大会当日のプログラム、発表集には、本人の写真と氏名、学校名等を掲載いたします。

（4）全国大会実施後に作成する報告書（作品集）について、当日の実施風景をはじめ、全国大会に応募（推薦）された 47 作品全てを掲載し、本人の氏名及び学校名等を公開するとともに、関係機関に配布します。
※全国大会当日の発表の様子や審査結果については、本人の氏名及び学校名等をＷＥＢ上でも公開します。

少年の主張都道府県代表者の推薦（作品の募集）について

1. 都道府県大会の開催

青少年育成道府県民会議等の主催により、青少年育成市町村民会議、区市町村教育委員会、中学校等の協力を得て、広く作品の募集及び地区大会等を開催し、その選考を経た各代表者の中から都道府県大会において最も優秀な者を選考した。

2. 都道府県大会実施概要　73 ページ参照

全国大会出場者選考及び大会審査について

1. 全国大会審査委員会の設置

作品を審査するため、青少年団体、行政、学識経験者や教育関係団体、マスコミ等、複数の分野から審査委員を選任した。

審査委員長	喜多川　泰	作家
審 査 委 員	今井　純子	日本放送協会 解説委員
	遠藤　哲也	全日本中学校長会 生徒指導部長
	高木　秀人	文部科学省 総合教育政策局 地域学習推進課長
	中原　茂仁	こども家庭庁長官官房 参事官（総合政策担当）
	中村　総一郎	（公社）日本 PTA 全国協議会 副会長
	萩原　なつ子	国立女性教育会館 理事長
	廣岡　里奈	第 41 回少年の主張全国大会 文部科学大臣賞受賞者
	古沢　由紀子	読売新聞東京本社 編集委員
	松田　恵示	国立青少年教育振興機構 理事

2. 審査方法及び審査基準

①事前審査（全国大会出場者選考の為の審査）

事前審査（作文審査・出場者選考審査）は、全国 5 ブロックごとに協議を行い、全国大会出場候補者を選出。全国大会出場候補者の中から合計 12 名を全国大会発表者として選考。

＜作文審査＞（在宅審査）

[期　　日]　令和 6 年 10 月 4 日（金）～ 10 月 21 日（月）

[方　　法]　都道府県代表の作文を読み、以下の各基準を踏まえながら、ブロックごとに相対評価にて順位付け（上位 5 名を選考）を行い、評価点（上位から順番に 5 点、4 点、3 点、2 点、1 点）を付与する。

[基　　準]　①自分の考えを自分自身の言葉で表現しているか
②個人の体験に基づき、社会に訴える主張であるか
③提案や提言を実践しようとする意欲が感じられるか
④論旨が一貫していて分かりやすいか
⑤内容に共感・感動できるか
⑥鋭い感性で、新鮮な主張であるか

＜全国大会出場者選考最終審査＞（集合審査）
[期　　日]　令和 6 年 10 月 24 日（木）
[場　　所]　国立オリンピック記念青少年総合センター　大会議室
[方　　法]　作文審査により付与した評価点を踏まえ、審査委員会での協議により、ブロック毎に全国大会発表者 12 名を決定する。なお、協議により選定が難しい場合は、発表動画を視聴し、以下の各基準を踏まえながら、全国大会発表者の選考を総合的に行う。
[基　　準]　①共感と感銘を与える話し方であるか
②説得力のある話し方であるか
③話しぶりに熱意と迫力があるか

②全国大会審査
[期　　日]　令和 6 年 11 月 24 日（日）
[場　　所]　国立オリンピック記念青少年総合センター　カルチャー棟　大ホール
[方　　法]　全国大会出場者 12 名の発表を聴き、以下の各基準を踏まえながら、相対評価にて順位付けを行い、評価点を付与する。その後、協議による総合的な審査を行い、内閣総理大臣賞、文部科学大臣賞、国立青少年教育振興機構理事長賞の三賞を決定する。
[基　　準]　第 2 回審査基準及び第 3 回審査基準のほか
①共感と感銘を与えていたか
②説得力のある話だったか
③熱意と迫力があったか
④落ち着いて話していたか
⑤聴衆に感動を与えていたか

③設置された賞

全国大会出場者	（三賞）	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞	全国大会発表者のうち、優秀な 3 作品に授与した。
	審査委員会委員長賞		全国大会発表者のうち三賞のほか、審査委員長の評価が高い 2 作品に授与した。
	国立青少年教育振興機構奨励賞		都道府県代表として、全国大会出場者選考審査において発表者に選出され、全国大会に出場したことを賞し、全国大会出場者全 12 名に授与した。
国立青少年教育振興機構努力賞			都道府県代表として、全国大会出場者選考審査に推薦されたことを賞し、発表者以外の都道府県代表者に授与した。

少年の主張大会応募者総数等

応募者数	349,354 名
参加学校教	3,491 校
全国大会来場者数	257 名
インターネット同時配信視聴者数	1,502 名

都道府県代表者学年別人数

学年	計
中 3	35
中 2	10
中 1	2
計	47

少年の主張全国大会を振り返って

＜参考資料＞

「少年の主張全国大会」への都道府県出場状況

平成 21 年度から：■内閣総理大臣賞　●文部科学大臣賞　◆国立青少年教育振興機構理事長賞　★審査委員会委員長賞
平成 19 ～ 20 年度：■内閣総理大臣賞　●文部科学大臣奨励賞　▼青少年育成国民会議会長賞
平成 13 ～ 18 年度：■内閣総理大臣賞　●文部科学大臣奨励賞　▼青少年育成国民会議会長特別賞　★審査委員会特別賞
平成 12 年度まで：■内閣総理大臣賞　◎総務庁長官賞　●文部大臣賞　★審査委員会特別賞　＊審査委員長激励賞

※○は、上記受賞者以外の出場都道府県

ブロック		県名	S54	S55	S56	S57	S58	S59	S60	S61	S62	S63	H1	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	県名
1 北海道・東北	1	北海道	◎	○		○					○					●		○	○	○				○				北海道
	2	青森県						○				○					■											青森県
	3	岩手県	○	○		○			○	○											○				○	○		岩手県
	4	宮城県			○		○	○					○	○	○	○			○		○		○		○			宮城県
	5	秋田県			○				○									●		○		○				●		秋田県
	6	山形県								★		★	●		★	★						■					■	山形県
	7	福島県	○				○				○			◎			★						○	○			★	福島県
2 関東・甲信越静	8	茨城県		○	○		○							●				★	◎			●						茨城県
	9	栃木県	◎			■	◎											◎	○				■					栃木県
	10	群馬県								○	○						＊										○	群馬県
	11	埼玉県				○			★				○			○				○				○				埼玉県
	12	千葉県								○		○	★					○							○		○	千葉県
	13	東京都		○	○	○			○		○	★			★		○	○	★	■			◎		■		○	東京都
	14	神奈川県	○												★	★	○				★					○		神奈川県
	15	新潟県		■	○		●	●	◎		★		★	★	◎							○		◎				新潟県
	16	山梨県	○							○		○		○		○					■					○		山梨県
	17	長野県						○									●							○		★		長野県
	18	静岡県						○				◎								★	○	○	○		★			静岡県
3 中部・近畿	19	富山県		○		○		◎				○				◎		○		○		○		★			★	富山県
	20	石川県		○	○			○	○											○			○					石川県
	21	福井県								○	●		◎		○										○	○		福井県
	22	愛知県							■								○		●									愛知県
	23	三重県	○				○											○		★				○				三重県
	24	岐阜県	◎									○				○		○			○						▼	岐阜県
	25	滋賀県						○	○	○				★	○				○				●				○	滋賀県
	26	京都府								○	○	★				○						○						京都府
	27	大阪府	◎		●	○									○						○				●			大阪府
	28	兵庫県			○	◎					○		○	○					○			○	○	○				兵庫県
	29	奈良県	○				○						○	★			○				★			●		○		奈良県
	30	和歌山県					○				○		★				★								★	○		和歌山県
4 中国・四国	31	鳥取県							○			●															○	鳥取県
	32	島根県					○	○		◎					■			○		●	◎				○	○	○	島根県
	33	岡山県	◎								◎		○	○			★		■				★					岡山県
	34	広島県		◎		●													○				○					広島県
	35	山口県			○			○											○			◎						山口県
	36	徳島県				○										○							○		○			徳島県
	37	香川県	○	●					○	○					○									○		○		香川県
	38	愛媛県	○		■						★	■		■		■	○	○		○	○	★						愛媛県
	39	高知県					■						○									○						高知県
5 九州	40	福岡県	○	○			○											○	★									福岡県
	41	佐賀県	◎		○			○					■		●					○								佐賀県
	42	長崎県						■	●		■					★						○				■	○	長崎県
	43	熊本県								○		○					○			◎	○	○		○				熊本県
	44	大分県	○			○	○		○						○										○			大分県
	45	宮崎県					○					○	○	○		★			○				○				●	宮崎県
	46	鹿児島県			◎	○				●				○	○						●		○	■	▼	○		鹿児島県
	47	沖縄県		○						★	○						◎	■			○					▼	○	沖縄県
		合計	16	11	12	12	13	12	12	13	13	13	13	12	13	13	13	13	13	12	13	13	13	12	12	13	13	

平成 21 年度から：■内閣総理大臣賞　●文部科学大臣賞　◆国立青少年教育振興機構理事長賞　★審査委員会委員長賞
平成 19 ～ 20 年度：■内閣総理大臣賞　●文部科学大臣奨励賞　▼青少年育成国民会議会長賞
平成 13 ～ 18 年度：■内閣総理大臣賞　●文部科学大臣奨励賞　▼青少年育成国民会議会長特別賞　★審査委員会特別賞
平成 12 年度まで：■内閣総理大臣賞　◎総務庁長官賞　●文部大臣賞　★審査委員会特別賞　＊審査委員長激励賞

※○は、上記受賞者以外の出場都道府県

ブロック		県名	H 16	H 17	H 18	H 19	H 20	H 21	H 22	H 23	H 24	H 25	H 26	H 27	H 28	H 29	H 30	R 1	R 2	R 3	R 4	R 5	R 6	出場回数	県名
1 北海道・東北	1	北海道			○																○	★		12	北海道
	2	青森県																						3	青森県
	3	岩手県	●	●			○	○		★		○	○			○	○							17	岩手県
	4	宮城県					○	●	○			■		○		○		★	○	○	★		■	22	宮城県
	5	秋田県	○			○			○		○			○										11	秋田県
	6	山形県		★									●		○		■			○		●	★	14	山形県
	7	福島県			○	○				■	★				○			○	○					15	福島県
2 関東・甲信越静	8	茨城県	○	○		○	○					○										○		13	茨城県
	9	栃木県	★		○					○			○		○				●		◆			13	栃木県
	10	群馬県			○									★		◆				◆				8	群馬県
	11	埼玉県				●								○			○						○	10	埼玉県
	12	千葉県				○					■	○				○				○			●	12	千葉県
	13	東京都	○	▼					○	◆			○	●				■						21	東京都
	14	神奈川県													○						○	○		9	神奈川県
	15	新潟県					○	★	○	●					★	■								17	新潟県
	16	山梨県						○			○	○						◆		●	■			13	山梨県
	17	長野県	○		○		○						○				○		○			○		11	長野県
	18	静岡県		○				◆	■		○						★	★	★				○	15	静岡県
3 中部・近畿	19	富山県	▼		○		▼	○	○						○							○	○	18	富山県
	20	石川県															○	○						8	石川県
	21	福井県									●		○											8	福井県
	22	愛知県	○	○	▼	■			●		○	★		○		★	★		◆		○	◆	★	17	愛知県
	23	三重県		○						○				○	◆			○						10	三重県
	24	岐阜県								○					■				○	■	○		○	12	岐阜県
	25	滋賀県	○						○				○							○	★			13	滋賀県
	26	京都府				○							○			○		○		○		○		11	京都府
	27	大阪府		○							○	○		◆					○					11	大阪府
	28	兵庫県				○	○	○				◆												13	兵庫県
	29	奈良県			○			★		○						○	○							13	奈良県
	30	和歌山県		○			○																	8	和歌山県
4 中国・四国	31	鳥取県									○								○			■		6	鳥取県
	32	島根県		○	○		○	★		○			★		○	●	●	○	★	○	○	○	○	25	島根県
	33	岡山県					○							○		○								10	岡山県
	34	広島県			○				○					■	●					○	○			10	広島県
	35	山口県	■									○					○						○	8	山口県
	36	徳島県	★	○		○					○													8	徳島県
	37	香川県																						7	香川県
	38	愛媛県				▼			◆									○						14	愛媛県
	39	高知県						○		○		○	◆											7	高知県
5 九州	40	福岡県	○										■	○		○						○		10	福岡県
	41	佐賀県				○				○														8	佐賀県
	42	長崎県							★			○			○						●			11	長崎県
	43	熊本県	○		●		■	○			◆				○		◆	●	★	★			◆	18	熊本県
	44	大分県						■				●					○	○						10	大分県
	45	宮崎県		■					○															10	宮崎県
	46	鹿児島県		○	■	○										★			■		○	○		17	鹿児島県
	47	沖縄県					●			○	○		★	★						★			○	15	沖縄県
		合計	13	13	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	572	

「少年の主張全国大会」応募者数の推移

開催年度	開催回数	参加学校数	応募者総数（人）	中学校在学者数（人）	在学者数に対する応募者の割合
1979（昭和 54）年	第 1 回	–	–	約 496 万 7 千	–
1980（昭和 55）年	第 2 回	–	–	約 509 万 4 千	–
1981（昭和 56）年	第 3 回	–	約 50,000	約 529 万 9 千	0.9%
1982（昭和 57）年	第 4 回	–	約 62,000	約 562 万 4 千	1.1%
1983（昭和 58）年	第 5 回	–	約 120,000	約 570 万 7 千	2.1%
1984（昭和 59）年	第 6 回	–	約 250,000	約 582 万 9 千	4.3%
1985（昭和 60）年	第 7 回	3,524	387,272	約 599 万 0 千	6.5%
1986（昭和 61）年	第 8 回	3,649	269,518	約 610 万 6 千	4.4%
1987（昭和 62）年	第 9 回	4,162	536,526	約 608 万 1 千	8.8%
1988（昭和 63）年	第 10 回	4,011	661,234	約 589 万 6 千	11.2%
1989（平成 元）年	第 11 回	4,359	774,035	約 561 万 9 千	13.8%
1990（平成 2）年	第 12 回	4,103	701,183	約 536 万 9 千	13.1%
1991（平成 3）年	第 13 回	4,176	735,862	約 518 万 8 千	14.1%
1992（平成 4）年	第 14 回	4,185	846,735	約 503 万 7 千	16.8%
1993（平成 5）年	第 15 回	4,166	812,370	約 485 万 0 千	16.7%
1994（平成 6）年	第 16 回	4,165	826,575	約 468 万 1 千	17.7%
1995（平成 7）年	第 17 回	4,021	757,791	約 457 万 0 千	16.6%
1996（平成 8）年	第 18 回	4,333	765,071	約 452 万 7 千	16.9%
1997（平成 9）年	第 19 回	4,245	836,467	約 448 万 1 千	18.7%
1998（平成 10）年	第 20 回	4,170	858,146	約 438 万 1 千	19.6%
1999（平成 11）年	第 21 回	4,213	868,574	約 424 万 4 千	20.5%
2000（平成 12）年	第 22 回	4,187	802,185	約 410 万 4 千	19.5%
2001（平成 13）年	第 23 回	4,185	790,383	約 399 万 2 千	19.8%
2002（平成 14）年	第 24 回	4,059	693,114	約 392 万 9 千	17.6%
2003（平成 15）年	第 25 回	3,841	534,730	約 374 万 8 千	14.3%
2004（平成 16）年	第 26 回	3,822	551,723	約 366 万 4 千	15.1%
2005（平成 17）年	第 27 回	3,944	542,032	約 362 万 6 千	14.9%
2006（平成 18）年	第 28 回	4,015	544,120	約 360 万 2 千	15.1%
2007（平成 19）年	第 29 回	4,044	510,763	約 361 万 5 千	14.1%
2008（平成 20）年	第 30 回	4,018	498,029	約 359 万 2 千	13.9%
2009（平成 21）年	第 31 回	4,126	511,519	約 360 万 0 千	14.2%
2010（平成 22）年	第 32 回	4,204	515,232	約 355 万 8 千	14.5%
2011（平成 23）年	第 33 回	4,142	524,061	約 357 万 3 千	14.7%
2012（平成 24）年	第 34 回	4,127	550,112	約 355 万 2 千	15.5%
2013（平成 25）年	第 35 回	4,257	565,500	約 353 万 6 千	16.0%
2014（平成 26）年	第 36 回	4,172	563,777	約 350 万 4 千	16.1%
2015（平成 27）年	第 37 回	4,253	547,977	約 346 万 5 千	15.8%
2016（平成 28）年	第 38 回	4,278	555,559	約 340 万 6 千	16.3%
2017（平成 29）年	第 39 回	4,188	542,236	約 333 万 3 千	16.3%
2018（平成 30）年	第 40 回	4,298	522,229	約 325 万 1 千	16.1%
2019（令和 元）年	第 41 回	4,171	496,492	約 321 万 8 千	15.4%
2020（令和 2）年	第 42 回	2,660	252,732	約 321 万 1 千	7.9%
2021（令和 3）年	第 43 回	3,741	404,266	約 322 万 9 千	12.5%
2022（令和 4）年	第 44 回	3,748	391,326	約 320 万 5 千	12.2%
2023（令和 5）年	第 45 回	3,884	383,669	約 317 万 7 千	12.1%
2024（令和 6）年	第 46 回	3,491	349,354	約 314 万 1 千	11.1%

※中学校在学者数は、文部科学省令和 6 年度学校基本調査の区分「中学校」を参考にしています。

「少年の主張全国大会」三賞等受賞者一覧

回数	年度	受賞名	都道府県名	学校名	学年	氏名	発表テーマ
第 1 回	昭和	総理府総務長官賞	北海道	利尻町立沓形中学校	3 年	池原広文	校門に思う
	54 年度	総理府総務長官賞	栃木	塩谷町立大宮中学校	3 年	小堀芳広	私の希望
		総理府総務長官賞	岐阜	美山町立美山北中学校	1 年	尾関良子	私の家庭
		総理府総務長官賞	大阪	豊中市立第 5 中学校	1 年	長岡信男	はばたけ未来に
		総理府総務長官賞	岡山	倉敷市立黒崎中学校	1 年	中野恵美	私の訴えたいこと
		総理府総務長官賞	佐賀	武雄市立川登中学校	3 年	松尾直子	少年として訴えたいこと
第 2 回	昭和	内閣総理大臣賞	新潟	村上市立村上第 1 中学校	3 年	江見寛子	今、私達にできること
	55 年度	総理府総務長官賞	広島	福山市立城東中学校	3 年	森雅子	生きる
		文部大臣賞	香川	三野町立三野津中学校	3 年	佐川圭三	「やべち」に学ぶ
第 3 回	昭和	内閣総理大臣賞	愛媛	松山市立雄新中学校	3 年	早川明美	心の糧
	56 年度	総理府総務長官賞	鹿児島	鹿児島市立西紫原中学校	2 年	寺田美重	身障者として訴えたいこと
		文部大臣賞	大阪	堺市立庭代台中学校	3 年	寺西洋子	受験・仲間・心
第 4 回	昭和	内閣総理大臣賞	栃木	佐野市立城東中学校	3 年	松本由紀子	私は教師になりたい
	57 年度	総理府総務長官賞	兵庫	神戸市立御影中学校	1 年	和田浩介	少年として訴えたいこと～エチオピアで見たことから～
		文部大臣賞	広島	呉市立両城中学校	2 年	竹下愛	私の決心
第 5 回	昭和	内閣総理大臣賞	高知	伊野町立伊野中学校	1 年	山勢憲一郎	心をこめて「ありがとう」
	58 年度	総理府総務長官賞	栃木	宇都宮市立星が丘中学校	3 年	福田寿美江	両親に学ぶ
		文部大臣賞	新潟	六日市町立六日町中学校	3 年	関　昭典	今、学校で考えていること
第 6 回	昭和	内閣総理大臣賞	長崎	有家町立有家中学校	2 年	松島吉宏	鳴らないチャイム
	59 年度	総務庁長官賞	富山	小杉町立小杉中学校	1 年	定司美恵子	私の希望
		文部大臣賞	新潟	巻町立巻西中学校	3 年	小林三枝	乗り越えて今
第 7 回	昭和	内閣総理大臣賞	愛知	名古屋市立宮中学校	3 年	大島幸子	今だから言える
	60 年度	総務庁長官賞	新潟	黒川村立黒川中学校	3 年	中野克英	寺に生まれて
		文部大臣賞特別賞	長崎	西有家町立西有家中学校	3 年	安達かよ	その時私は
		文部大臣賞特別賞	埼玉	秩父市立大田中学校	2 年	中田昌伸	僕の家「酪農家の跡継ぎとして」
第 8 回	昭和	内閣総理大臣賞	香川	丸亀市立南中学校	1 年	垂水希実枝	ありのままの姿で
	61 年度	総務庁長官賞	島根	出雲市立出雲第二中学校	3 年	米原のぞみ	「のぞみって・・・」母の言葉に生きる
		文部大臣賞	鹿児島	末吉町立末吉中学校	2 年	白鳥哲也	手話から学んだこと
		特別賞	山形	長井市立北中学校	3 年	佐藤真理	一通の手紙から
		特別賞	沖縄	名護市立東江中学校	1 年	大城洋子	目標に向かって
第 9 回	昭和	内閣総理大臣賞	長崎	県立野崎養護学校中学部	2 年	野田綾子	心で握手
	62 年度	総務庁長官賞	岡山	倉敷市立新田中学校	1 年	岡田良平	僕の弟
		文部大臣賞	福井	武生市立武生第一中学校	2 年	谷口敏和	いじめられっ子を救え！
		特別賞	新潟	津南町立津南中学校	3 年	小野寺優子	恵福園のおばあちゃん
		特別賞	愛媛	伊予市立港南中学校	3 年	一色寿恵	創り出す喜びを胸に
第 10 回	昭和	内閣総理大臣賞	愛媛	松山市立勝山中学校	3 年	瀧本則隆	心をみがく～ロシア人基地の清掃活動を通して～
	63 年度	総務庁長官賞	静岡	島田市立島田第一中学校	3 年	大石寿宏	国際化を考える
		文部大臣賞	鳥取	東郷町立東郷中学校	3 年	石賀正元	生きる幸せ
		特別奨励賞	山形	平田町立飛鳥中学校	3 年	冨樫美起	国際社会への目覚め
		特別奨励賞	東京	私立桐朋女子中学校	3 年	正木綾	勉強より大事な勉強
		特別奨励賞	京都	京北町立周山中学校	3 年	山田義治	人間の生き方について思うこと
第 11 回	平成	内閣総理大臣賞	佐賀	私立佐賀清和中学校	3 年	久冨薫	地球にやさしく
	元年度	総務庁長官賞	福井	鯖江市立中央中学校	2 年	吉田正樹	努力のすばらしさ
		文部大臣賞	山形	鶴岡市立鶴岡第四中学校	3 年	阿部幸	生きているということ
		特別奨励賞	千葉	大多喜町立大多喜中学校	2 年	張本敏美	私の名前は張本敏美
		特別奨励賞	新潟	枕崎市立松浜中学校	3 年	石黒葉子	我が家の躾
		特別奨励賞	和歌山	美里町立美里中学校	3 年	今岡万純	祖父の看病を通して
第 12 回	平成	内閣総理大臣賞	愛媛	今治市立南中学校	2 年	馬越裕美	兄貴に乾杯
	2 年度	総務庁長官賞	福島	福島市立福島第一中学校	3 年	市原亮	部活動から学んだもの
		文部大臣賞	茨城	水戸市立国田中学校	3 年	宮田敦子	自然を大切に
		特別奨励賞	新潟	新井市立新井中学校	3 年	伊藤よし子	この手にかける私の願い
		特別奨励賞	滋賀	栗東町立栗東西中学校	3 年	勝西紀之	人のためになること・・・
		特別奨励賞	奈良	明日香村立聖徳中学校	3 年	飛鳥朝子	母の言葉を聞いて
第 13 回	平成	内閣総理大臣賞	島根	三隅町立三隅中学校	3 年	吉村幸雄	ぼくの夢
	3 年度	総務庁長官賞	新潟	弥彦村立弥彦中学校	3 年	皆川辰男	長男の宿命から
		文部大臣賞	佐賀	私立佐賀清和中学校	2 年	城島澄子	地球のなみだ
		審査委員会特別賞	山形	山形大学教育学部附属中学校	3 年	佐藤郁子	今、私達が街をつくる
		審査委員会特別賞	東京	多摩市立貝取中学校	3 年	末吉優子	ボランティア活動と本当の目
		審査委員会特別賞	神奈川	私立函嶺白百合学園中学校	1 年	早川幸恵	帰りを待つ人々
第 14 回	平成	内閣総理大臣賞	愛媛	松山市立西中学校	2 年	泉正徳	苦しみも悲しみも肥料に
	4 年度	総務庁長官賞	富山	魚津市立西部中学校	2 年	高谷朋花	七十点の両親が最高
		文部大臣賞	北海道	弟子屈町立弟子屈中学校	3 年	横川心	命、育んで
		審査委員会特別賞	山形	山形大学教育学部附属中学校	3 年	伊豆田あかり	心と外見
		審査委員会特別賞	神奈川	横浜市立洋光台第二中学校	3 年	山谷明子	私の夢
		審査委員会特別賞	長崎	福江市立福江中学校	1 年	平山長富	心の鐘
		審査委員会特別賞	宮崎	宮崎市立宮崎東中学校	3 年	泉裕一郎	待っていた学校週五日制
第 15 回	平成	内閣総理大臣賞	青森	十和田市立大深内中学校	2 年	大久保礼子	今を大切に
	5 年度	総務庁長官賞	沖縄	石垣市立石垣中学校	3 年	金城紫穂	ぬくもり
		文部大臣賞	長野	更埴市立屋代中学校	3 年	松沢かおる	プルタブと私
		審査委員会特別賞	福島	本宮町立本宮第一中学校	3 年	国分かおり	「生きる」ということ
		審査委員会特別賞	和歌山	下津町立下津第二中学校	1 年	浜英樹	僕の育った塩津で
		審査委員会特別賞	岡山	倉敷市立福田南中学校	1 年	阪本真一	レイ＝アイクマンそれは本当の友達
		審査委員長激励賞	群馬	県立盲学校中学部	3 年	長峰美枝	私の夢

回数	年度	受賞名	都道府県名	学校名	学年	氏名	発表テーマ
第 16 回	平成	内閣総理大臣賞	沖縄	沖縄市立山内中学校	3 年	稲嶺彩子	夢を持って
	6 年度	総務庁長官賞	栃木	私立作新学院中等部	3 年	高内めぐみ	父が教えてくれたこと
		文部大臣賞	秋田	平鹿町立醍醐中学校	3 年	菅原嘉治	りんご農家に生まれて
		審査委員会特別賞	茨城	協和町立協和中学校	3 年	河田友里	力強く、わたしは生きたい
第 17 回	平成	内閣総理大臣賞	岡山	倉敷市立西中学校	1 年	小野めぐみ	私の戦い
	7 年度	総務庁長官賞	茨城	協和町立協和中学校	2 年	中里成喜	自分自身に克つために
		文部大臣賞	愛知	旭町立旭中学校	3 年	安藤佳代子	旭の町に生きる
		審査委員会特別賞	東京	荒川区立日暮里中学校	1 年	高宗哲	僕たちにできること
		審査委員会特別賞	福岡	勝山町立勝山中学校	2 年	義経千晶	勇気を
第 18 回	平成	内閣総理大臣賞	東京	台東区立下谷中学校	3 年	岡村朋子	蜘蛛の巣
	8 年度	総務庁長官賞	熊本	山鹿市立鶴城中学校	3 年	神崎真由	私の試験
		文部大臣賞	島根	西郷町立西郷南中学校	1 年	常角和代	広い目で
		審査委員会特別賞	静岡	沼津市立第五中学校	3 年	露木義章	A 先輩から学んだこと
		審査委員会特別賞	三重	私立皇學館中学校	2 年	宮本真衣	海の命を守ろう ~ おばあさんに教えられたこと ~
第 19 回	平成	内閣総理大臣賞	山梨	韮崎市立韮崎東中学校	3 年	高保かおり	在宅介護から考えたこと
	9 年度	総務庁長官賞	島根	西郷町立西郷南中学校	3 年	吉田修	きゅうり
		文部大臣賞	鹿児島	有明町立宇都中学校	3 年	坂口潤成	僕の町 - 僕の夢
		審査委員会特別賞	神奈川	山北町立清水中学校	1 年	武尾一興	中学生になって
		審査委員会特別賞	奈良	生駒市立緑ヶ丘中学校	1 年	中地まりあ	自然の魂
第 20 回	平成	内閣総理大臣賞	山形	長井市立長井南中学校	3 年	鈴木智恵	ビナアダム、私の道しるべとして
	10 年度	総務庁長官賞	山口	徳山市立岐陽中学校	3 年	川崎祐樹	同じ人間だから
		文部大臣賞	茨城	阿見町立阿見中学校	3 年	湯原瑞紀	みんなで学校を創ろう
		審査委員会特別賞	愛媛	肱川町立肱川中学校	3 年	竹本咲子	うちは五人家族
第 21 回	平成	内閣総理大臣賞	栃木	西那須野町立西那須野中学校	3 年	松林朝子	家族と支えあう中で
	11 年度	総務庁長官賞	東京	港区立青山中学校	3 年	秋田絵麻	本当の幸せとは・・・
		文部大臣賞	滋賀	石部町立石部中学校	3 年	中川智香子	さわやかな学校をめざして ~ トイレからの発信 ~
		審査委員会特別賞	岡山	倉敷市立西中学校	3 年	花田春香	あなたは、我らが日本愛してますか？
第 22 回	平成	内閣総理大臣賞	鹿児島	喜界町立第二中学校	3 年	前泊佑香	島うたの心を伝えたい
	12 年度	総務庁長官賞	新潟	六日町立六日町中学校	1 年	天海琢磨	ぼくは僕
		文部大臣奨励賞	奈良	私立智辯学園中学校	1 年	北側真由佳	私のバリアフリーの第一歩
		審査委員会特別賞	富山	高岡市立南星中学校	3 年	炭谷英信	言葉の思い出から学んだもの
第 23 回	平成	内閣総理大臣賞	東京	足立区立第十四中学校	1 年	荒谷真理子	努力が教えてくれた事
	13 年度	文部科学大臣奨励賞	大阪	大阪明星学園明星中学校	3 年	植田倫啓	「ケータイ」と「僕」
		国民会議会長特別賞	鹿児島	志布志町立志布志中学校	2 年	西国領君嘉	日本の心を舞う
		審査委員会特別賞	静岡	下田市立稲生沢中学校	3 年	河井千佳	私の個性
		審査委員会特別賞	和歌山	和歌山市立東和中学校	3 年	岩橋聖恵	妹の笑顔
第 24 回	平成	内閣総理大臣賞	長崎	島原市立第三中学校	3 年	西誠	これから頑張るんだ
	14 年度	文部科学大臣奨励賞	秋田	神岡町立平和中学校	3 年	杉澤綾香	ホームスティとホストファミリー体験記
		国民会議会長特別賞	沖縄	浦添市立港川中学校	2 年	渡慶次オースティン誠	ダブルの人生を過ごしたい
		審査委員会特別賞	長野	大町市立第一中学校	3 年	柴原理志	揺るがない想い
第 25 回	平成	内閣総理大臣賞	山形	山形市立蔵王第一中学校	2 年	澤田充史	僕の見たヒロシマ
	15 年度	文部科学大臣奨励賞	宮崎	山之口町立山之口中学校	1 年	徳留彩乃	私になりたい
		国民会議会長特別賞	岐阜	七宗町立神渕中学校	2 年	上野由貴	世界が一つになるために
		審査委員会特別賞	福島	霊山町立霊山中学校	3 年	佐藤寛和	ハンデなんか怖くない - 僕の挑戦 -
		審査委員会特別賞	富山	高岡市立伏木中学校	3 年	飯田優里香	かっちゃが支える伏木の絆
第 26 回	平成	内閣総理大臣賞	山口	長門市立深川中学校	2 年	中嶋詩織	ともに生きる
	16 年度	文部科学大臣奨励賞	岩手	北上市立南中学校	3 年	菅原周平	噺の言葉と言葉の話
		国民会議会長特別賞	富山	氷見市立南部中学校	2 年	沈道　静	茶道の香りが教えてくれたこと
		審査委員会特別賞	栃木	真岡市立真岡中学校	3 年	菱沼優希	受け継がれる命 - その重さを ・・・・・・
		審査委員会特別賞	徳島	那賀川町立那賀川中学校	3 年	坪井克裕	今、訴えたいこと
第 27 回	平成	内閣総理大臣賞	宮崎	三股町立三股中学校	3 年	福田聖伍	命をつなぐアサガオ
	17 年度	文部科学大臣奨励賞	岩手	盛岡市立上田中学校	3 年	坂本潤奈	私は地球人
		国民会議会長特別賞	東京	墨田区立立花中学校	3 年	渡辺隆介	今に生かそう「江戸仕草」を
		審査委員会特別賞	山形	南陽市立宮内中学校	3 年	平　暁祐	「とんと音」を未来へ
第 28 回	平成	内閣総理大臣賞	鹿児島	姶良町立山田中学校	1 年	新薗祐花	今を生きる私
	18 年度	文部科学大臣奨励賞	熊本	南阿蘇村立白水中学校	3 年	後藤奈々	私と沖縄
		国民会議会長特別賞	愛知	豊田市立崇化館中学校	3 年	蒋ぶんてい	為什公、そして謝々
第 29 回	平成	内閣総理大臣賞	愛知	豊田市立美里中学校	3 年	武田聡美	「命」を生きる人との出会い
	19 年度	文部科学大臣奨励賞	埼玉	加須市立昭和中学校	2 年	町田卓哉	何だっていいんだぁ
		国民会議会長特別賞	愛媛	内子町立大瀬中学校	1 年	東影喜子	猪の涙
第 30 回	平成	内閣総理大臣賞	熊本	産山村立産山中学校	3 年	中村那津三	なぜ母牛「あやか」は死んだのか
	20 年度	文部科学大臣奨励賞	沖縄	石垣市立大浜中学校	3 年	新城利絵	島の心をメロディにのせて
		国民会議会長特別賞	富山	高岡市立志貴野中学校	3 年	小久保緑	田んぼと私
第 31 回	平成	内閣総理大臣賞	大分	竹田市立竹田中学校	3 年	廣瀬岳	メッセージ ~ 特攻基地・知覧 ~
	21 年度	文部科学大臣賞	宮城	気仙沼市立気仙沼中学校	3 年	志田晶	私も「小さな波」となって
		国立青少年教育振興機構理事長賞	静岡	牧之原市立相良中学校	3 年	瀧谷美紀	支えられた私
		審査委員会委員長賞	新潟	村上市立平林中学校	3 年	小池尚輝	音のない世界、声のない会話
		審査委員会委員長賞	奈良	智辯学園奈良カレッジ中学部	3 年	小川歌穂	スマイルと真心はタダ
		審査委員会委員長賞	島根	安来市立広瀬中学校	3 年	田邊光	故郷を思って
第 32 回	平成	内閣総理大臣賞	静岡	沼津市立第三中学校	3 年	内村綸笑	命
	22 年度	文部科学大臣賞	愛知	豊田市立足助中学校	3 年	藤井成一	父の言葉の意味を知って
		国立青少年教育振興機構理事長賞	愛媛	新居浜市立西中学校	3 年	飯尾まい	命のチキンカレー
		審査委員会委員長賞	長崎	佐世保市立黒島中学校	3 年	松本朋之	黒島だからこそ
第 33 回	平成	内閣総理大臣賞	福島	いわき市立勿来第二中学校	3 年	瓜生健悟	震災を乗り越えて
	23 年度	文部科学大臣賞	新潟	柏崎市立第一中学校	3 年	西澤望美	過去と今と未来を生きる
		国立青少年教育振興機構理事長賞	東京	葛飾区立常盤中学校	2 年	齊藤麗香	家族の本当の意味
		審査委員会委員長賞	岩手	陸前高田市立気仙中学校	3 年	小笠原和恵	高らかに　響け

回数	年度	受賞名	都道府県名	学校名	学年	氏名	発表テーマ
第 34 回	平成	内閣総理大臣賞	千葉	千葉県立千葉中学校	3 年	山本恭輔	リアルに人とつながるということ
	24 年度	文部科学大臣賞	福井	福井県立盲学校	3 年	山本穣梨	私の夢　私の生き方
		国立青少年教育振興機構理事長賞	熊本	宇土市立網田中学校	3 年	加來萌	父と私がふるさと網田を愛する理由
		審査委員会委員長賞	福島	いわき市立中央台北中学校	3 年	山野邉のどか	助け合いのバトン
第 35 回	平成	内閣総理大臣賞	宮城	気仙沼市立小原木中学校	3 年	梶川裕登	忘れないために
	25 年度	文部科学大臣賞	大分	杵築市立杵築中学校	3 年	大柳涼子	マイファミリー
		国立青少年教育振興機構理事長賞	兵庫	赤穂市立有年中学校	3 年	松本優香	十五歳の決意
		審査委員会委員長賞	愛知	豊田市立石野中学校	3 年	安藤明日香	伝統を受け継ぐ
第 36 回	平成	内閣総理大臣賞	福岡	飯塚市立飯塚第一中学校	3 年	山本由菜	子は宝～自分の命より大切なもの
	26 年度	文部科学大臣賞	山形	酒田市立第六中学校	3 年	菅原すみれ	唄い継ぐ想い
		国立青少年教育振興機構理事長賞	高知	中土佐町立久礼中学校	2 年	林萌桃	いのちの花・咲いて
		審査委員会委員長賞	島根	吉賀町立柿木中学校	3 年	河野鉄太	鬼退治
		審査委員会委員長賞	沖縄	那覇市立那覇中学校	2 年	高橋天洋	「中国人」という名の偏見
第 37 回	平成	内閣総理大臣賞	広島	広島市立国泰寺中学校	2 年	藤井志穂	語る思いと聞く思い
	27 年度	文部科学大臣賞	東京	板橋区立中台中学校	3 年	張哲語	中国と日本の狭間にて
		国立青少年教育振興機構理事長賞	大阪	堺市立登美丘中学校	3 年	伊勢川翠	素晴らしい奇跡の集合体
		審査委員会委員長賞	群馬	明照学園樹徳中学校	3 年	蓼沼花音	10 万分の 1.5 の奇跡
		審査委員会委員長賞	沖縄	八重瀬町立東風平中学校	3 年	河野水穂	乗り越えたからこそ見えたもの
第 38 回	平成	内閣総理大臣賞	岐阜	関市立旭ヶ丘中学校	3 年	大見夏鈴	障がいは個性
	28 年度	文部科学大臣賞	広島	広島市立二葉中学校	2 年	牟田悠一郎	戦争を知ること
		国立青少年教育振興機構理事長賞	三重	四日市市立羽津中学校	3 年	中前純奈	伝えたいこと
		審査委員会委員長賞	新潟	五泉市立五泉北中学校	1 年	髙橋心太郎	みんなが幸福な社会を
第 39 回	平成	内閣総理大臣賞	新潟	新潟県立燕中等教育学校	2 年	平澤幸芽	仲間を守る一言
	29 年度	文部科学大臣賞	島根	海士町立海士中学校	3 年	井手上漠	カラフル
		国立青少年教育振興機構理事長賞	群馬	太田市立南中学校	3 年	森田愛美	私は、私の足で生きていく。
		審査委員会委員長賞	愛知	蒲郡市立蒲郡中学校	3 年	荒島彩乃	たった一言が言えなくて
		審査委員会委員長賞	鹿児島	鹿児島市立坂元中学校	2 年	松元一真	本当の平和へ
第 40 回	平成	内閣総理大臣賞	山形	天童市立第三中学校	3 年	岩淵礼姫	人生を駆け抜ける
	30 年度	文部科学大臣賞	島根	隠岐の島町立西郷中学校	1 年	高梨はな	ダブル
		国立青少年教育振興機構理事長賞	熊本	御船町立御船中学校	3 年	坂本優	響け！幸せのメロディー
		審査委員会委員長賞	静岡	浜松市立佐久間中学校	3 年	内山ほの栞	自分を好きになる
		審査委員会委員長賞	愛知	豊田市立井郷中学校	3 年	富田真亜玖	思いやりは言葉を超える
第 41 回	令和	内閣総理大臣賞	東京	筑波大学附属視覚特別支援学校（中学部）	1 年	藤田大悟	心の扉
	元年度	文部科学大臣賞	熊本	熊本大学教育学部附属中学校	3 年	廣岡里奈	私が望む優しい未来は
		国立青少年教育振興機構理事長賞	山梨	北杜市立甲陵中学校	2 年	小松日菜	繋ぐ糸が切れないように
		審査委員会委員長賞	宮城	登米市立佐沼中学校	3 年	加藤海音	十人十色
		審査委員会委員長賞	静岡	静岡市立清水両河内中学校	3 年	望月香琳	地域と共にある生徒会−今、私たちにできること、すべきこと
第 42 回	令和	内閣総理大臣賞	鹿児島	霧島市立横川中学校	3 年	池島音羽	言葉を紡ぐ
	2 年度	文部科学大臣賞	栃木	大田原市立金田北中学校	3 年	荒井千恵理	静から動へ
		国立青少年教育振興機構理事長賞	愛知	豊田市立末野原中学校	3 年	戸塚優羽	目には見えないもの
		審査委員会委員長賞	静岡	浜松市立北浜中学校	3 年	村松グルン良智美	人生のかけがえのない財産について
		審査委員会委員長賞	島根	松江市立宍道中学校	3 年	武田はぐみ	「らしさ」を輝かせる
		審査委員会委員長賞	熊本	熊本市立出水南中学校	3 年	大田直人	你好ニッポン
第 43 回	令和	内閣総理大臣賞	岐阜	養老町立高田中学校	3 年	細川士禾	認め合うことの大切さ
	3 年度	文部科学大臣賞	山梨	北杜市立甲陵中学校	3 年	平澤朋佳	「心のマスク」をはずして
		国立青少年教育振興機構理事長賞	群馬	太田市立南中学校	3 年	富田樹香	本物の輝き
		審査委員会委員長賞	熊本	宇城市立松橋中学校	3 年	葛谷護	教室
		審査委員会委員長賞	沖縄	宮古島市立久松中学校	1 年	砂川恵里香	私の挑戦
第 44 回	令和	内閣総理大臣賞	山梨	北杜市立甲陵中学校	3 年	前橋真子	あなたの声、心に届け
	4 年度	文部科学大臣賞	長崎	大村市立玖島中学校	3 年	赤川明信	日本を耕す
		国立青少年教育振興機構理事長賞	栃木	大田原市立親園中学校	3 年	阿久津結花	私が育てる「結（ゆい）」
		審査委員会委員長賞	宮城	塩竈市立玉川中学校	3 年	浅野友希	私のスタートライン
		審査委員会委員長賞	滋賀	米原市立米原中学校	3 年	田島桂	水餃子
第 45 回	令和	内閣総理大臣賞	鳥取	米子市立東山中学校	3 年	矢曳未来	私が歩む夢への道
	5 年度	文部科学大臣賞	山形	酒田市立第一中学校	3 年	冨樫蒼汰	大切な家族
		国立青少年教育振興機構理事長賞	愛知	常滑市立常滑中学校	3 年	竹内愛子	ガチャガチャ言っても始まらないか！
		審査委員会委員長賞	北海道	下川町立下川中学校	3 年	三浦かんな	恨みを愛へ
第 46 回	令和	内閣総理大臣賞	宮城	栗原市立栗原南中学校	3 年	ケイバージーバ	一隅を照らす
	6 年度	文部科学大臣賞	千葉	長生村立長生中学校	1 年	松原蒼天	大切な家族
		国立青少年教育振興機構理事長賞	熊本	熊本市立鹿南中学校	3 年	友枝紗寧	ついでにしているだけ
		審査委員会委員長賞	山形	白鷹町立白鷹中学校	3 年	井上愛奈	障害を乗り越えて
		審査委員会委員長賞	愛知	西尾市立鶴城中学校	3 年	村木新	「じゃない方」になって気づいたこと

令和６年度都道府県大会実施概要

都道府県名	主催者		大会名	
	開催期日		会　場	
	発表者数	応募者数	参加学校数	視聴者数
	実　施　内　容			

北海道・東北ブロック（１道６県　応募者数　51,209 名）

※視聴者数の（　）は同時配信視聴者数

1 北海道	北海道、公益財団法人北海道青少年育成協会		令和６年度北海道青少年育成大会（「少年の主張」全道大会）	
	令和６年９月６日（金）		道民活動センター（かでる 2.7）かでるアスビックホール	
	16 名	21,811 名	275 校	400 名（565 名）
	各総合振興局・振興局地区大会の最優秀者 14 名及び札幌市代表者２名による北海道大会を開催。 最優秀賞（北海道知事賞）１名、優秀賞（北海道教育委員会教育長賞・北海道 PTA 連合会会長賞・（公財）北海道青少年育成協会会長賞各１名）、上記４名に北海道コンサドーレ札幌賞を贈呈。審査委員５名			
2 青森県	青少年育成青森県民会議		第 46 回青森県少年の主張大会	
	令和６年９月 10 日（火）		三沢市立第一中学校	
	８名	12 名	８校	310 名（６名）
	県内の中学生から作品を募集し、原稿審査で選考された８名による青森県大会を開催。 最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞５名を選考。審査員５名			
3 岩手県	わたしの主張岩手県大会実行委員会		第 26 回わたしの主張岩手県大会	
	令和６年９月 19 日（木）		田園ホール	
	17 名	4,429 名	143 校	490 名
	地区大会から推薦された 17 名による岩手県大会を開催 最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞３名、審査委員６名			
4 宮城県	青少年のための宮城県民会議、河北新報社		令和６年度少年の主張宮城県大会	
	令和６年９月 27 日（金）		大郷町文化会館	
	13 名	8,663 名	169 校	145 名
	県内 12 地区で地区大会を実施し、地区大会から推薦された代表者 13 名（仙台市は各区１名、仙台地区は２名、他地区は１名）による宮城県大会を開催。 宮城県知事賞１名、青少年のための宮城県民会議会長賞２名、優良賞（他県大会出場者全員）。審査員６名			
5 秋田県	公益社団法人青少年育成秋田県民会議		わたしの主張 2024（第 46 回少年の主張秋田県大会）	
	令和６年９月 25 日（水）		秋田市立勝平中学校	
	10 名	52 名	29 校	440 名
	県北・県央・県南地区で予選大会を開催。各地区大会優秀者９名及び県大会学校推薦者１名の 10 名による秋田県大会を開催。 最優秀賞１名、優秀賞３名、優良賞６名を選考。審査委員６名。			
6 山形県	（公社）山形県防犯協会連合会、山形県青少年育成県民会議、㈱山形新聞社、山形放送㈱		第 63 回山形県少年の主張大会	
	令和６年９月 21 日（土）		山形国際交流プラザ大会議室	
	15 名	5,853 名	80 校	100 名
	各ブロック大会において選考された代表者 15 名（山形６名、最北３名、庄内３名、置賜３名）による山形県大会を開催。最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞２名、奨励賞 10 名を選考。審査員５名			
7 福島県	福島県青少年育成県民会議		第 46 回少年の主張福島県大会	
	令和６年９月 26 日（木）		福島県伊達郡　川俣町中央公民館	
	16 名	10,389 名	165 校	312 名
	各青少年育成市町村会議から推薦された作品の中で、作文審査により選ばれた 15 名及び開催地の中学生１名による福島県大会を開催。最優秀賞１名、優秀賞５名、優良賞 10 名を選考。審査員６名。			

関東・甲信越静ブロック（１都 10 県　応募者数　113,586 名）

8 茨城県	公益社団法人 茨城県青少年育成協会		令和６年度 少年の主張茨城県大会	
	令和６年９月 25 日（水）		美浦村中央公民館　大ホール	
	10 名	10,873 名	134 校	500 名
	各中学校２作品以内の推薦された作品について、主張文審査委員会で選出された作品の作者 10 名による茨城県大会を開催。大会審査により、優秀賞（発表者全員）、茨城県知事賞、茨城県議会議長賞、茨城県教育委員会教育長賞（各１名）、特別賞として、水戸西ライオンズクラブ会長賞（茨城県知事賞受賞者）鹿島アントラーズ賞（各受賞者３名）を選考。審査委員６名			
9 栃木県	栃木県、栃木県教育委員会、（公財）とちぎ未来づくり財団		令和６年度栃木県少年の主張発表大会	
	令和６年９月 21 日（土）		栃木県総合文化センターサブホール	
	16 名	12,566 名	157 校	222 名
	県内８地区で各中学校の代表１名が参加する地区大会を開催し、各地区大会で選出された 16 名による栃木県大会を開催。最優秀賞（栃木県知事賞）１名、優秀賞（栃木県教育委員会教育長賞）３名、奨励賞（栃木県青少年育成県民会議理事長賞）12 名を選考。審査委員９名。			
10 群馬県	群馬県、群馬県教育委員会、群馬県青少年育成推進会議		第 46 回少年の主張群馬県大会	
	令和６年９月 21 日（土）		群馬県総合公社ビル	
	16 名	38,316 名	162 校	191 名
	市町村大会、教育事務所ブロック大会を経て選出された 16 名による群馬県大会を開催。 最優秀賞１名、優秀賞４名、努力賞 11 名を選考。審査委員７名。			
11 埼玉県	埼玉県、埼玉県教育委員会、青少年育成埼玉県民会議		令和６年度少年の主張埼玉県大会	
	令和６年８月 18 日（日）		さいたま共済会館	
	５名	15,189 名	27 校	100 名
	作文審査により選出された５名（中学生の部）による埼玉県大会を開催。 最優秀賞（知事賞）１名、優秀賞（教育長賞）１名、優良賞（県民会議会長賞）３名を選考。			

12 千葉県	千葉県青少年総合対策本部		第 46 回「私の思い」～中学生の主張～千葉県大会	
	令和 6 年 9 月 21 日（土）		蘇我コミュニティセンター多目的ホール	
	12 名	1,034 名	26 校	78 名
	応募原稿により一次・二次の審査を実施し、選出された 12 名による千葉県大会を開催。最優秀賞（県知事賞）1 名、優秀賞 2 名、特別賞 1 名、奨励賞 8 名を選考。審査員 8 名			
13 東京都	東京都		令和 6 年度　中学生の主張東京都大会	
	令和 6 年 9 月 8 日（日）		東京都庁第一本庁舎大会議場	
	10 名	5,466 名	59 校	108 名
	東京都による作文審査を行い、東京都代表選考発表者 10 名及び奨励賞 10 名を選出。東京都代表選考者 10 名による東京都大会を開催。最優秀賞（知事賞）1 名、優秀賞（東京都教育委員会賞）2 名、優良賞 7 名を選考。審査委員 7 名			
14 神奈川県	神奈川県、神奈川県立青少年センター		中学生の主張 in かながわ　発表大会	
	令和 6 年 9 月 29 日（日）		神奈川県立青少年センター スタジオ HIKARI	
	7 名	763 名	31 校	89 名
	作文審査による事前審査会を実施し、発表大会出場者 7 名、奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）受賞者 10 名を選出。発表大会出場者 7 名による神奈川県大会を開催。 最優秀賞（神奈川県知事賞）1 名、優秀賞 6 名（神奈川県教育長賞・神奈川県福祉子どもみらい局長賞・神奈川新聞社賞・NHK 横浜放送局長賞・ｔｖｋかながわ MIRAI 賞・神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長賞各 1 名）を選考。審査員 5 名			
15 新潟県	新潟県・新潟県教育委員会・新潟市教育委員会・新潟県青少年健全育成県民会議		令和 6 年度新潟県少年の主張大会―わたしの主張―	
	令和 6 年 9 月 22 日（日）		見附市文化ホール　アルカディア	
	14 名	15,731 名	143 校	200 名
	県内を 13 地区に分け、地区ごとに発表者を選出。各地区大会において選出された 14 名による新潟県大会を開催。 最優秀賞 1 名、優秀賞 2 名、奨励賞 11 名（奨励賞の内、審査員特別賞 1 名）を選考。審査委員 9 名			
16 山梨県	公益財団法人山梨県青少年協会・青少年育成山梨県民会議実行委員会		第 46 回少年の主張山梨県大会～わたしの主張 2024 ～	
	令和 6 年 8 月 24 日（土）		山梨県立青少年センター　別館　多目的ホール	
	10 名	327 名	16 校	41 名
	中学校において校内審査後、校長推薦のうえ、県大会に応募。事前審査において発表者を選出。選出された 10 名による山梨県大会を開催。最優秀賞（山梨県教育長賞）1 名、優秀賞（山梨放送賞・NHK 甲府放送局長賞・テレビ山梨社長賞・山梨日日社賞各 1 名）（青少年育成山梨県民会議会長賞 5 名）を選考。審査員 7 名			
17 長野県	長野県将来世代応援県民会議、長野県子ども・若者育成支援推進本部（長野県、長野県教育委員会、長野県警察本部）		令和 6 年度少年の主張長野県大会	
	令和 6 年 9 月 20 日（金）		長野市生涯学習センター　大学習室 2・3	
	8 名	815 名	20 校	42 名
	各地域事務局長から推薦された 8 名（各地域事務局から 1 名）による長野県大会を開催。長野県知事賞 1 名、優秀賞 2 名、優良賞 5 名			
18 静岡県	静岡県教育委員会、静岡県青少年育成会議		わたしの主張静岡県大会	
	令和 6 年 8 月 19 日（月）		藤枝市民会館	
	13 名	12,506 名	144 校	350 名
	作文審査会により静東・静西教育事務所管内 8 名、静岡市 2 名、浜松市 2 名、開催市 1 名の選出された 13 名による静岡県大会を開催。最優秀賞 1 名、優秀賞 3 名、優良賞 9 名、共感賞 1 名。審査委員 7 名。			

中部・近畿ブロック（2 府 10 県　応募者数　119,605 名）

19 富山県	富山県、富山県教育委員会、青少年育成富山県民会議		第 46 回中学生の主張富山県大会	
	令和 6 年 8 月 21 日（水）		パレブラン高志会館　カルチャーホール	
	10 名	1,727 名	18 校	60 名
	各中学校から 3 点程度の推薦された作品を市町村教育委員会が 10 点程度選考・推薦し、審査委員会において作文審査により選出された 10 名による富山県大会を開催。最優秀賞 1 名、審査委員特別賞 2 名、優秀賞 7 名を選考。審査員 8 名			
20 石川県	石川県健民運動推進本部、石川県、石川県教育委員会		令和 6 年度少年の主張石川県大会	
	令和 6 年 9 月 19 日（木）		動画開催のため無し	
	16 名	2,551 名	58 校	0 名
	各地区大会から選出された 16 名（各地区 4 名ずつ）による石川県大会を開催。 最優秀賞（石川県知事賞）1 名、優秀賞（石川県教育委員会賞）2 名、奨励賞（石川県健民運動推進本部長賞）13 名を選考。審査委員 6 名　※台風 10 号の影響で集合開催を中止し、動画審査。			
21 福井県	（公財）青少年育成福井県民会議、福井県青少年総合対策本部		令和 6 年度「少年の主張」コンクール福井県大会	
	令和 6 年 8 月 21 日（水）		越前市いまだて芸術館	
	9 名	5,442 名	30 校	300 名
	ブロック審査で選出された、9 名により福井県大会を開催。 福井県知事賞 1 名、青少年育成福井県民会議会長賞 1 名、国際ソロプチミスト福井会長賞 1 名、福井ライオンズクラブ賞 1 名、福井新聞社賞 1 名、NHK 福井放送局賞 1 名、FBC 賞 1 名、福井テレビ賞 1 名、青少年育成福井県民会議賞 1 名　審査員 11 名			
22 愛知県	愛知県、愛知県青少年育成県民会議		令和 6 年度少年の主張愛知県大会	
	令和 6 年 8 月 23 日（金）		新城地域文化広場	
	14 名	35,312 名	247 校	580 名
	学校選考、地区ブロック審査を経て選ばれた 14 名による愛知県大会を開催。 14 名全員に奨励賞を授与するとともに、審査委員 7 名により、最優秀賞 1 名、優秀賞 4 名、共感賞 1 名を選考。			

23 三重県	公益財団法人三重こどもわかもの育成財団		中学生のメッセージ 2024	
	令和 6 年 9 月 4 日（水）（書面審査）		三重県立みえこどもの城	
	14 名	9,215 名	72 校	0 名
	提出された作品の中から第 1 次、2 次選考を経て選ばれた 14 名による三重県大会を開催。 最優秀賞 1 名、優秀賞 3 名、優良賞 10 名を選考。審査委員 9 名　※台風 10 号の接近により書面審査			
24 岐阜県	公益社団法人岐阜県青少年育成県民会議、岐阜県		第 46 回少年の主張岐阜県大会　～わたしの主張 2024 ～	
	令和 6 年 8 月 2 日（金）		岐阜市文化センター　小劇場	
	17 名	13,227 名	175 校	380 名
	市町村単位で審査が行われ、各圏域より推薦された計 17 名による岐阜県大会を開催。 県知事賞 1 名、青少年育成県民会議会長賞 1 名、県教育委員会賞 1 名、岐阜新聞・岐阜放送賞各 1 名、優秀賞 13 名を選考。審査委員 7 名			
25 滋賀県	滋賀県青少年育成県民会議		滋賀県第 27 回中学生広場「私の思い 2024」県広場	
	令和 6 年 8 月 24 日（土）		大津市和邇文化センター	
	12 名	24,568 名	99 校	280 名
	市町民会議から推薦された意見作文の中から県広場での発表者 12 名を選考し、滋賀県大会を開催。 最優秀賞（知事賞）1 名、優秀賞（議長賞・教育長賞）2 名、優良賞（県民会議会長賞）9 名を選考。審査員 9 名。			
26 京都府	（公社）京都府青少年育成協会　京都府 PTA 協議会　京都市 PTA 連絡協議会		第 46 回「少年の主張京都府大会」	
	令和 6 年 9 月 22 日（日・祝）		京都府立総合社会福祉会館　ハートピア京都　「大会議室」	
	15 名	5,157 名	35 校	106 名
	応募された作文の中から、審査委員会により選出された大会発表者 15 名による京都府大会を開催。 京都府知事賞 1 名、京都府青少年育成協会会長賞 1 名、京都府教育委員会教育長賞 1 名、京都市教育長賞 1 名、京都府市町村教育委員会連合会会長賞 1 名、京都府公立中学校長会会長賞 1 名、京都府 PTA 協議会会長賞 1 名、京都市 PTA 連絡協議会会長賞 1 名、京都新聞賞 1 名、KBS 京都賞 1 名、京都府青少年育成協会会長奨励賞 5 名を選考。審査委員 9 名。			
27 大阪府	青少年育成大阪府民会議、大阪府		第46回「中学生の主張大阪府大会～伝えよう！君のメッセージ～」	
	令和 6 年 8 月 18 日（日）		大阪市立男女共同参画センター　東部館（クレオ大阪東）	
	10 名	1,479 名	15 校	234 名
	府内の応募作品の中から選考委員による作文審査において選出された 10 名以内による大阪府大会を開催。最優秀賞（大阪府知事賞）1 名、優秀賞（大阪府教育委員会賞・NHK 大阪放送局長賞・国際ソロプチミスト大阪賞）3 名、優良賞（審査委員特別賞）1 名、優良賞 5 名を選考。審査委員 6 名			
28 兵庫県	公益財団法人　兵庫県青少年本部		少年の主張兵庫県大会「中学生のメッセージ 2024」	
	令和 6 年 9 月 28 日（土）		兵庫県民会館けんみんホール	
	10 名	8,376 名	88 校	110 名
	県内 10 地区において原稿審査及び地方大会で選出された 10 名による兵庫県大会を開催。 知事賞 1 名、青少年本部理事長優秀賞 2 名、青少年本部理事長奨励賞 7 名、審査員 7 名			
29 奈良県	奈良県、奈良県教育委員会、奈良県子ども・若者支援団体協議会		第 46 回「少年の主張」奈良県大会～わたしの主張 2024 ～	
	令和 6 年 9 月 8 日（日）		葛城市當麻文化会館	
	10 名	3,589 名	19 校	250 名
	作文審査により選出された 10 名による奈良県大会を開催。最優秀賞 1 名、優秀賞 2 名、優良賞 7 名、努力賞 90 名。審査員 8 名			
30 和歌山県	公益社団法人和歌山県青少年育成協会		「少年メッセージ 2024」和歌山県大会	
	令和 6 年 7 月 27 日（土）		上富田文化会館	
	17 名	8,962 名	105 校	250 名
	応募作文から、和歌山市及び各振興局単位で選出された各 2 名（県大会開催地方は 4 名）合計 18 名による和歌山県大会を開催（当日 1 名欠席）。最優秀賞 1 名、優秀賞 3 名、入賞 14 名を選考。審査委員 8 名			

中国・四国ブロック（9 県　応募者数　39,183 名）

31 鳥取県	青少年育成鳥取県民会議		令和 6 年度「第 46 回少年の主張鳥取県大会」	
	令和 6 年 9 月 13 日（金）		鳥取市立西中学校多目的室	
	12 名	194 名	6 校	231 名
	応募作品の中から書類審査を行い、選出された 12 名による鳥取県大会を開催。 最優秀賞（鳥取県知事杯）1 名、優秀賞（県教育長杯、県議会議長杯、県市長会長杯、県町村会長杯、新日本海新聞社長杯）5 名、優良賞 6 名を選考。審査委員 6 名			
32 島根県	青少年育成島根県民会議		令和 6 年度　少年の主張島根県大会	
	令和 6 年 9 月 25 日（水）		雲南市木次経済文化会館（チェリヴァホール）	
	16 名	16,609 名	96 校	383 名
	地区中学校より推薦された 16 名による島根県大会を開催。 県知事賞 1 名、県教育長賞 1 名、県警察本部長賞 1 名、県民会議会長賞 1 名、審査委員特別賞 2 名、優秀賞 10 名を選出。審査委員 7 名。			
33 岡山県	公益社団法人岡山県青少年育成県民会議		第 46 回少年の主張岡山県大会「いま、中学生が訴えたいこと」	
	令和 6 年 8 月 22 日（木）		岡山県天神山文化プラザ	
	12 名	3,094 名	11 校	56 名
	応募作品の中から作文審査で決定した 12 名の入賞者による岡山県大会を開催。 最優秀賞 1 名、優秀賞 4 名、優良賞 7 名を選考。審査員 7 名。			
34 広島県	公益社団法人青少年育成広島県民会議、広島県中学校話し方連盟		「少年の主張」・中学生話し方大会 2024	
	令和 6 年 9 月 7 日（土）		広島県社会福祉会館	
	16 名	3,313 名	42 校	70 名
	提出された原稿を主催者において審査し、選考された 16 名による広島県大会を開催。 広島県知事賞 1 名、（公社）青少年育成広島県民会議会長賞 1 名、広島県中学校話し方連盟会長賞 1 名、国際ソロプチミスト広島会長賞 1 名、広島清流ライオンズクラブ会長賞 1 名、優秀賞 4 名、基準特別賞 1 名、優良賞 6 名を選考。審査員 11 名			

35 山口県	山口県青少年育成県民会議		少年の主張コンクール山口県大会	
	令和６年８月24日（土）		山口県教育会館ホール	
	８名	762名	12校	120名
	一次審査（各市町教育委員会等）及び二次審査（青少年育成県民会議）において作文審査により選出された８名による山口県大会を開催。最優秀（知事賞）１名、優秀（教育長賞）１名、優秀（県民会議会長賞）２名（例年１名だが、今年は２名）、優良４名を選考。審査委員５名			
36 徳島県	青少年育成徳島県民会議 徳島県保護司会連合会 徳島県中学校長会		第70回青少年非行防止県下中学校生徒弁論大会 令和６年度少年の主張徳島県大会	
	令和６年９月20日（金）		アスティとくしま　ときわホール	
	10名（２名欠席）	6,804名	69校	26名
	中学校生徒弁論大会において保護区単位ブロック別で選出された代表10名による徳島県大会を開催。 最優秀賞１名、優秀賞第一席１名、優秀賞８名を選考。審査委員９名			
37 香川県	第74回“社会を明るくする運動”香川県推進委員会、青少年育成香川県民会議、香川県中学校長会、香川県保護司会連合会		第75回香川県中学校生徒弁論大会・第46回少年の主張香川県大会	
	令和６年７月８日（月）		レクザムホール　小ホール	
	13名	6,190名	43校	400名
	地区大会の最優秀受賞者（高松地区は５名）13名による香川県大会を開催。最優秀賞１名、優秀賞３名を選考。審査員７名。			
38 愛媛県	愛媛県・愛媛県青少年育成協議会・愛媛県教育委員会		令和６年度愛媛の未来をひらく少年の主張大会	
	令和６年９月７日（土）		愛媛県生涯学習センター　県民小劇場	
	10名	1,934名	14校	150名
	主催者において、原稿審査により大会発表者10名による愛媛県大会を開催。 最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞７名を選考。審査委員５名			
39 高知県	青少年育成高知県民会議		令和６年度第46回「少年の主張」高知県大会	
	令和６年９月８日（日）		高知市春野文化ホールピアステージ	
	10名	283名	10校	82名
	作文審査により選出された10名による高知県大会を開催。最優秀賞１名、会長賞１名、優秀賞２名、優良賞６名を選考。審査委員５名			

九州ブロック（８県　応募者数　25,771名）

40 福岡県	福岡県青少年育成県民会議、柳川市青少年育成市民会議、柳川市		令和６年度少年の主張福岡県大会	
	令和６年９月１日（日）		柳川市民文化会館	
	16名	2,272名	74校	218名
	10名の審査委員による２度の事前審査により選考された、上位16名による福岡県大会を開催。 福岡県知事賞１名、福岡県教育委員会賞１名、柳川市長賞１名、審査員特別賞１名、優秀賞第１席１名、優秀賞11名を選考。			
41 佐賀県	佐賀県、佐賀県教育委員会、佐賀県青少年育成県民会議		第46回少年の主張佐賀県大会	
	令和６年８月24日（土）		アバンセホール	
	10名	589名	14校	220名
	各学校において募集した応募者の中から推薦のあった42作品について予選審査（書面審査）を行い、選出された10名による佐賀県大会を開催。最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞７名を選考。審査委員10名（予選審査委員４名、本選審査委員６名）			
42 長崎県	長崎県青少年育成県民会議		令和６年度「少年の主張長崎県大会～わたしの主張2024～」	
	令和６年８月23日（金）		とぎつカナリーホール	
	12名	8,893名	120校	240名
	第１次選考は、各市町主管課で、県立・国立・私立の学校について本県民会議で行い、第２次選考は本県民会議が嘱託した審査員が行い、選出された12名による長崎県大会を開催。最優秀（青少年育成県民会議賞）１名、優秀（長崎新聞社賞、ＮＨＫ賞、長崎県校長会賞、長崎県ＰＴＡ連合会賞、ココロねっこ賞）５名、優良賞６名、努力賞４名を選考。審査員６名			
43 熊本県	熊本県・熊本県教育委員会・熊本県青少年育成県民会議		第46回「少年の主張」熊本県大会	
	令和６年９月23日（月）		熊本県庁（地下大会議室）	
	13名	1,615名	43校	60名
	事前審査会での作文審査により選出された各地区代表の11名、開催地推薦の２名の計13名による熊本県大会を開催。最優秀賞１名、優秀賞２名、奨励賞３名、入選７名を選考。審査委員６名。			
44 大分県	大分県青少年育成県民会議		令和６年度（第46回）「少年の主張大分県大会」	
	令和６年８月22日（木）		佐伯市鶴見地域コミュニティセンター	
	10名	1,868名	27校	400名
	第１次、第２次審査を経て選ばれた10名（当日体調不良により１名欠席）による大分県大会を開催。 最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞７名、県教育長賞１名、共感賞１名を選考。審査委員５名（共感賞選考は中学生審査委員３名）			
45 宮崎県	公益社団法人宮崎県青少年育成県民会議		令和６年度「青少年の主張」宮崎県大会	
	令和６年８月６日（火）		宮崎市民プラザ　オルブライトホール	
	10名	1,100名	13校	251名
	各学校から応募された作品の中から、事前の作文審査により選出された10名が宮崎県大会で発表。 最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞７名を選考。審査委員５名			
46 鹿児島県	鹿児島県青少年育成県民会議、鹿児島県		第46回少年の主張鹿児島県大会	
	令和６年８月４日（日）		鹿児島県青少年会館大ホール	
	10名	1,746名	37校	90名
	各学校から提出された作文を審査。審査委員会により選出された10名による鹿児島県大会を開催。 最優秀賞１名，優秀賞２名，優良賞７名を選考。審査委員７名。			
47 沖縄県	公益社団法人沖縄県青少年育成県民会議		第46回沖縄県「少年の主張大会」	
	令和６年９月27日（金）		与那原町上の森かなちホール	
	12名	7,688名	111校	177名
	市町村大会を実施し、その代表で地区大会（６地区）を開催する。地区大会により選出された12名による沖縄県大会を開催。最優秀賞１名、優秀賞２名、審査員特別賞１名、優良賞７名を選考。審査委員６名。			

第 46 回少年の主張全国大会報告書～わたしの主張 2024 ～

令和 7 年 3 月発行

編集　国立青少年教育振興機構
〒 151-0052　東京都渋谷区代々木神園町 3 番 1 号
https://www.niye.go.jp
担当　教育事業部事業企画課
電話：03-6407-7726　FAX：03-6407-7699

※転載の際は上記へご連絡ください。

National Institution For Youth Education
国立青少年教育振興機構

体験の風をおこそう